

「彼方」第三号 目次

執筆者紹介

1

槐祭号特別巻頭インタビュー

「中島敦の可能性を追って」

2

リレー小説

「ばぶばぶ不条理生活」

鹿々書々／赤羽濤

任火物実／蛍草沙空

15

「親切な医師」

遠野燈／沢みどり

林絵理香／霜雪海十羽

24

「月暈」

雨合千葉／薄暮ルク

白木虎／準清奏弥

59

お題小説

「ホワイト・ホワイト」

遠野燈

84

「ボタンが一つ」

鹿々書々

99

自由小説

「秋雨」

赤羽濤

100

「神の誕生」

来田千斗

104

「花を唄う」

白木虎

106

「中空」

雨合千葉

111

詩

「まだのカンマ」

白木虎

130

「Re r a i n」

白木虎

132

連歌

文芸部の本棚（おすすめ本紹介）

137

文芸部のつぎやき

141

編集後記

145

【執筆者紹介(中高五十音順)】

学年	執筆者	ひとこと！
中学	赤羽滯	小学校の思い出や友達を段々と忘れていくことに内心ホッとしている今日この頃。
	沢みどり	夏が来ました。汗の多い私にとって夏は辛い季節です。健康の証と言われますが、この辛さを分かっているのでしょうか……。
	準清奏弥	いつか闇成分のないファンタジーを書けるようになればいいなあと常々思っています。
	遠野燈	蝉って鳴いてるときはうるさいけど、鳴かなくなるとなんか寂しいかもなあ、と少し思います。
	任火物実	来年で高校生と言う実感がわきません。三年間って本当に短いですね……
	薄暮ルク	期末テストの頃は早く休みになれと願っていたのに、いざ長期休みになるとすることがなく暇すぎます。
	蛍草沙空	長編小説が書けるようになりたいと思う今日この頃です。
	来田千斗	ペンネームの読みは「らいだ せん」とです。lighterとriderが来田にかかっています。
高校	雨合千葉	ライトノベルを書く参考にしようとして人間失格を買いました。よろしくお願いします。
	鹿々書々	まともな執筆者紹介書くのが三億年ぶりなので何書けばいいのかわかりません。
	霜雪海十羽	夏が暑すぎて早く冬になってほしいです。でも半年後には早く夏になってくれと叫んでいると思います。
	白木虎	夏は梨と西瓜と素麺に助けられました。幸水梨は旬が短いのでチョット悲しい。
	林絵理香	高2の夏という現実が受け入れられないです

梶祭号特別インタビュー

「中島敦の可能性を追って」



「彼方」梶祭号を記念して、本校国語科教諭の石井要先生に特別インタビューを行いました。先生のこれまで歩んできた文学研究の道のりや、現在もなお研究に取り組んでいる中島敦への思い、そして渋幕での授業についてまで、ボリウムたつぷりの記事をお届けします。（取材・文：林、撮影：鹿々）

Guest



いしい かなめ 先生
石井 要

本校で教鞭を取る傍ら、早稲田大学大学院（後期博士課程）にて中島敦研究に取り組む。渋幕では高校3年の授業担当の他、生徒部の仕事やサッカー部の顧問も担っている。

☆文学研究の道に進むまで

——石井先生は現在、後期博士課程に在籍なさっていますが、文学で博士まで進む割合はあまり多くないと思います。大学院で文学研究に携わろうと思っただきっかけは何でしたか？

大学一年生のときに、当時の指導教授が、演習で私の発表をととても高く評価してくれたことがきっかけの一つです。単純に調べただけではなく、自身が文学というものをどう捉えているかがよく伝わるとおっしゃってくださいました。文学は「人がなぜ生きるのか、なぜ死ぬのか」を問うものであり、その問いかけが私の発表にはあったね、と。そのことがずっと心に残っていて、私自身も文学作品は人間の根本的な部分につながっていると感じていました。そういう文学の魅力をもっと深く考えたい、さらには他者にも伝えたいと思い、大学院に進みました。

——その中で、中島敦を研究対象にしたのはなぜでしょうか。

中島敦は喘息持ちだったことが影響して、幼い頃から死への恐怖に悩まされていた部分があり、それが彼の作品の面白さを作っていると思います。すごく単純化して言えば、人間は結局死ぬために生きていくわけですが、では一体なぜ我々は「生きていく」のでしょうか。これに対しては色々な考えがありますが、中島敦はおそらく「人間は当人の知り得ない運命によって生かされている」と捉えていたと思います。彼のそういう生き方がまさに作品に表れているところに面白さを感じ、もっと中島敦を探究したいと思いました。

☆「中島敦」を広げる

——中島敦の作品に対しては、「近代的自我の苦悩を、古代中国等の歴史的背景を借りて描きだしている」という見方が定着していると思います。ある程

度既存の解釈が固まっている作品について、どのようにアプローチなさっているのでしょうか。

まずやることとしては、彼が書いたものや読んだものに、すべて目を通します。そうすることで、彼の考えがどのように形成されていったのが、だんだん見えてくる。そのうちに、今までの研究や常識的な理解とは異なる中島敦の一面が見えてくるようになります。網羅的に資料を読むことで、新しい彼もしくは彼の作品の側面を見出していき、そこから研究テーマを深めていくことが多いですね。

☆「作る」と「述べる」はどう違う？

——『木乃伊』^{ミイラ}に関する論文では、物語の舞台と歴史的背景とのすれや、作中での独特な輪廻転生の描かれ方に着目し、それによって中島敦はあえて読者を宙吊りの状態にしている、と述べられています。 「語り」を巧妙に駆使することで一元的な解釈を避けており、それを中島敦の新たな作家的可能性として解釈されましたね。

私たちが普段生きている中では、常識的なもの
の見方や、共有されている世界観に従っています。そ
れを宙吊りにするということは、要するに世界を別
の在り方に変えてしまうということです。その根源
的な理由としては、彼がとても死に近いところにい
たということがあると思います。自分の生の有限性
を常に実感していたからこそ、フィクションの中に
別の世界を描きこむ——まさに「語り」の工夫によ
る言語的な異世界をつくりあげるといえるのは、中島
敦の根幹にあったところだと思います。

——論文の中では言語論にも追求されていました。
言語による世界の差異化、『李陵』で言うところの
「作る」と「述べる」の対比を乗り越えるというの
も、彼の一つの目標だったのでしょうか。

そうですね。例えば私たちが何かを書くこととして
も、まったく新しいものは書けません。何かしら自
分が縛られているものに従って書かざるを得ない。
そうすると、果たしてそれは「作っている」のか

「述べている」のか、決定できないわけです。けれ

ど何かしらを作らないと、作品にならない。述べる
だけということはできない。そういう認識は、彼の
言語に対する根本的な洞察としてあると思います
ね。

☆研究材料は作品だけじゃない

——先ほどの研究テーマの決定から、査読を経て私
たちがネットで読めるようになるまでには、どのよ
うな過程を踏んでいるのでしょうか。

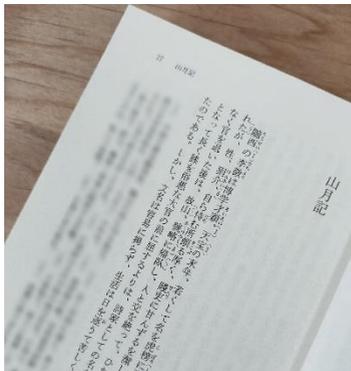
うーん、それはもう地獄のような……(笑)。

まず、どの作家・作品にも先行研究があります。
例えば『山月記』に関する論文は五十以上あります
から、それらをすべて読むことから始まります。今
までその作品についてどういことが言われてきた
のか、まず自分で整理しなくてはならない。

そしてその中から、見つけられる新しいことは何
かを考えます。先ほど述べた、中島敦の書いたもの
や読んだものだけでなく、彼の同時代にどうい思
想的な背景が共有されていたのかということも、

* ユクスキュル……ドイツの生物学者（一八六四〜一九四四）。「動物によって見えてる世界違うっぽいぞ」という考えを提唱した。色々な資料を使って調べていきます。そうすると、新しい側面が見えてきます。

例えば『山月記』には、実は生物学的な知見が活かされていることが明らかにされています。虎の世界の見方と人間の世界の見方が異なるという、いわゆる*ユクスキュル的な考え方がよく表れているんですね。それによって、それまで漢文の知識だけで理解されていた『山月記』に、新たな解釈が与えられたわけです。



『山月記』は、1942年に『文字禍』と合わせて「文学界」に掲載された。今では教科書の定番教材。

このように、同時代の知見を自分の解釈に活かすと、ひとつ新しくなる。しかし問題は、それを「新しい」と言うためには、自分の読みを他の研究者たちにも納得できる形にしなければならぬことです。自分が単純に『山月記』ってこう読めるよね、と言っても、他の人に「いや違うでしょ」と言われたらおしまいですから。だから、まずはその作品を飽きるまで繰り返し読み込む。そうやって、自分の考えが本当に論理的に正しいと言えるのかを確かめていきます。

最後はそれを論文という形で他人に伝わる文章にします。しかし、私も『山月記』に関する論文を書いたことがあります。一度査読に落ちています。頂いた審査コメントには、やはり「この表現はこうは読めない」といった異論がありました。解釈が伝わっていないのです。それに対してもう一度、「いや、この表現はこういう風に解釈すれば、こう読めるのではないか」と打ち出す。二回目では

やく査読が通り、ネットにも掲載されるようになり
ました。

——自分の解釈が他人に伝わるように言語化すると
いうのは、とても粘り強い作業なんですね……。

そうですね。二、三回落ちる論文も普通にありま
すし。難しいところは、当たり前の解釈を出しても
新しくないことですね。そうではない自分の読みを
言うために、十人いたらそのうちの五、六人が「そ
の読み面白いね」と納得してくれるレベルを目指
しています。十人が納得する読み方しても、面白
くないですから。

☆ (研究的には) 批判は愛！

——そのような過程の中で、やりがいを感じる瞬間
や、逆に壁にぶつかるときはありますか？

一番嬉しかったのは、自分が名前を知っている研
究者の方が、私の論文を面白いと言ってくださった
ときですね。もう泣くほど嬉しかったです(笑)。自
分が初めて指摘したことが研究者の方々に認められ

るのは、正直に嬉しいです。中島敦が作品で描こう
としている内実を指摘できるのは、研究の面白いと
ころですから。

苦しいのはその逆ですね。自分が書いたものが批
判されるのはまだいいんですが、関心を持たれない
ことが一番キツイです。自分の研究が誰の視界にも
入っていないときは辛いですね。研究的には、批判
は愛ですから(笑)。

——中島敦は一編が短い上、作品数が非常に少ない
ですが、その分他の作家に比べて研究の材料を探す
のも大変なのでしょうか。

逆を考えると分かりやすいですが、例えば夏
目漱石や森鷗外はめちやくちや作品数が多いですよ
ね。彼らは実に色々な試みをしていますから、一貫
した見方で彼らを論じるのは難しい。それこそ漱石
なんて、初期と後期ではまるで作風が変わっていま
す。

中島敦の場合は、確かに作品が少ない分様々な資
料を読み込まなくてははいけないですが、一つひとつ

*匈奴……前三世紀ごろから台頭した、モンゴル地方の遊牧民族。前二〇〇年には漢の劉邦に大勝するなど、漢を脅かした。

の作品の密度が非常に濃いので、論じる方からすると面白い対象だと思えますね。



『中島敦全集』（ちくま文庫）は文庫サイズで全3巻。中島敦の小説の他、日記や子どもへの手紙なども収録されている。

☆『李陵』を読むべし

——そのような中島敦の小説の中で、ぜひともこれは中高生に読んで欲しい！ というものはありますか？

先ほども話に出ましたが、『李陵』は絶対読んでほしいです。漢文の授業で紹介した際、面白いと感じ

てくれた生徒はやっぱりいて。何が面白いかって、『李陵』を読んでいると、一体何が正しいのか分からなくなってしまうんですね。李陵が武帝によって漢から追放されて、匈奴きょうとで蘇武という人物に会う。蘇武は匈奴の社会には順応せずに、漢王朝の正しさを信じている。李陵はそれを信じ切れず匈奴に染まりそうになりますが、そうもなり切れなかった。蘇武は最終的に漢に助けられるのですが、李陵は漢に戻れず、そこで李陵が考えていたことがすべてひっくり返されてしまいます。李陵はそれまで、漢王朝の体制に対しても、異民族の匈奴に対しても疑いの目を向けていました。しかし、あらゆるものを疑っていた李陵が結局一番報われないんです。それはまさに、人が人であることの限界ではないでしょうか。あるコミュニティの中でその人の価値が認められたり、生きていく意味が出てきたりする。けれど李陵はどのコミュニティにも存在し得なくなり、歴史に存在し得ない人物になってしまう。

なぜそれを中高生に読んでほしいかというところ、中高生には確かに学校というコミュニティはありますが、根本的な部分での自己への不安定さを感じることも多いと思います。そういう年代が読むととても共感できると思いますし、渋幕の中高生はやっぱり勉強はよくできますが、「自分自身がどのような人間なのか」という問いかけをあまりしてこなかった生徒もいるのではないかと感じます。『李陵』が、そのような問いかけを発するひとつのきっかけになればいいなと思っています。

☆研究は人生！

——先生がご自身の研究において、今後目指している目標などがありますか？

ゆくゆくは大学で教えたいなと思っています。この学校ではシラバスがありますが、高校の教育には、元をたどれば学習指導要領がある。さらには、大学入試も見据える必要がある。つまり、中高では教えることがある程度決まっているわけです。



渋幕では毎年度、学年ごとに1年間の学習内容が書かれた「シラバス」が配布される。渋幕が初めて導入したものなんだとか。

もちろん大学でも完全に自由にできるわけではなく、自分の専門性の中で教える裁量があり、大学生・大学院生という非常に高度なことを考えられる相手に教えることができる。とても面白い仕事だなと思いますし、今の目標でもあります。

自分が教わってきた大学の先生、そして文学を研究している方々はずっと言葉と向き合っている分、言葉の一つひとつに実感がこもっていて重たいんですね。だから、大学の先生が自分にくれた言葉はす

ごく力になりますし、胸に残っています。自分も、大切な言葉をかけてくれた指導教授のような研究者になれると良いなと思っています。

——森鷗外の『雁』に関する論文も執筆されていますが、今後の中島敦に限らず文学研究に携わっていくご予定でしょうか。

そうですね。研究が人生です(笑)。

☆洪幕に来て

——大学院での研究と洪幕でのお仕事を、どちらも並列して続けられているのはなぜでしょうか。

修士課程を出るときに、そのままストレートで博士課程に進むという道もあつたのですが、それだとあまりにも社会との接点を持たないまま研究の道に進むことになってしまふなと思つて。じゃあどうすればいいかと考えたときに、多くの人と接するといふ経験が大切だなと。ただ最初から大学生に教えるとなると、自分の言葉を変える必要がないんですね。専門用語を使つても話が通じるし、抽象的な概

念だけで話を進めてもいい。しかしそれだと自分の言葉が凝り固まつてしまふなと思ひ、もっと色々な人に伝わるように、言葉や認識を変えていかなければならないという思ひがありました。だからこそ、中高で働きたいと考えるようになりました。

この学校は、学校全体として文学をとても大事にしていると感じています。そこが、自分のやりたいことや考えにマッチしている部分ですね。

——研究との両立はものすごく大変だと思われませんか……。

大変どころの騒ぎじゃないですね(笑)。でもどちらも結局自分が好きでやっていることですし、好きなことをやるためにはある程度の努力と苦勞は付き物ですから。自分でも両立するために出来ることは何でもしたいと思つています。



両立できている理由について
「根性と文学への愛ですね……」
と語る石井先生

——石井先生が現在担当されている高三の授業では、小説読解から言語論や芸術論、西洋哲学まで、幅広い分野を扱っています。授業で使用するテキストはどのように選定しているのでしょうか。

現代文の授業の目的として、「テーマを理解する」ということがあります。言語論であれば、言語というものが今の人文科学の中でどのように論じられているのか。芸術論であれば、現代ではどのような芸術作品に価値が置かれているのか。そういう

た、時代の中での価値観や概念の中身を理解することとが、文章を読解する上での肝になります。ですので、テーマごとにそれを代表する書き手や文章を選んでいきます。

ただもちろんそれだけでなく、どんなに抽象的でも、自分を惹きつける文章ってあるんですよ。そういういったテキストは、参考資料として皆にも紹介しています。

☆言語Ⅱ世界？

——先生自身はどのような作家や作品に惹きつけられ、影響を受けたと感じていますか？

哲学者になります。言語哲学で有名なウィトゲンシュタインですかね。『論理哲学論考』という彼の著書の中に、「語り得ぬものについては、沈黙せねばならない」というよく知られた言葉があります。これ自体矛盾をはらんだ不思議な言葉なのですが、単純に理解すると、言語の限界が世界の限界だとい

ことです。それって私たちの感覚とも合致しているし、すごく本質的じゃないですか。



ウィットゲンシュタイン
(1889~1951)

彼の論文は、当時彼の先生であった論理学者・ラッセルでさえ意味不明すぎて相手にしなかったという。

しかしウィットゲンシュタインの面白いところは、後期の彼は前期の彼、つまり『論考』で自分が言ったことを否定するんですね。彼は晩年に遺した『哲学探究』という著作の中で、言語なるものは結局ゲームだと考えます。「言語ゲーム」というやつです。言語というものはプレーヤー同士の間で成り立っているゲームに過ぎず、そのルールは後から作られると。この考え方はとても画期的で、先ほど述べた

「言語＝世界」という考えをひっくり返しているんですね。表現し得ないと思っていたこともゲームの中では出来てしまうし、それに後付けで文法なり規則なりを設けて、言語を理論化することもできる。

言語に対する認識を自己批判して、新しい理論を打ち出せる。彼のこういうところって、最高じゃないですか(笑)。

そして、ウィットゲンシュタインは言語を日常的な言語使用から理論化しようとします。今まで頭の中だけで抽象的に行われていたものが、私たちの普段の生活とマツチするものになる。このような転換も彼の魅力のひとつですし、言語を考える点において中島敦とも通じるところがあると思います。

—言語ゲームとは？—

例えば右図のような場合、建築家 A が「台石！」と言えば、助手 B は「台石を持ってこい」という意味だと見なし、言われた通り台石を運んでくる。これは 2 者の間で「台石」という言語の使用ルールが定められているためである。

このように、私たちが生まれながらにしてその根拠や意味を知らぬまま言語を使用している現象を、ウィトゲンシュタインは「言語ゲーム」と呼んだ。

(倫理資料集より作成)



——現在生徒部のお仕事もされていますが、渋幕にいてどのようなときにやりがいを感じますか？

生徒部は生徒に一番近い仕事だと思っています。学校の主役は生徒ですから、生徒が活躍しているとき、生徒の目が輝いているときに、私自身一番やりがいを感じます。文化祭や生徒会で輝いている生徒たちを、間近で見ることができますから。

——最後に、渋幕生にメッセージをお願いします。

一番言いたいこととしては、何かを本気でやってみることを恐れないでほしいなということです。ありきたりな言葉かもしれないですが、自分で限界を決めてしまうと、その中でしか出来なくなってしまう。けれど個人が持っている力は大きなものです。本気で何かを突き詰めてやってみると、見えてくるものもありますし、それを無駄だと考えないでほしいです。文学を研究するのもそうですが、自分で無駄だと決めてしまわないで、とことん付き合ってみると面白いことが出てくるし、それがやりがいや生きがいといったものにも繋がってくると思います。

頭で考えると大体のことは無駄になってしまうので（笑）。とにかく最後まで一回何かをやってみるとい
うのは大事にしてほしいです。せつかくの人生です
し、私自身渋幕での仕事も研究も、好きなことは全
部やりきりたいですね。

—ありがとうございます。

(2021/7/20 実施)

《本文で言及した石井先生の論文》

・「中島敦『木乃伊』における転生の語り —意識の
彼方、狂気の手前で—」(二〇二〇・三)

・「虎であるとはどのようなことか…中島敦『山月
記』論」(二〇一八・四)

・「実体鏡と物語 —森鷗外『雁』論—」(二〇一八・
三)

《インタビューを終えて》

実は「彼方」でインタビュー企画を実施するのは、今回で二回目となります。今年の四月に発刊した新歓号では、本校司書の岡崎那菜さんにお話を伺いました。同誌で行ったアンケートでご好評いただいたため、文化祭号でもやってみよう、という運びになった……のですが、実は取材開始の直前まで死ぬほど緊張していました。

というのも、今回の取材をするまで、文学を研究している人ってなんだかずっと抽象的なよく分からないことを考えてそうで怖いなあ、そもそも私なんかと会話してくれるのか……と色々と勝手な思い込みが働いてしまっていたからです。

しかし石井先生の文学研究に対する思いを伺っているうちに、研究者の方々は、一人の作家やその作品と自分のすべてを懸けて向き合い続けているプロ

フェッショナルなのだなと強く感じました。なににより、（文学に関わらず）研究活動がこんなにも根気のある道だということに驚かされました。

冷静に考えて洪幕と大学院にどちらも勤めているってなかなかやばいと思うのですが、「どちらも好きだからやりきりたい」と爽やかに語る石井先生の笑顔がとても眩しかったです……。文学とも洪幕の生徒とも真摯に向き合い続けている石井先生の姿は、きっと印刷した活字からも輝きを放っているのではないでしょうか（?）。

改めて石井先生、（本当に）お忙しい中ご丁寧に対応してくださり、ありがとうございます！ 貴重なお話をたくさん伺うことができ、聞き手としても楽しかったです。

これからも先生のご活躍を、陰ながら応援しております。

リレー小説



波幕名物「リレー小説」、今号はなんと豪華三本立て！ できるだけ学年を跨ぐように班を組み、四人でひとつの物語を作り上げていきます。

何かと迷走しがちな、でも意外と好評なこの企画。果たして今回はどんな展開が待ち受けるのか……？ どうぞお楽しみください！

ばぶばぶ不条理生活

鹿々書々

赤羽滯

任火物実

蛍草沙空

一、執筆者 鹿々書々

過労死したら赤ちゃんに生まれ変わった。
やったぜばぶー



狂った職場から逃げ出せた解放感から喜んでみたけれど、しばらくするとこの世の不条理を感じざるを得ないほどやばいポイントがいくつもあることに気づいてしまった。

やばいポイントその一。

多分まだおなかの中にいる。

いや変だなとも思ったんだよね。なんか暗いし全身濡れてるし手に水かきあるしへその緒出てるし。でもまさか胎内から始まるとは思わないよね。最近の転生モノのトレンドはある程度成長した子供の自我を消し飛ばして寄生虫よろしく乗っ取る方式じゃないんですか？

やばいポイントその二。

この流れで行くと赤ちゃんと同じ生活を何年も送ることになる。

例えば僕がおむつを換えられているとする。仮定の時点でもう聞きたくないかもしれないけれど聞いてほしい。僕の人生がかかっている。その時傍目から見たら普通に赤ちゃんの世話をしているように見えるけれど、実際は成人男性がおむつを換えられている図だからね？ 病気だったりするなら諦めもつくし、しようがないと割り切れるけれど、社員時代よりも健康な今の状態で、しかも他人に換えられるって、前世で村を焼いたレベルの罰じゃないですか？ そんなことできるほど休みももらえてませんでしたけど？

しかも赤ちゃんっていうのは暇なのが分かりきっているんですよ。何年もおっぱいのもでねんねしてだっこしておんぶしてまたあしたな生活をしなきゃいけないっていうのも地味に響いてくる。

やばいポイントその三。

そんなわけでなんやかんや言いつつも楽しく胎内でぶかぶか成長していると前の二つなんか比じゃないくらいやばいポイントが発覚した。ある程度大きくなっておなかの外から声が聞こえてくるようになってきて、ああおなかの子供に呼びかけるってありがちだね、もしかして名前とか分かるかな思ってたんですよ。名前はわかった。ただそれを聞いた時僕は出来立てほやほやの耳を疑いましたよ。

「理皇帝」と書いて「ルールカイザー」。

それがどうやら僕の名前らしい。出生届もすでにそれで書いてあるようだ。

ここまで無力感を感じたのは同期が給料二倍で残業半分、有給休暇は約五倍のホワイト企業にヘッドハンティングされていくのを見たとき以来だった。

……いや不条理すぎやしないか？



そんなこんなで無事生まれた理皇帝ことルールカイザーこと僕は今ママ友会的なものに連れてこられていきます。

お母さま方が楽しくおしゃれなものを食べているのをおしゃぶり加えてみていることしかできないわが身が憎い。

「ばぶう（離乳食飽きたばぶう）」

そう口にするのと隣にいた赤ちゃんがこちらを凝視してくる。

この赤ちゃんの名前は蒼齒と書いてブルートウス。

もうなんかみんなこんな感じの名前になってる。キラキラリンみたいな名前が普通になってる。僕が残業していた間に時代に取り残されてしまったような気がしてくる。ブラック企業は竜宮城だった……？

そう考えてみると僕の名前が当たりのような気がしてくるけれどそんなことはない。けれど一つ言えることは、

「ばぶう（ブルートウスよりはマシばぶう）」

「バブウ（ルールカイザーよりはマシだよなあ）」
え？

隣のブルートウスと目が合う。

お母さまがくれた名前馬鹿にしやがってとかどつちもどつちだろとかブルートウスはマジでないとか後から考えるといろいろ言いたいことはあつたけれど、その時僕はこう言うしかなかった。

ブルートウス、お前もか。

二、執筆者 赤羽滯

嘘だろ。こいつも——ブルートウスもなのか？

僕とブルートウスはじつと見つめ合う。

「ばぶう（まさか、お前も転生したら幼児だった奴だったたり？）」

「バブウ（……何でわかつたんだよ）」

こんな生まれたての体はほにやほにやの幼児が頭殴られたらたぶん死ぬと思うけど頭を思いつきり殴られたような衝撃。社員時代はそんなの日常茶飯事だったけど。

「ばぶばぶ(底辺高校の教師やって過労死して生まれ変わった先が幼児って俺どんだけ運悪いんだ……)」
ブルートゥースが死んだ魚のような目で言った。ブルートゥースも災難だな。

ふと周りを見回すとお昼寝タイムなのか、いや皆さんそれはそれは気持ち良さそうにぐっすりと眠られていますねえ。こっちは完璧に慣れてるせいでまっつつつたく眠くないんですけど。皆様方がぐっすり眠られている中たった二人おめめばっちりの僕ら、浮いていやあしなかなあ。ママさん達の声が聞こえる。

「みんな本当に気持ち良さそうに寝てますねえ」

「そうですねえ。……あれ？　うちの子はまだ起きてるみたい」

一人の女の人がこちらに近づいてくる。あの人が僕の母親か。あの人がルールカイザーの名付け親なのか。

僕の母親は僕を抱き上げると、急に揺らした。寝かしつけようとしているみたいだけど、ヘタクソだ。ヘタクソすぎる。これじゃ目が覚めるわっ！

すると今度は僕をベビーベッド(すっぽり入ってしまっているのが悲しい)に一度置くと、どこからかやけに凝ったデザインの抱っこひもを取り出してきて、僕を乗せると(乗せる過程で二回ほど首が締めりそうになつたが)肩にひもをかけて(安全ベルトが無ければ振り落とされてたぞおい)僕を背負い、そこら辺を歩き始めた。

物凄く揺れて気持ち悪い。赤ちゃんの頃こんなものですやすやねんねしてたのが信じられないくらい。ブルートゥースに助けを求めると憐れむような目で、

「あうう(ゲッドラック)」
と返された。

「ばぶぼうう！（それな！ あんなに仕事したんだから次の人生で楽しかったっていいだろ！」

こいつ、めつちや気が合うぞ。僕とブルートゥースって、同じ苦労をしてるし、当然と言えば当然かもしれないけど、前世は仕事ばっかしてたせいで友達いなかったからこういうの初めてでうれしい。いやあ、話がすごく盛り上がるし愚痴を吐きあうのって意外と楽しいな。あ、けどずっと二人で話したら流石に怪しまれるか？

「あらまあ、すっかり仲良くなっちゃって。そんなにブルートゥース君のこと気に入ったの？」

「うふふ、ルールカイザー君。これからも家の子とよろしくね」

大丈夫そうだな。僕とブルートゥースの母親が優しい人で良かった。でも、普段はもつとちゃんとしてね、下手したら死んじゃうから。

「そろそろお散歩の時間ですね」

ちよつと、言ったそばから首が締まってるんですけど？ 赤ちゃんは繊細なんだからもつと丁寧にして

くれ、って待って揺らしながら歩かないで頭が揺れる！

「ばぶぼう（た、助けてえ）」

◇

なんかかんやあつて数か月後、僕は保育園に通っていた。そして、相変わらずこの世の不条理にさらされ続けている。なんでこの体うまく動かないの？ 抱っこしてもらわなきゃ碌に動けない。はいはいするだけで体をあちこちにつけるし、大人の時より凄く痛いんだけど。僕じゃなきゃ泣いちゃうね。今はつかまり立ちの練習中です。足が、言うことを、聞いてくれないうっ！ これは今日もまたブルートゥースに愚痴るしかない。あいつも確か昨日ひたすら簡単な単語を読み聞かせられたってげっそりしてたな。あれあの後どうなったんだろ。

「あら、ルールカイザー君のお母さん、おはようございます」

「先生、おはようございます。ほら、ルールカイザーも挨拶」

「うはいっ（おはようございます。先生いつもお疲れ様です。過労死しないようにね）」

「はい、おはようございます。それではルールカイザー君お預かりしますね」

ふう、ようやく母さんの抱っこが終わった。前に比べたら上手くなったけど、いつ落とされるか気が気じゃない。なぜ上半身の方ばかり持つんだ、下半身はみ出てるんだけど！

お、ベビーベッド着いた。

「あう、む（おーい、ブルートゥース）」

「バブウ？」

あれ、こいつブルートゥースじゃない、普通の赤ちゃんだ。

……じゃあ、ブルートゥースはどこに行ったんだ？

四、執筆者 蛍草沙空

いや、おかしい。間違いなくコイツはブルートゥースだ。いつも着ている赤ちゃん服。いやに大きい目。コイツがもしブルートゥースじゃなかったらドッペルゲンガーは実在したと言えるほどソックリだ……まあ、赤ん坊はみんな同じような顔をしているといえはそうなのだが。

「あう、おう（おーい、ブルートゥース）」

「バブウー」

なのに。いつもみたいに話せない。なぜ。

「どうしたの？」

おわ。先生に見つかった。僕はすぐにスンとした顔になった。僕、ナニモシテマセン。

「バ、バブウ（やべー）」

「あれ、君、もしかして言葉わかるの？」

は？ へ？

「ブブブー（その言葉そのまま返してやんよ）」

「へー。私以外にもいたんだー」

「バブ？（え、先生も？）」

「そうそう。私はアッ……」

突然、先生が倒れた。

「ウエーん（先生が倒れたー）」

くらえ、赤子の大泣き！ 誰か気づいてくれ。

「誰も来ない」

「バブツ！（誰だ！）」

「姿は見えない。それにお前にしかこの声は聞こえない」

「バブバブ！（だから誰なんだよ！）」

「私は神だ」

な、なんだと、こ、こいつ……。

「バブブブーオギャーオギャー（誰かーここに不審者がア、中二病患者の不審者がいます）」

「うるさい……私は不審者でも中二病でもない！私は、前世があまりにも辛すぎたせいで記憶が残っている者を探す、神」

「ブブブ？（なんのため）」

「簡単だ。その者の記憶を消す」

「バブバブ！（そんなの嫌だ！）」

「お前に拒否する権利はない。そうだ、この間ぶるーなんちゃらも同じように抗おうとしたな。まあ、何も変わらなかつたが」

「ブブブ！（そんな、ブルートウース）」

もう彼は記憶を消されたというのか。僕も、同じように……？

「そんなに嫌なのか？」

僕は精一杯の力で首を縦に振った。

「なぜ。前世の記憶なんぞ持っていないもなんの利益もないだろう。それに、お前の場合あまり良いモノではないだろう。なぜそこまでして拒む」

「バブバウアウ、バブアウバブ！（それでも、前世の『僕』が生きた証を、いきなり取り上げられるのは辛い！）」

くそ、何を言っても赤ちゃん言葉だからなんだか締まらない。

「そうか。そういうモノなのか」

意外そうに神（自称）は言った。

「まあ、元々前世の記憶を持たせてしまったのはこちらのミスによるものだ。仕方ない、ならば徐々に忘れられるようにしてやろう」

僕は眠くなってきた。そうか、もう、昼寝の時間だ……。

僕、ルールカイザー、十六歳。ごくごく普通の高校生だ。

「おーい。おそいー」

腐れ縁のブルートウースの声が聞こえて、僕は走り出した。

「ごめん、ごめん。道に迷って」

「全く。って、おい、危ない！」

ブルートウースが叫んだときにはもう遅かった。

暴走したトラックが僕たちに突っ込んできた。ああ、死ぬのか。また……ん？ また？ そうだ。思い出した。

「自称神の中二病患者！」

ハモったぜばぶー。いや、ばぶーっていらないう。僕は、僕たちは叫んで勢いよく起き上がった。周りからの目が痛い……ここは、病院？

「二人同時に目が覚めるなんて……」

医者が信じられないという目で見てくる。そんな未確認生物を見るような目で見ないで下さい……などいろいろ言いたいことはあったけれど、その時の僕もこう言うしかなかった。

ブルートウース、お前もか。

(了)

親切な医師

遠野燈

沢みどり

林絵理香

霜雪海十羽

一、執筆者 遠野燈

昨日、隣の部屋の人が死んだ。

顔は知らない。名前も覚えてはいない。部屋の前を通った時に、ちらりとネームプレートを見ただけだ。それももう外されて、部屋は白いカーテンが覆っていた。

人が死ぬことなんて、こんなに呆気ないものなんだな……。そう思いながら、樹は自分の足を眺めた。これもまた、呆気ないもんだ。よくテレビで見るように、包帯でぐるぐるに巻かれた足。

俺は別に、何も悪かない——。樹はぐいと手を伸ばし、誰に話しかけるわけでもなく考えた。

俺はただ、青信号で横断歩道を渡っただけだ。それなのにあの忌々しい、白の軽が突っ込んできたんだ——。飲酒運転だったんだと、後で聞いた。真っ白だった。それは覚えてる。撥ねられた時血が出たのか、どうなったのか。考えたくもなかった。きつと白い車体に、赤は映えたるうから。

月並みな話だけど、あれが迫ってきたとき、あ、やばいなって思った。これは死ぬかもしれない、って。走馬灯って言うのか、頭の中を色々な思いが駆け巡っていった。そのどれもが他愛無いもので、大会出たかったとか、あのアニメの次の回見たかったとか、そのくらい。その間もスローモーションで車が迫って、逃げなきゃいけないのに足は全然動かないって感じ。

気付いたら何も見えなくなってる、次に目が覚めたときにはベットの上だった。ありがちすぎる。死さえる直感的に感じ取っていたと言うのに、ベットの上の自分の体の感覚はたいして変わっちゃいなくて、ただ固

定された足が僅かに疼くだけだった。運が良かったんだと、皆が言う。足だけで済んで、本当に良かったと。

だけど俺は我慢がならない。だって足だぞ、まだ高校生で、これからだつてのに。村山先生——医者はいつつもここにこしてるけど、こつそり母さんに言つたのは多分そのことだったんだろ。歩けなくなるかもしれないって。冗談じゃねえ。これからの人生、歩けず過ごせつて？ 無理だそんなの。

でも医者も家族も、声を揃えて言うんだ。気持ちの問題だつて。そのうち治るさつて。馬鹿みたいだ。そうしてこんな自分も——こんな我儘な自分も、馬鹿みたいだ。

ぐつとベットに爪を立てる。奇跡的に無傷だった腕。本当に、奇跡だ。上半身は怪我一つしていない。頭も無事。なにかもがラッキー。

「樹……良かった……」

目が覚めたとき、母さんが泣いてたつて。高校生にもなつて親に泣かれるなんて、恥ずかしいかつたけど少し、嬉しかった。こそばゆいっていうんだらうな。

ずっとベットに縛り付けられているからか、センチメンタルな気分とやらになってくる。やりきれなくなつてそうでため息を一つ。テレビでも見ようかと思つた。しかし時計を見てまたため息、二つ目。平日の昼間には見る番組がない。情報番組はどうも苦手だった。

仕方なく、横の机に置かれた本を手に取つた。母さんが選んでくれたんだらう。

「……怖」

思わず声を漏らした。

母親つてやっぱり、なんでも分かるんだらうか。なんとかつていう医者 of 自伝的小説。開くとメモが挟まつていた。「どうせやることないんなら、色々考えときなさい」

暫く凝視する。はたしてそれ以上の意味が込められているのだらうか。分からない。何度か自問自答を繰り返し、諦めて文章に目を走らせた。

どうだろう。この機会に本を読ませただけかもしれない。

「……そうですね、経過は順調です。予定通りに退院出来るでしょう。良かったですね」

穏やかな笑顔。つられてこつちも気持ちちが和む。

「ありがとうございます」

村山先生はいい医者だ。きっとそうなんだと思う。丁寧な物腰に、的確な説明。白衣が最高に似合っている。

(医者か……)

今から目指せんのかな。まだ高一だし、なんとかなるかも。してみようかな、勉強。どうせ他にすることないし。

「それでは、お大事に」

ドアを開けた村山先生の後ろ姿を眺めながら、樹は思いを巡らせた。

医者ってカッコいい。村山先生と出会ってから、そう思うようになっていた。

人の役に立つ仕事だ。人の命を、救うことも出来る仕事だ。正直なところ勉強は好きではなく、進路も何も決めていない。将来にはつきりとした展望があるわ

けでも、目標があるわけでもなかった。しかし今——入院したことで、目標が出来た。村山先生みたいな医者になること。人の役に立つ、いい医者になることだ。白いベットの上で、ぼんやりと空想に耽る。思い描くのは、白衣を着た自分だ。ほんの数週間前には、考えもしなかったことだった。

「なんだよ……」

樹は目の前の光景に、呆然としていた。

——明日、お見舞いに行くから。

昨日そんな電話がかかってきたから、見舞いだということは分かる。問題はその方法だ。普通怪我人の見舞いに、こんな大勢で来るか？

母さん、父さん、葉姉、果帆姉。二人の姉の独り立ちから揃っていないはずの家族が、揃ってこちらを見つめていた。今日なんかあったっけ？ 誰かの誕生日？

「もうあんた。責任とってよね！ 今日貴重な全休なんだから。本当はずうっと家でごろごろするはずだったのに」

就職している葉姉が言った。社会人というのは大変なものらしい。けどそれとこれとは別だ。しきりに時計を気にして、頬を膨らませる彼女に言いたい。責任とるものにも、俺はなにも知らされていないんだが？ 樹は助けを求めるように、母を見た。

「退院二週間前の前祝いよ」

「は？」

事も無げに言われ、そういえば……と記憶を手繰る。確かに退院予定日は二週間後だ。

「そんなことでこんなに？」

「当たり前じゃない。本当はもつと早くこうしたかったんだけどね……。なかなかみんなの予定が合わなくて。特に果帆なんか」

母さんがじとりと果帆姉を見た。

「サークルがなんだ、講義がなんだって言って全然ダメなのよ。どうせ遊びの予定でしょう？」

「違うし。ちゃんとした授業だし」

隅の方で俯いていた果帆姉は、不貞腐れた表情で顔を上げた。やたら騒がしいうちの家族の中で唯一、無口な姉だ。

「そんなこと言ってあんた、恥ずかしがつてるんでしよう？」

葉姉がにやにやしながら果帆姉をつつく。コロコロと気分を変える表情豊かな葉姉と、一度決めたらとても曲げない無表情な果帆姉。対照的な二人だが結構相性が良いことを、本人たち以外が知っている。果帆姉が鬱陶しげに手を払うと、葉姉が思わせぶりな口調で言った。

「ずうつと心配してたもんねー。樹のこと」

「うるさい」

え？ 思いがけない言葉に、樹は目を見張った。果帆姉のことだから、なんとも思っていないだろうと思っていた。

思わぬ攻撃を食らった果帆姉は真っ赤になったが、キツと葉姉を睨んで反撃する。

「葉子だって何回も、私に電話してきたくせに。樹はどうだ。大丈夫かって」

「え？ あ、なんのこと？」

急に視線が彷徨い出した葉姉を見て、不意に小さな頃のことを思い出した。どんな時でも、隠し事が苦手だった二人。果帆姉は真っ赤になって、葉姉はキョロキョロして、あつという間にばれて……そのせいで樹も怒られた。今では懐かしい思い出。ちよつと泣きそうになって、樹は呟いた。

「心配してくれてたんだな……」

「当たり前でしょう？」

あたふたとする姉二人を無視して、母さんが優しく微笑んだ。

「家族なんだから」

「これからは気をつけるよ。心臓に悪い」

父さんも付け加える。

「うん」

こんなに素直な返事をしたのは、いつぶりだろうか。幸せだと、思った。俺は幸せだ。足も治せる気がした。

いつか医者に——村山先生みたいな良い医者になって、皆を驚かせてやろう。温かな家族に囲まれて、樹は決めた。

二、執筆者 沢みどり

昨日、隣の病室の樹くんが死んだ。

まだ高校一年生だった。よく家族が見舞いに来ていたのを覚えている。どこにでもある、幸せそうな一家だった。

夕方ごろに急に体調が悪化して、懸命の治療の甲斐もなく真夜中に逝ったという。死ぬ間際は笑顔で死んでいたというのがせめてもの救いだった。昨夜は廊下で看護師や医師がバタバタ動いていたのでよく眠れなかった。

私は新聞を脇のテーブルに置き、朝の診察まで仮眠をとることにした。ゴロン、とベッドの上に寝転がり、天井を見上げる。

不思議なもので、天井の模様を眺めていると自然と眠たくなってくる。そうして私がウトウトしかけたころ、ドアがトントンと叩かれて「すみません、河村さんいいですか」とつい最近私の担当になった医師が入ってきた。

村山、という名前で年齢は三十代前後。顔立ちは整っていて、白衣を身にまとった姿はハンサムの部類に入る。礼儀正しく、患者に優しく接するということが入院中の患者はもちろん、看護師にも人気がある。この病院にこれこれ一年近く居座っていると、それなりに人脈もできるし、看護師さんや患者同士の噂話も耳に入ってくる。どうやら一般的な見解として、この村山医師がこの病院で一番の医者らしかった。

「体調チェックに来ました。多分今日は五分少々で終わると思います」

「わかりました。よろしくお願いします」

今までに何百回と経験した朝の診察も、村山医師になつてから毎日新鮮に感じるようになった。それもこの爽やかな雰囲気のお陰だ。前の担当医は脂っこくて

暗い感じのぼそぼそと会話するタイプだったので、朝は一日で一番つまらない時間だった。

村山医師は快活な声で今朝の体温や吐き気の有無などを確認していき、あつという間に5分間が終わってしまった。

もつと彼と話がしたかったので、私は最後にこんなことを言ってみた。

「先生、私が死ぬことはあるんですか？」

彼はそれを聞いた瞬間少し顔をゆがめたが、すぐに普段の笑顔に戻って言った。

「河村さんがこの一、二ヶ月でなくなることはよっぽどのがない限りありません。横から見ている健康そのものです。ですが、いつ悪化するかは誰にも分からないので油断だけはくれぐれもしないでください」

「わかりました。ありがとうございます」

本当はもつと話したかったのだが、村山医師は「ではこれで」と言っ出て行ってしまった。

ボタン、と閉じられたドアを眺める。あーあ、と軽くため息をついた。

私がこの病院に入ったのはちょうど一年前だ。長年の不摂生が祟って重度の糖尿病の診断を受け、夫と別れての闘病生活に身を置くことになった。両親と長く絶縁状態にあり、自分で稼ぐこともできない私にとって、九州で子育てをしている元夫からの仕送りは唯一の生活費だ。

みんなが「広場」と呼んでいるスペースに足を踏み入れると、ソファアの周りで固まっていた何人かが「おお、かなちゃんじゃないか！」と手をふってきた。この病院では、名前が河村奏音なので、私はみんなから「かなちゃん」と呼ばれている。ほとんどが七十を過ぎた老人なので、まだ四十代の私は若いというだけで人気者だ。

「かなちゃん、今作ったのを聞いてくれよ。病室に蝉の合唱 残暑かな」

グループ最年長で今年白寿を迎える江口さんが自慢げに歌を詠む。

「どうかな？ 蝉の鳴き声、とするとところを合唱にしてみただ」

「はい、いいと思いますよ。夏が去ったのにまだ意地を張って合唱している蝉が病室と重なっていい」

「かなちゃん、機嫌とらなくていいのよ。江口さんの俳句は意味内容の工夫が足りないっていうのは皆知ってることだから」

大野さんという七十代後半のお婆さんが笑いながら江口さんをかからかった。

「じゃあ私もここで一句。たしか今日のデザートはみかんゼリーだったから……皮むきて 一輪咲きたる みかんかな」

「お前の歌だって工夫も何もないだろう」
江口さんの憎まれ口に皆が笑う。

「そんなことはないわよ。みかんの皮って剥いたあと、緑色のところを中心にした花みたいになるでしょう」

「そんなのわしは全部ぐちゃぐちゃに剥いてたから分かん」

また皆が笑う。

江口さんと大野さんはいつもこんな感じだが、実は誰もが認める病院のベストカップルである。元々この俳句グループも、二人で始めて、だんだんメンバーが増えていったそうだ。

「かなちゃんは何かある？」

「そうですねー、昨日は雨が降っていたので雨に関する歌にしますか。五月雨を 集めてはやし 最上川：
：これは松尾芭蕉か、君の傘 花畑の中 紅い花。雨の日の道つて目の前が傘だらけだけど、君の傘だけは花畑に一輪咲いている紅い花のようにすぐわかるよつていう歌です」

「うまいなー、さすがかなちゃん。傘、中、花で韻を踏んでいるところもいいよね」

グループで私の次に若い大林さんがほめる。

大林さんは子供の頃から糖尿病を患っていて、しょっちゅう入院していたらしい。だから友達もいなく、

病院での人間関係がすべてだ。だが、それは大林さんだけでなく多くの人にも当てはまることで、みんな長い入院で外の世界とは切り離されているのだ。ここのひとたちは自分が変えられない運命を受け止め、歌にし、冗談にまでしてしまう。外の世界からは不憫にも滑稽にも見えるかもしれないが、これは仕方のないことなのだ。逆に、こうでもしなければ毎日生きてはいけないこともみんな知っている。悲しいことだけれど、ここはそういう世界なのだ。

「韻を踏むと歌そのものが美しくなっていくわよね」と大野さんが言ったとき、後ろから「昔の米国大統領アイゼンハワーも選挙のときに『I Like Ike』っていうキャッチコピーを使って当選しましたからね」という声があった。後ろを振り返るとそこには白衣姿の村山医師がいた。

「あら村山さん、あなたも一句作っていますか？」

大野さんが問いかけると、彼は「いや、僕は遠慮しておきます」とやんわりと断った。その言い方があまりにも美しかったので私はほれほれしてしまった。

「僕は一応河村さんに用があつてきたんですけど」

「何でしょう」

村山医師は「これは拒否できるんですが」と前置きしてから言った。

「あなたに面会を希望する人がいます」

「誰でしょう？」

一瞬、九州から元夫がわざわざ来てくれたのかと思つたが、あの人がこんな中途半端な時期に仕事よりも優先して来るとは思えない。せいぜい臨終の間際にこのこやつてきて「ごめんな奏音、おくれちゃつて」というのが関の山だ。だとしたら誰だろう。昔の友人？ いや、私にこんなところまで見舞いに来てくれる友達はひとりもない。

「ご本人たちは決して言わないでくれと言つていたのですが、言います。簡単に言うと、あなたのご両親、正確に言うと、かつてのあなたのご両親です」

「会いません」

思つたよりも大きな声だつたらしい。広場の人たちの視線が私に集まる。

「顔も見たくありません。ましてや、話そうなんて一度たりとも思つたことがありません」

村山医師はうろたえたように「それは……、あなたの自由ですが……」と言つた。その姿がけなげで、すごくかわいそうだったので、私はゆつくりと言ひ直した。「じゃあ、私は部屋に戻ります。今後は面会謝絶にさせてもらいます」

ざわめきが広場の中に広がる。何人かは「かなちゃん、どうしちゃつたの」と心配そうに声をかけてきた。このひとたちは私に対してすごく親切で、病院はともいいところだ。だからこそ、それを壊そうとする両親が絶対に許せなかった。熱い怒りがこみあげてきて、自分でも想像しなかつた怒鳴り声が出た。

「あいつらなんかに入つてきてほしくないの！」

そのままワツと泣き出して、少女みたいに走つていった。こんな泣き方、十代の頃からしたことなかつた。

両親はゆくゆくは子供を音楽家にしようと、随分昔から考えていたらしい。それで、子供には音楽にちなんだ名前を付けた。上から順に、響喜、律夢（リズムと読む）、奏音。響喜は立派な歌手になってもらいたくて。律夢は、みんなに夢を与える旋律を届けるように。でも、奏音だけは、「音を奏でる人になってもらいたいから」。何度、この名前で私は苦しんだことだろう。

三人とも、二歳になると音楽を習わされた。入りはピアノ。そこから、色々な楽器に挑戦していく。私がピアノを習っているときから、二人はそれぞれの道で特別な才能を十分に発揮していた。響喜は両親の願い通り歌がうまく、よく通る声をしているため、地元の合唱クラブでは群を抜いた歌声を披露し、個人でも大会に出ることが多かった。そして、彼女が小三のとき、ついに全国大会の切符を掴み、そのまま優勝した。律夢はピアノはもちろん、チェロ、ヴァイオリン、コントラバス、トロンボーン、トランペット、クラリネット、太鼓、フルート、ギター、ウクレレ、琴からドラムまでありとあらゆる楽器をいとも簡単にマスター

した。専門はヴィオラで、何度も全国大会を制したのだが、「律夢君は色んな楽器ができるから、指揮者に向いているよ」と彼のピアノの先生に言われて、国内で五本の指に入る指揮者に毎週八時間のレッスンを受け、国内で最も権威のある中学生のオーケストラの大会でベスト指揮者賞を受賞した。

私というと、姉と兄が全国を飛び回っている間、地元の小さなピアノコンクールでさえ、入賞出来ずにいた。「音楽家兄妹」として名が通っているため私の名前が呼ばれるといつもざわめきが起ころのだが、その後のつまらない演奏のせいで大抵皆あくびをするというのがオチだった。

父親も母親も、響喜と律夢に付きつきりだったので、私のコンクールに来てくれたことは一度たりともなかった。だから、親戚に見せる演奏動画も二人のものが全てで、まるで私は存在しないかのようなだった。

———すごいね、響喜と律夢は。日本の音楽界の希望だ。

みんな、こんな風に私の兄妹をほめたたえた。

——私達の、自慢の息子と娘ですから。

——それに比べて、あつちはどうだい。簡単な曲も、まともに弾けないらしいじゃないか。

小六になって「チエルニーのピアノ練習曲 四十番」をやつと完成させたばかりの私に向けられるのはいつもため息か心無い言葉だった。低学年の頃は、なかなか上達しない私のために両親はレッスンの日を増やしたのだが、高学年にもなるとそれもなくなつた。

そのくせ、学校の音楽発表会になるとピアノの伴奏に立候補しないと小遣いを没収するぞと言ひ、私は自分の下手さに泣きながら毎年ピアノを弾くはめになつた。そして決まつてその後に音楽の先生が優しい言葉をかけてくるのも、「音楽家兄妹」の一員である私への気遣いだというのを知っているから、私は音楽発表会が嫌いになつた。

小学校生活も終わりに近づいて、私はクラスの女子の中で敬遠されるようになった。大して上手じゃないのに出しゃばりだ、から始まつた私への悪口はいつの

間にかあらゆる面でわがままで、いい子ぶつてる、というものへと変わつていった。

中学受験は、勉強ができる方ではなかつたのでする気はなかつたが、両親は私に音楽大学の付属校を受けるように言つた。

ピアノの実技試験では、面接官は私の事前書類を見て驚いたものの、私のたどたどしい演奏が終わつた時には小馬鹿にするような笑みを浮かべていた。落ちたなど思つて家でのんびりしていると、驚いたことに合格通知が来た。何年かしてから、両親が一家の名誉を守るために金を積んで私を合格させたらしい、という話を聞いた。

中学校に入ると、覚悟はしていたのだが思ったよりも執拗ないじめが始まつた。もちろんクラスで一番下手で、しかも「音楽家兄妹」の肩書きを持つ私は恰好のからかいの対象になつたのだ。

無視され、ものを隠され、陰口を叩かれ、「音痴」「出来損ない」と馬鹿にされた。名前の「奏音」をもじつて「バカネエ」というあだ名を付けられた。ひどいと

きなど、楽器を壊されたり、授業で使う楽譜に「死ね！バカ！」と油性ペンででかでかと落書きされた。

響喜と律夢がますます有名になり、有頂天の両親は私がいじめを受けていることを知りながらも家族に汚点を残さないように見て見ぬふりをした。教員も教員で、事を大きくしないようにいじめを黙認した。

もともと世界ってこんなものなのだ。私はあの時そう思っていた。諦めるしかないのだ。

我慢できなくなったのは中三の時だ。さすがに音楽大学の付属というだけあって学校には立派な楽器が揃っており、練習して帰るのが日課なのだが、最近だと私が練習していると決まって邪魔する人がいるため、家で練習するようになった。この日、偶然響喜と律夢が家にいて、両親は客にこの前の二人の国際大会のことを自慢していた。

ちようど私が休憩していると、こんな会話が聞こえてきた。

「そう言えば、お二人にはもう一人、お子さんがいるって聞いたことがあるんですが……」

「ええ、いますよ娘が一人」

「どんな感じですか？」

「そうですね、昔はおさないところもあつたのですが、だんだん良くなつてきたつて感じですよ」

「ああ、そうなんですか」

「学校でも上手いねつて一目置かれていられるらしく、私達の全力のサポートがやつと実つてきたのでしよう。将来はいいピアノ奏者になつてほしいものです」

その瞬間、私の中で何かがショートした。

「あー！もうやつてらんない！」

全力でピアノを叩く。ガンとピアノが悲鳴をあげ、ドアを開けて父が入つてきた。

「どうした！ 楽器を叩くんじやない、もつと大切に扱え！」

父親の後ろで響喜と律夢が驚いた顔をしてこちらを見ていた。頭が再びカツとなる。この人たちは。私がかんなんにも苦しんでいることも知らずに、音楽を楽しんでいたのだ。

「何が楽器を大切にしろ、よ！　何がいいピアノ奏者になって欲しい、よ！　あんた達は自分たちの名前がけがされることを恐れて私を貶めただけじゃない！」

「奏音、八つ当たりするのはやめなさい！」

「あー、もうくだらない。音楽がうまくて何がいいのよ。音楽が下手で何がダメなのよ？　結局、芸術が何物にも勝るっていうただのクソみたいな神話に惑わされているだけじゃない」

思っていたことを、全て吐き出した。この三年間、いや生まれてからの十五年間の苦悩をぶちまけた。今にも泣きだしそうで、声が何度かつかえた。

「お前は何を言ってるんださつきから！」

「あんた達のせいで私は音楽が嫌いになったのよ！　どうしてくれるのよ！」

その後のことはもう覚えてない。いずれにしても、私は音楽大学の付属中学を辞め、音楽の道に別れを告げた。

今も音楽に未練がないわけではない。当時練習していた曲を聴くと知らず知らずのうちに口ずさんでい

たり、テレビで響喜と律夢の演奏や歌声なんかを耳にするとうっとりすることもある。ただ、子供の頃から音楽は私にとって苦痛を与える存在だったのだ。

太陽が窓枠の向こうに消えていくのを私がずっと眺めていると、後ろでドアが開く音がした。

「来てくれなくても良かったんですけど」

そう言っただけの方を向くとそこにいたのは予想通り村山医師だった。

「いえ、患者さんの心の健康を守るのも医者役目ですから」

そう、と私は吹き、窓の外の音楽で満たされた世界を眺めた。今こうしている間にも、人々は音楽を聴き、楽器を演奏し、歌を歌っている。それは、かけがえない幸福に思えた。私がただ、その世界に入り込めなかっただけなのだ。

「……ご両親、悲しんでいましたけどね」

沈黙を破るように村山医師が言った。

「悲しむ筋合いなんてないんですよ、あの人たちには」

私の言葉にも彼は「そうですか」と言っただけだった。

「あの人たちは私を虐めて、自分たちの名前を守るために利用して、音楽の才能がないって言うだけで使いつけて、最低ですよ、人として」

「そうですか」

「私、下の名前をカナネって言うんです。奏でる音って書いて、どうもあの人たちは私に有名な音楽家になつてもらつてほしいらしくて、こんな名前を付けたんです」

返答はなかった。

「こんな名前を持つてるくせに、音痴で楽器を演奏するのが人一倍下手で、いくら必死になつてやつても簡単な曲すらも弾けずに、兄妹の中で取り残されて……。中学校時代は、それでいじめを受けたりしました」

こんな経験は初めてだった。就職するときも、結婚するときでさえ、誰にも自分の人生について話したりはしなかった。ただ「音楽をやっていた」という事実だけを伝えていた。

「結局のところ、ダメダメの家族だったっていうことです。うわべだけは華やかな『音楽一家』を装っているけれども、内実はもろくて壊れやすい、しょーもない普通の一家。私はそれに嫌気がさして、音楽の道を中三で諦めました」

最後の日差しが、病室を橙色に染める。その中で、私と伊藤医師の姿だけが浮き上がった。

「音を奏でないのに奏音つて何なんでしょうね。生きてて意味あるんでしょうかね」

村山医師はハーツと長く息を吐いた。同情してくれているのかと思つたが、彼の口から出てきたのは予想と違う言葉だった。

「それは違うと思いますよ」

「……どういふことですか」

村山医師は一つ間をおいてからしゃべりだした。

「あなたは既に、かけがえのない素晴らしい音を演奏しています。時には不快な音が出ることもあります。でも、それを打ち消すことができるくらいのはーモニが、あなたの中にはあるんです」

私は、村山医師が言っていることの意味がさっぱり分からなかった。

「どういうことかと言うと、生きるっていうのはそれぞれの個人のそれぞれの壮大な音楽を演奏することに他ならないんですよ。一つの出会いが一つの章節、一つの運命が一つのメロデー、という具合に」

なるほど。彼の口から出てくる言葉は医者という職業にはそぐわない、センチメンタルなものだった。

「あなたは俳句を作っていらっしゃいますよね」

「まあ、はい」

「私も一句作ってみましょうか……、お題をください」

「じゃあ、『自転車』でお願いします」

「わかりました……。秋風や、ペダルをこいで 母の元。今は全く乗らないんですが、昔は私も自転車が大好きな少年でした。いつも友達と近所をサイクリングしてたんですよ。その帰り道にね、夕方に自転車を飛ばしていると途端に冷たい秋風がピューッと顔面に吹いてきて、たいていそうという時だったんですよ。家が恋しくなるのって」

そういう気持ちは、確かに私も味わったことがあった。小四のピアノのレッスンの帰り道、公園で子供を遊ばせている母親を見た時だった。いいなあ、こういうのっていいなあと、子供ながら思った。

「あなたは『かなちゃん』って呼ばれて親しまれてますね。あなたが何か言うと、皆が笑う。これは、いくつもの音が重なって、最高のハーモニーが作られていることに他ならないですよ。奇跡、としか言えないことです」

江口さん、大野さん、大林さん、他の色んな人たちの笑顔が浮かぶ。

「一つ一つの音には、特に意味なんてないんです。音が重なって、メロデーになって、最後の最後、一つの曲になって初めて、音それ自体に意味が宿る。私はそう考えています」

気付いた時には私は泣いていた。今の私は確かに楽譜に書かれた音楽を演奏してはいない。でも、無意味に見えるこの日々の中でも、人生という名の音楽を演

奏しているのだ——そう考えるだけで、幸せになれる自分がいた。

「ほら泣かないで、ホットレモネードを作ってきました。飲んでください」

心配するように村山医師が言い、コップが目の前に差し出された。一口すする。彼のやさしさが溶けこんでいる気がした。

「ご両親も言っていましたよ。あの子には辛い思いをさせたって。一目でいいから、あの子が自分の力で音を奏でている姿を見たいって」

「——ありがとうございます」

夕焼けに包まれたこの部屋で、最高の音楽が演奏されている気がした。

三、執筆者 林絵理香

昨日、隣の病室の河村さんが死んだ。
突発性の心不全だったという。

ゆうべリハビリ施設から部屋に戻る途中、ドアが開け放されていたその部屋を覗くと、すでに中はもぬけの殻になっていた。「河村奏音」というネームプレートだけが、何かの名残みたいに部屋の前に付けられたままだったが、今朝見るとそれもなくなっていた。

誰もいなくなった病室の前で、私はふと立ち止まった。換気のために全開になった窓から吹き込む心地よい五月の風になびいて、白いカーテンがふわりふわりと揺れている。

私は左右の廊下を見渡した。誰もいない。静かな早朝の、まさに病院の廊下だ。まだ朝の巡回は始まっていない。誰も通りそうにないことを認めると、私はその部屋に足を踏み入れた。なぜかはよくわからない。けれど、私の中でずつとくすぶっていた何かの、一つの欠片になりそうなものの匂いを直感的に感じ取ったからかもしれない。その部屋に入れば何かがわかるかもしれないと、何ものかが、あるいは部屋そのものが私を引き付けたのだ。ちょうど、磁石に吸い付けられる砂鉄のように。

私はゆつくりと、河村さんの部屋だった病室に入った。大きなベッドはシーツが取り替えられ、糊のきいたパリツとした白が朝日を照り返していた。小さなテレビ、本棚、冷蔵庫。壁紙も床も天井も、部屋にあるものすべてが嫌になるほど白く、本当に何もなかった。

ただ物がないというだけではない。河村さんの私物が撤去されると同時に、河村さんそのものも撤去されてしまったのだ、と私は思った。ここに以前は河村さんという女性が入院していたことを、今となつては一体誰がどうやって示すことができるだろう？ なるほど入院記録を見れば分かるかもしれない。だがもし私が入院記録を適当な名前に書き換えてしまったら、すなわち「河村奏音」という名前を消してしまつたら、この空間には河村さんは存在しなかったことになつてしまうのだ。少なくとも、私にとってはそういうことになる。

私は目をつぶって息を深く吸い込み、河村さんの姿を思い出そうと努めた。

四十代半ばの、綺麗な女性だった。しかしくつきりと整つたその顔立ちには、いつもどこかに深く彫りこまれた暗い影が差していたように思う。しばらく学校でカウンセラーをやっていると、そういう表情を見抜くことがいつの間にか容易くなつてくるのだ。

河村さんは、隣の部屋にいる若い私をいたわつて、「広場」でよく話しかけてくれた。「広場」で老人たちと俳句を詠み合っている中に、誘つてくれたこともある。でも関わりといえればそれくらいのものだ。私は河村さんの趣味も、好きな曲も、これまでのことも、何一つ知らないのだ。本当に、何一つ。

私は首を振つた。

唯一の証明であつたネームプレートさえも取り除かれてしまつた今、河村さんの存在はかき消されてしまつたのだ。

私の頭の中の河村さんは、どんどん輪郭を失つていくように思えた。徐々にフェードアウトしていつて、やがて薄もやの中へと消えてしまう。

私はそういう情景を想像して、得体の知れない悪寒をおぼえた。

人ひとりの存在は、こんなにもはかなく消し去ることがができるものだろうか？ この病院の人々は、その事実を呑み込んだうえでなおも毎日の入院生活を送っているのだろうか？

ぴかぴかに磨かれたフローリングが、朝日をまぶしく反射している。

私はそのまぶしさに眩暈がした。あまりにも白いこの病室に、これ以上いることは耐えられなかった。

逃げ出すように病室を出ると、朝の診察に回ってきた村山さんと鉢合わせになった。

*

「人が死ぬとはどういうことなのでしょう」

朝の簡単な診察が終わると、自分のベッドに横になっていた私は、病室を出ようとしていた村山さんにそ

自分でもよくわからない。ただ、村山さんなら私の話を笑わずに聞いてくれる気がしたので。

村山さんは足を止めて振り返り、怪訝そうに私を見た。しかしすぐにいつもの柔らかい笑みに戻って言った。

「桜さんが亡くなることはありませんよ。そんな心配はご無用です」

村山さんの笑顔を見ると、自然と私までほころんでくる。村山さんは、そんな人だった。

「ええ、わかっています。おかげさまで」

私はお得意の笑顔を浮かべて言った。そういうことじゃないんですが、と言おうとした口を嚙み、言葉を喉の奥に引き戻した。私は何も言わず、ただじつとドアの前に立つ村山さんを見つめていた。

村山さんはゆっくりと私に近づき、ベッドの近くに丸椅子を寄せて座った。

「先ほど隣の部屋にいたときも、そういうことを考えていたんですね」

やさしくて奥深い村山さんの声は、それでいてよく通る。人の心に響く声だ。

「ええ、まあ。そんなたいそうな思索でもないですけど」

村山さんは笑った。

そして腕を組み、ゆっくりと語りかけるように言った。

「病院に長くいると、患者さんは否応なくそういうことを考えさせられます。なんで生きているのだろう、生きているのと死んでいるのは一体何が違うのだろう、死ぬって一体何なんだろう、とね。しかし私たちは哲学者でも宗教家でもありません。そんなことを考え出しても、大抵ろくな答えは出てこないものです。そういうときは、ゆっくり深呼吸して、落ち着いて本でも読むことです。そして、これからのこと——退院したあとのことを、一緒に考えましょう」

村山さんの言葉は、ゆっくりと私の中に入り、浸透していった。

村山さんはいつも、患者がそのときに必要としている言葉を、必要な分だけかけてくれる。そのために常に一人ひとりの患者と向き合い、まっすぐな眼差しで患者と話し合っている。患者とのコミュニケーションを怠らず、丁寧に気持ちを汲み取るその真摯な姿勢は、彼の技術の高さも相まって、院内きつての評判だった。「河村さんのことは本当に残念です。私たちにも、出来ないことはあるのです。むしろその方が多いかもしれない。辛いことはありませんが、どうかそれをわかってほしい」

俯いてそう告げる村山さんの表情は本当に辛そうで、私は胸の奥が締められるような気がした。

リハビリ施設にいたおばさんたちが、最近村山医師の担当する患者が続けて急死しているらしいと噂していたことを思い出し、私は唇を噛んだ。あの人は、村山さんのことを何もわかっていない。

「ええ、わかりますよ」

村山さんは顔を上げ、また温かい笑みを浮かべて深く頷くと、しゃんと立ち上がった。

「おすすめの本を何冊かあげましょう。桜さんが好み
そんなものに、いくつか心当たりがありますから」

翻って部屋を出て行く村山さんがまとう白衣は、朝
日の色を受けて何よりも輝いて見えた。

村山さんが担当医になったのが私の人生で一番の
幸運だと、私は村山さんと話す度に思うのだった。

*

村山さんは自分のオフィスからたくさんの本を私
の部屋に持ってきてくれた。

『どうしても『なんで生きているんだろう』『死ぬつ
てなんだろう』と考え込んでしまうことがあったら、
開いてみてください。そういうことは、すでに先人が
たくさん考えてくれていますから』

私は礼を言い、目の前に積み上げられた本を眺めた。
村山さんは院内随一の読書家としても知られてい
る。古典から流行りの現代小説、歴史書、哲学書とな
んでも読み、よくこうして自分の患者に勧めたり、感

想を語り合ったりしているという。「病気を治すだけ
が私の仕事ではないですから。本もまた薬のひとつで
すよ」と彼は言っていた。そういえば、「広場」での
句会に参加しているのを見たこともある。確かに、彼
の端正な顔立ちの中には、古今東西の教養を呑み込ん
だ奥深さが見て取れた。話す言葉に重みがあるのも、
きつとそのためだろう。

本当に完璧な先生だなあと思いつつ、一番上の一冊
を取ろうとすると、その下に積んであった本がバサリ
と床に落ちた。拾おうと思つて身体を起こし、ベッド
からいまだに思い通りに動かない手を伸ばす。指先は
滑らかに動くのに、こうやつて手を伸ばそうとすると、
途端に痺れたように手全体が動かなくなる。手の力を
抜いて、そのまま身体の方で押し出すように――。村
山先生からのアドバイスを思い出しながら、ゆっくり
目的のものへと手を近づけていく。もうすこし。もう
すこしで、届く。毎日のリハビリのおかげかな――し
かしその本の表紙を見た瞬間、私の手はびくりとも動
かなくなってしまう。

夏目漱石の『それから』だった。

——桜先生、私、この小説すつごく好きなんです——。

頭の中で、忘れていたはずの音が鳴り響く。声だけじゃない。笑ったときに出来る小さなえくぼ、飴色の明るい髪、甘いラベンダーの香り、そういつたものが一瞬にして台風のように蘇り、胃の辺りから何かがこみ上げてくるような感覚が襲ってきた。

忘れていた？ そんなことができるわけがない。音も色も香りも、ぜんぶ焼き付いたように覚えている。ただ私はそれらを分厚いベールで何重にもくるみ、誰にも気付かれない場所にしまい込んでいただけだ。私
が壊れてしまわないように。

* * *

京子が最初に相談室に来たのは、ゴールデンウィークが終わってすぐの頃だった。

この時期は、いわゆる五月病のために学校に足が向かなくなる生徒が出てくるため、一般的に相談室を訪れる生徒も増えてくる。京子もその一人だった。

教室に入るとお腹が痛くなる、と訴えて入ってきたその少女はしかし、どう考えても「相談室」とは相容れない容貌をしていた。

色を抜いているのであろう明るい飴色の髪は丁寧に巻かれ、肩にかかるところで綺麗なカーブを描いている。派手すぎないように器用にほどこされた化粧は、最大限自分の魅力を活かす術を心得ている自信の証のように思えた。くるんと高く上がっているまつ毛に、高そうな銀のピアス。相談用紙を差し出す白い手の爪はきらきらと輝き、椅子に腰を下ろすとラベンダーの香りがふわりと舞った。

私はこの少女を前に少し困惑せざるを得なかった。今の高校でスクールカウンセラーを務め始めてかれこれ五年経つが、「こういうタイプ」の子と相談室で対峙するのは初めてだったからだ。

しかし仕事は果たすべきだ。とりあえずきちんと話を聞こうと思ひ、気を取り直して向かい合つた。

「ええと……カウンセラーの、江里口桜です。佐倉さんは、休み明けから教室に行きづらくなつちやつた感じかな」

「京子でいいです」

「じゃあ京子ちゃんは一——」

「京子、でいいです」

きよ、う、こ、と彼女は一字ずつ言った。あんまり綺麗な顔でそんなことを言うものだから、なんだかおかしくて私は思わず笑つてしまった。京子はムツとした顔で言った。

「なんで笑うんですか」

「ごめんごめん。わかつたよ、京子ね」

京子は満足そうに笑つた。完成された、美しい笑顔だった。

その日から京子は、相談室に通うことになった。

京子が教室に入れないというのは、どうやら本当のことらしくつた。ただ授業が面倒だからというわけではなく、教室という空間にいることがだんだん苦しく感じるようになってきた、と彼女は言つた。実際、彼女のクラスの出欠名簿を見ると、四月の半ばから学校を休んだり早退している日が多くなつていた。担任に話を聞いてみても、来た日にはごく真面目に授業を受けていたという。

明確な理由は自分でもよくわからないけど、なんとなく私だけ周りと違う気がする、周りの友達から変な目で見られている気がする、と京子は言つた。教室にいると、私はここにいないべきじゃないのにつて感じる、と。

高校生には別段珍しくない悩みだ。おおよそ友人関係で何かあつたのだろう。きっと、京子みたいにキラキラして見える女の子たちの間にも、色々と思うところはあるのだろう。

でもずっと家にいたらお母さんに怒られちゃうから、と言つて、京子は登校時間よりやや遅れて毎朝こ

の部屋にやってきた。担任経由でもらった授業プリントと一緒に取り組み、疲れてきたらライトコートに出て花に水をやったり、本を読んだり、彼女が得意だという書道をやったりした。終業のチャイムが鳴る少し前に、彼女は学校を出て行った。そんな日々がしばらく続いた。

京子はよく笑った。彼女が笑うと小さなえくぼが浮かび上がり、それがいつそう彼女の魅力を引き立てていた。

保健室に通う生徒は少なくないけれど、相談室に通うのは京子だけだった。

「私は桜先生が好きだからここにいます」
いつかそのことを尋ねたとき、京子は屈託のない笑顔で浮かべて言った。私は頼りにされていることを嬉しく思った。そのときの私には、その言葉の意味がまったくわかっていなかったけれど。

*

そのまま夏休みが終わり、二学期になった。

相変わらず京子は毎日相談室に通っていたが、今の状態がずっと続いたままでいいとは思っていなかった。私は京子に、この機会に再び教室に戻って見ないかと言った。

京子は読んでいた本から顔を上げ、しばらく黙って私を見つめていた。

「私は桜先生とずっとこうしていたいのに」

京子はこぼれるように呟いた。

「桜先生は私のこと好きじゃないんですか？」

台風が近づいていた。窓には暴力的な風が吹き付け、ガタガタと揺れていた。

「京子のごときは好きだよ。京子という時間はすごく楽しい。でも、ずっとこのままでいいとは思わない。私たちとは関係ないところで、時間は過ぎて行ってしまう。だから、京子はもう一度、みんなと同じ時間に戻る必要があるんだよ。京子にとって、きっとその方がいいと思うんだ」

私は用意していた言葉を並べた。けれどそれは自分で口にするうちに、とても平坦でつまらない、薄っぺらな言葉になってしまいうように思えた。

京子は何も言わず、私の瞳をじっと見つめていた。小刻みに揺れる窓の音だけが、不穏に響いていた。

「うん」

京子はパタンと本を閉じると、すくつと立ち上がった。

「桜先生がそう言うなら、やってみるよ」

私は素直に受け入れてくれたことにやや驚いたが、ほっと安堵のため息をついた。

「ありがとう。辛くなったら、いつでも待ってるからね」

京子は少し寂しそうに笑った、白い彼女の顔の右半分が影が差しているように見えたのは、きつと鼻筋に塗られたハイライトのせいではなかったと今ならわかる。

次の日から、京子は徐々に通常の学校生活に戻り始めた。最初は週一回、次の週は三日、その次は四日……といった調子で、京子はだんだん教室に身を置けるようになってきた。休み時間や放課後には相談室に顔を見せ、その日にあったことや教室での出来事を話してくれた。

十一月にもなると、京子はほぼ毎日学校に通えるようになった。それに伴って、相談室に来ることも少なくなっていくた。

相談室に一人で座っている時間は、京子が来るまで当たり前だったはずなのに、なんだか物寂しく感じられた。けれど京子が確実に良い方向に進んでいることが、そしてその手伝いを私ができたことが、私は心から嬉しかった。

*

何かが壊れたのは、ある晴れた冬の日だった。

もうすぐ二学期も終わろうという時期に、京子は再び相談室に通うようになってしまった。私はそれを拒むことはできなかつたから、また京子との時間軸が動き出した。

以前と違うのは、京子がずっと私から離れないことだった。京子は宿題や配られたプリントにもほとんど手を付けず、いつまでも私と話したがった。

試験期間のある日、私と京子は相談室のソファに並んで座っていた。本来なら別室で試験を受けていなければならぬはずの京子は、鞆から一冊の本を取り出して見せた。夏目漱石の『それから』だった。

「桜先生、私、この小説すっごく好きなんです。特に、この部分」

京子は十五章の一節を読み始めた。

……平岡と自分とで構成すべき運命の流は黒く恐ろしいものであった。一つの心配はこの恐ろしい暴風の中から、如何にして三千代を救い得べきかの問題であった。……

京子があまりに真剣な声色で読んでいるものだから、私は気になって、京子の方に近づいて覗き込んだ。「渋い趣味してるなあ。なんでそんなにその小説が好きなの？」

京子は視線を上げ、私を見上げた。効きすぎた暖房のせいで、部屋の中は汗ばむほどになつていた。

「桜先生が私と結婚したら、佐倉桜になっちゃいますね」

京子は突然そんなことを言った。私が確かに、と笑い飛ばすより先に彼女は続けた。

「好きな人がいたんだよ」

京子の頬がわずかに赤らむのがわかった。チークで塗った赤みじゃなくて、もつと自然な、ふんわりした色づきが浮かんだ。

私はそんなことは初耳だったので、いささか驚いて彼女を見た。

「あらま。だから毎日頑張っていたんだ」

京子はまぶたを閉じて微笑した。

「でも取られちゃった。すごくかつこいい人と付き合
つてるんだって、私に写真まで見せてきた」

京子は携帯を取り出し、私に写真を見せた。確かに
すらつとしてかつこいい少年が写っていた。私は頭の
中で何かが引つ掛かり、もう一度彼女の言葉を反芻し
た。すごくかつこいい人と付き合ってるんだって。

「その子ね、すごくかわいいの。私と同じくらい」
なんてね、と京子は笑った。私は京子が一体何を言
っているのかわからなかった。

「でも——」

京子がゆっくりと私の方を向いた。京子は私の瞳の
奥を、じつと見つめて言った。

「今は桜先生の方がかわいいな」

京子の声は聞いたことがないくらい熱かった。その
溶けるような音を、私を見つめる瞳の色を、私は今で
もはつきりと思ひ出すことができる。

京子は私の方に寄って、そのまま私の肩にもたれか
かった。餡色の髪が、さらりと肩にかかる。ラベンダ
ーの香りが鼻をつく。彼女は私の右手を両手で覆い、
彼女の白くて細い指を絡ませた。彼女の爪がまぶしく
光った。

その瞬間に、今までのすべてがほどけ、崩れてしま
ったのだ。体内の温度が急激に下がっていくような感
覚があった。そしてそれと同時に、私と京子の間にあ
った何かが、決定的に壊れてしまったのだ。京子がそ
のまま私の右腕を取り、自分の胸にきつく抱き寄せる。
彼女の甘い息が右手にかかり、私の右腕は痺れたよう
に熱くなった。

違う、こんなのは間違っている——そう言葉にする
前に、私は京子を突き飛ばしていた。

ガタン、と鈍い音がして京子がソファから転げ落ち
た。傍に置いてあった小説がバサリと開いたまま床に
落ちた。

「だめだよ」

絞り出した声は煙のように消えていった。

うつぶせに倒れたまま私を見上げる京子のまぶたは濡れて、アイシヤドウがぼやけていた。

私はソファから立ち上がれなかった。目の前にいるのが誰なのか、そのときの私はもうよくわからなかった。私の記憶の中にいる可憐な京子が、どんどん塗り替えられていく。私と一緒に笑っていたのは、一体誰だったのだろうか？ 京子は私をずっとそういう目で見っていたのだろうか？

暖房の暑さで私の頭はぼんやりと霞んでいた。目の前の景色が揺らいで見えた。

京子は弱々しく立ち上がると、鞆も持たずに相談室から出て行った。

私はソファの上で固まったまま、ただそれを目で追うことしかできなかった。

*

京子が亡くなったと知ったのは、ぽつぽつと桜が咲き始めてきた頃だった。

滅多に鳴らない相談室の電話を取ると、京子の母だった。

朝から出かけたまま帰ってこないために、母親が心配して捜索願を出した。次の日に、川で溺れていた京子の遺体が見つかった。遺書やそういった前触れはなく、その日は前日の雨で水かさが増していたから、おそらく事故だと思われる――。

そういった旨を、京子の母は話してくれた。受話器の向こうで響く声はだんだん私から遠ざかり、どこか遠う世界の話をしているように思えた。電話を切る前に、彼女は謝辞とともに言ってくれた。

娘がよくお世話になったと言っていたものですから――。

私は受話器を置いてぼんやりと窓の外を眺めた。いつか京子と水やりをした花壇の花々が、明るい春の光を帯びて色とりどりに咲いていた。京子がいなくなっただにも関わらず。

不思議なことに、涙はひとつも流れてこなかった。人がいなくなるというのがどういうことか、私にはうまく掴めなかったのだ。幼い頃に祖父母を亡くした私にとつて、自分に近い人が亡くなるのは実質初めてのことだった。

新学期が始まる少し前に校内で同学年のみを集めて葬式が行われたが、深く悲しんでいるように見える生徒はあまり多くなかった。聞くと、京子は三学期にほとんど学校に行っていなかったという。次の週から新学期が始まると、生徒たちは笑い、叫び、騒ぎ合っていた。何一つ変わらない高校の風景だった。京子がいなくなつたにも関わらず――。

京子の両親に連れられて、桜がすっかり散つた頃に一度墓参りに行ったことがある。

「佐倉京子」とだけ書かれた光沢の輝くその石は、妙によそよそしく感じられた。この中にあの美しい少女が眠っているだなんて、到底考えられなかった。墓石の前にずっと立っていると、京子のすべてが無化さ

れてしまうように思えて、私はだんだん胸の辺りが気持ち悪くなってきた。だいいち、隣の墓石と名前以外で何が違うというのだろうか？

京子は――京子は、一体どこに行ってしまったのだろうか。

それからというものの、私は約一ヶ月の間を抜け殻のように生きていた。

何をする気力も起きず、ただ機械のように決まったことを毎日繰り返し返しているだけで、そこに何ら人間的な感情はなかった。誰に何を言われても、頭の中に入つてこない。今見ている景色が現実なのか夢なのか、それすらもよくわからなかった。焦点がぼやけて、見るものすべてが遠のいていく。

そんなふう歩いてきたから、目の前に迫ってくるバイクを認めても、別に恐怖とか絶望とかそんなものは何も感じなくて、ただ乾いた諦めしか私の中には起こらなかった。

別にいいかな、このまま死んじゃっても。

視界がパツと明るくなって、私はこの病院に運ばれた。

* * *

「目が覚めましたか」

ぼんやりと白い天井が浮かび上がってくる。何度か瞬きをして軋む身体を起こすと、横には朝みたい村山さんが座っていた。知らぬ間に眠ってしまったらしい。全身が汗ぐっしりで、起きると頭がずきんと痛んだ。

「ひどくうなされていたものですから、気がかりで様子を見に来たんです。ずっと同じ方の名前を口にされていましたよ」

村山さんは冷たい水が入った紙コップを差し出してくれた。私はそれを一気に喉に流し込み、深く息を吐き出すと、ようやく気持ちちが落ち着いてきた。京子のことですよね、と私が呟くと、村山さんは頷いた。「きつと桜さんにとって、大切な方だったんですね」

私はゆっくりと頷いた。

「とても」

村山さんは何も言わず、ただやさしい目をして座っていた。私の言葉が形になるのを待っていてくれるようだった。

私はずいぶん長い間眠っていたようで、窓の外は夕焼けに赤く染まっていた。窓から差し込む夕日で部屋の中に漂う埃がまぶしく光り、ほんのりと暖かい空気が世界を包んでいる。

京子と初めて会ったのも、去年のこんな五月の日だった。

私は目をつぶり、時間をかけて言葉を探した。

「誰かがいなくなるって……：……どうということなのか、私は受け止め切れていないです」

河村さんがいた病室に引き付けられたのも、あの空間に京子の墓と同じようなものを感じ取ったからかもしれない。

私は強くこめかみを抑えた。あの日からずっとくすぶっていた、けれど見ないふりをしてきた大きな問いが、私にのしかかってくる。

なぜ京子が死ななければならなかったのだろうか？

京子の死は偶然ではない。私は根拠もなくそう確信していた。京子が自ら死を選んだのでなくとも、彼女の死は起こるべくして起こったもののようにしか思えなかった。桜を散らせる風のように、人の力ではどうにもならない何か、京子を連れ去ってしまったのだ。京子はあまりに綺麗で、あまりに透明だったから。水に浮かべればそのまま溶けてしまふような彼女はきつと、私が突き飛ばしたはずみに、誰も知らないところへ音もなく運ばれてしまったのだ。

でも、それってあんまりだ。

「桜さん」

村山さんは私の顔をしっかりと見つめて言った。

「誰でも波を生み出している、そんな情景を想像してみてください。私も桜さんも、京子さんも。何もしなくても、ゆらゆらと動く波をずっと立てています。そ

して誰かにぶつかって——強め合つて二倍の振幅になるかもしれないし、互いの波を打ち消し合つてしまふかもしれません。とにかく、何か新しい波形ができます。もちろんそれは両義的なもので、何もしなくても波が立つてしまうのはある意味残酷なことです。ねえ桜さん、考えてみてください。今私が死んでも、桜さんが亡くなつても、何か大きな歯車のようなものが音を立てて変わることはありません。私たちはそんなに偉大な存在ではないからです。でも、いなくなつたりはしません。京子さんが立てた波は、今でも桜さんと重ね合っているはず。そしてそれはきつと、決して互いを打ち消し合つてはいないと思います。あくまで私の推論ですがね。少しまぶたを閉じてみてください。京子さんの音も匂いも温度も……ぜんぶ覚えているでしょう？」

私はまぶたを閉じた。京子のいる景色が、かげろうのように蘇ってくる。いなくなつたりは、しない。本当だろうか。村山さんの言葉なら、信じてみてほしい気がする。

「京子は……」

私の言葉は途中で詰まってしまふ。喉の奥がキュッと締まったように苦しい。村山さんは、じつと待つてくれている。

「京子は、今年の桜を見る事ができませんでした。あの学校の桜はとても綺麗だから見てほしかった」

それで、横で桜先生、と笑つてほしかった。

あの日に出てこなかった涙が、頬を伝つて手のひらに落ちた。ひとつ流れると、もう後は止まらなかつた。拭えば拭うほど、どんどん溢れてくる。

村山さんはただ黙つてずつと背中をさすつてくれた。私はそれが何よりも暖かくて嬉しかった。

あの冷たい冬の日に、私が京子を突き飛ばさなかつたら、彼女の運命は変わっていただろうか？ わからない。そんなこと、私にはわからない。

けれど――

涙を拭つて顔を上げる。

「今でも桜さんと重ね合っているはずです」

村山さんがかけてくれたその言葉に、今はすがりたかつた。

ベッドに付いたテーブルには、村山さんが拾つてくれた『それから』が置いてあつた。夕日に照らされたその本は、淡いオレンジ色に光つていた。私はそれを手に取り、ゆつくりと開いた。

甘いラベンダーの香りが、ふわりと立ち上つてきた。

四、執筆者 霜雪海十羽

昨日、担当していた江里口さんが死んだ。

看護師が病室を訪れたときにはすでに意識はなく、すぐさま緊急治療室に運ばれるも治療の甲斐なく息を引き取つた。突然の死に、訃報を聞いて駆け付けたご家族の方々も狼狽していたようで、私を中心に治療に当たつた医師や看護師達はひどく詰られた。力が及ばず申し訳ありません、と頭を下げるしかなかつた。彼女は――江里口さんは、幸せに逝けただろうか。

そうならばいいと思う。いや、そうでなければいけないのだ。彼女が幸せではないのなら、江里口さんを殺した意味がないから。

*

最初に人を殺したのは、中学生のときだった。

父親を早くに亡くしていたため、私は母親に女手一つで育てられた。母親は基本優しくだったが、お酒を飲むと態度が豹変した。大声で喚き散らしたり、かと思えば怖い顔でぶつぶつ何かを呟いていた。ときには私をぶつたり怒鳴りつけることもあった。今思えば、立派な虐待だ。それでも、お酒を飲んでいないときは優しい母親だったし、私はそんな母親のことが大好きだった。

中学生になると、母親はお酒を飲んでいないときでもヒステリックに喚くようになってしまった。学校から家に帰ると、一番に目に入るのはぼさぼさの髪で目の下に隈がある、大好きだった母親とは似ても似つか

ない存在だった。それでも私は母親のことが好きだったし、元の母親に戻ってくれることを願って毎日を過ごしていた。

しかし、そんな日々の終わりは唐突に訪れた。

ある日の夕方、ソファでうたた寝していると、ふと息苦しさを感じ、目が覚めた。パチリと目を開けると私の体に母親がまたがっていて、ぶつぶつ何かを呟きながら私の首をしめていた。霧がかかったようにぼんやりとしていた思考が数秒後に晴れ、母親が自分を殺そうとしているのだと悟った。なんで、どうして、と思いつつも必死に抵抗した。母親から「一緒に……」という言葉が聞こえてきたが、そのときの私は母親の手を引きはがすことで精いっぱい、発された言葉の意味まで考える余裕がなかった。夢中でもがいていると、不意に体が軽くなり、ゴンツと鈍い音がした。恐る恐る音がした方向を見ると、そこには角に血が付いたテーブルと、血がにじんでいくカーペットと、ピクリとも動かない母親の姿があった。一瞬、自分が何を

したのかわからなかった。母親に話しかけても、もちろん、返事はなかった。血が付いたテーブルの上に、大量の睡眠薬が置いてあった。そこで私はようやく、母親が発した言葉の意味に気づいた。母親は私と一緒に死のうとしていたのだ。その結論に達したとき、急におぞましいほどの吐き気がこみあげてきて、私はトイレに駆け込むと胃の中のものを全て吐き出した。母親が私を殺そうとしていたことにも、自分が母親を殺してしまったことにも、涙が止まらなかった。

少したって、再びリビングに戻った。母親は相変わらず動くことはなかった。私はその顔を覗き込んだ。母親は、生前の顔が嘘だったかのように、安らかな顔をしていた。とても衝撃的だった。ああ、母さんは――ようやく、楽になれたのだろうか。だとしたら、母親は私のことも楽にしようとしてくれていたのかもれない。いや、きっとそうなのだろう。私は取り返しをつかないことをしてしまったのだ。その日は、母親の手を握りしめたまま、眠りについて。

翌日になって、警察が来た。私の証言や大量の睡眠

薬、直前の母親の様子などから私は正当防衛と判断され、親戚の家に預けられることになった。親戚の家では、慰めの言葉を何度もかけられた。可哀そうに、怖かったでしょう、あなただけでも無事で良かった……。何度も何度もかけられるその言葉に、私は心の中で違う、と叫んでいた。私はあるとき死ぬべきだったのだ。母親の選択は何も間違つてなかった。母さんは、僕のことを楽にしようとしてくれただけなのに……。

あの日のことを何度も夢に見た。夢はいつも、母親に首をしめられながら視界が暗転するところで終わる。今度は一緒に死ねる、と思ったところで目が覚めて、その度に絶望に駆られていた。何度も死のうと思つた。しかし、ここで楽になってしまつては駄目だと思つた。私は、この罪を一生背負っていかなければならぬのだ。それでも、償いにはまだ足りない。一体私に何ができるだろうか。そう思つたとき、頭に浮かんだのが苦しみからの解放だった。生きている限り人には苦しみが纏わりつく。楽になるには、死ぬしかない。しかし、世の中の人間は死を怖がる。気持ちらはわ

かる。かつては私もそうだったのだから。気づいていないだけなのだ、死が幸福をもたらすと。

私は決心した。この地獄のような世界で生き、多数の人々を死によって幸福へと導く。それこそが私に与えられた罪であり、償いであり、使命なのだ。

そのためにはどうしたら良いか考えた。ふとテレビをつけると、医者ドラマがやっていて。これだ、と思った。病院ではいつ人が死んでもおかしくない。どさくさに紛れて患者を殺しても、手口がバレなければ捕まることはないのではないだろうか。幸い勉強をすることは苦ではなかったため、医者になると決心したその日から私は猛勉強を開始した。その傍らで、人を殺すにはどうするのが最善なのか、ということや殺人の痕跡を消す方法などについても調べ、着々と準備を進めていった。毎日毎日机にかじりついている私を見て、親戚などは心配していたようだが、周りを気にかける余裕などなかった。そのときの私には、縫れるものがもうそれしかなかったのだ。

やっとたどり着いた場所。真新しい白衣を纏って、私は着々と準備を進めた。同僚の医者や看護師、患者たちと交流を深め、私は次第に信頼を得ていった。使命を成し遂げるための手段ではあったが、母親と親戚以外まともに人と交流していなかったせいか、様々な人たちと話し、仲良くなつていくのは純粋に楽しかった。

数年間そういったことを続けていると、次第に私のことをえらく慕ってくれる子もできた。少しこそばゆかったが、そのこそばゆさが嫌いではなかった。使命のための足掛かりとして選んだこの仕事も、この病院も、病院で出会う人たちのことも、大切になっていった。大切な人だからこそ——苦しみから解放してやらなくては。私は、長い年月をかけた計画を実行することを決めた。

最初の相手は、まだ幼い女の子だった。治療が難しい病気にかかっているため入院生活が長く、笑うことが少ない子だった。この子を苦しみから解放してあげたいと、心の底から思った。できるだけ幸せなまま死

なせてあげたくて、彼女を精いっぱい元気つけた。その思いが通じ、彼女は明るく笑えるようになった。無邪気に笑う彼女を見て、胸が温まると同時に、今だ、と思った。

意識して人を殺すということは初めてだったが、案外簡単なもので、彼女はあつけなく逝った。なるべく苦しめないよう、寝ている間に死ぬように周到に準備をしたため、彼女の死に顔はあの日の母親のように安らかだった。良かった、彼女は苦しみから解放されたのだと思った。

その後も、数人の命を奪った。私の担当している患者が連続死していることについて、院内で噂話がされていることは知っていたが、あくまで根拠のない噂話であったし、ほとんどの人たちはその話を信じていなかった。当分は怪しまれることもないだろう。私はまだまだ、この仕事を続ける気だ。一人でも多くの人を、苦しみから救いたいから。

*

「村山先生？　どうかされましたか？」

「……ああ、すみません。少し考え事をしていました」
どうやら、新しい患者さんが入院し、担当医が私になったために顔合わせに行くようだ。どんな人だろうかと思いつながらドアを開けると、そこにはどこことなく暗い雰囲気を持った、まだ幼い少女がいた。私は、一番初めに殺したあの子のことを思い出した。ああ、あの子も最初の頃はこんな風に笑わない子だったな。

願わくばこの子が、幸せになれるように。いや、私が幸せにしなければいけないのだ。それが私の、使命なのだから。

「こんにちは。今日からあなたの担当医となりました、村山と申します。永山さんの苦しみを和らげることができるよう、誠心誠意サポートさせていただきますので、これからよろしくお願いします。一緒に頑張りましょうね」

(了)

つきがさ
月暈

雨合千葉

薄暮ルク

白木虎

準清奏弥

一、執筆者 雨合千葉

かけ声にテキトーに混ざり、椅子をももにかけて机の奥にホールインワン。前列がだべり始めたので突っ込んでバックバックを背負う。笑い声が響く東階段を下がる。ごみの一次集積場で右に曲がり、国語科教室を三つ通り過ぎる。窓から差し込む光はほこりを舞い散らせる、広々とした教室に絞られたゼミだ。ドアが開く音が聞こえる。

「こんにちは」

「こんにちは、はい退会届」

テーブルゲーム同好会はいいところだった。だが思っていたものとは少し違った。テストプレイしていな

いものぼつかりやるな、パーティーではあるまいし。さて帰るか。

校門前のトロフィーやら楯やらが飾ってあるところで声をかけられた。

「ハマナ、ちよつといい？」

見ると、友達の裕子だ。そしてその用事は、新しく立ち上げる同好会のメンバーになってほしいというものだ。

「五人必要なだよ」

名前を貸すだけで十分なら、と申し出を了承する。しかしせっかくだからと顔合わせをすることになる。吹き抜けた中庭に面するバルコニーは共有スペースとなっており、机と椅子がある。椅子のうち三個は人が占めていた。

「唐枝きねです！」

「入本想愛です」

「坂本芽衣です」

「大灘裕子だよ」

「私は人数合わせなので気にしなくていいです」

「せっかくじゃん、名前くらい言おう!」

裕子が口を出す。

「浜中沙羅です」

自己紹介が終わった。裕子はこのまま申請書を提出しに行くようだ。

立ち上がった彼女はしかと申請書を手にとったのだが、何も机からなくなっていない錯覚をした。無理もない、真白い机から白い紙をすべらせ出したのだから。

「裕子、その申請書見てもいい?」

びらっという音が私に向かった。予想は当たっていた。同好会名とメンバーの名前以外何も書かれていない。

「誰か生徒手帳持っている人は?」

「あ、あるよ」

唐枝が胸ポケットから取り出した生徒手帳から部活と同好会の規則、さらに同好会の設立要項を確認する。

『一、指定の用紙に二で示す内容を記入し、生徒会に届け出ること。指定の用紙は顧問から受け取ること。』

二、用紙に同好会の名称、加入する生徒、顧問、活動系統、活動時間、活動場所、設立目的を記入すること。

三、設立には最低五名の生徒が同好会に入る必要がある。

四、生徒会が申請書を受け取った後、審査期間を経て設立となる。審査期間中の活動は可能だが、学内の活動としては扱われない』

「裕子よ聞こう、顧問となる先生はいるか?」

「いないよ!」

「顧問は同好会に必須だ裕子オ!」

「えーっ、そうだったのハマナ!」

手を口元にあてて後ずさりしている。まるで二人だけの寸劇ののだが、無理もない。会って数ヶ月では裕子にものを言える人間はいなかった。

「顧問になってくれそうな先生はいますか?」

そこからなんとか各所に話を付け、申請書を書き上げた。

そして私は決意した。この人たちを放っておいてはいけない。

同好会の設立申請書を出して数週間後。

Yuko へ(次の集まりでグッズの見せあいっこしよう！)

そあ へ(いいね！)

きーね へ(学校に持ってきていいのですか？)

そあ へ(同好会だしいいんじゃない？)

きーね へ(まだ審査期間中なので同好会の活動と認められないかもしれません)

Yuko へ(二人とも仲良くして)

そあ へ(はまなちゃんわかる？)

あれから何かあると最終決定権は私に来るようになった。名前を貸すだけだったのになして。

(学内活動云々は学外の活動が功績として認められないというだけで、審査期間中の活動が同好会の活動

であるかどうかは規則にはつきり書かれていません。生徒会の友達が言うにはこういうのは黙認されるそうです。それと私はハマナではない。)へハマナではない

Yuko へ(ハマナでいいじゃん！)

きーね へ(黙認というのはいかがなものでしょうか？)

そあ へ(何も起こらないなら問題ナシっしょ。)

Yuko へ(よし！ 次の活動日は持てる限りのグッズを持って集合だ！)

(それはさすがにダメなので選りすぐりのものを持ってきてください。)へハマナではない

坂本 へ(しえ ajk お fy ん b)

Yuko へ(!)

そあ へ(どーしたん？)

坂本 へ(すみません、家族が勝手に押ししてしまいました)

家族……弟なり妹なりか？

坂本 へ(次回の活動確認しました)

時間がかかっつてのメッセーじだ。先の犯人をたしなめていたのなら、ソイツは相当な暴れん坊だろう。

今週は日直班のため、掃除がある。その上提出物関係でしばらくホームルームにとどまった。今活動場所に向かっているが、みんなそろっているはずだ。

ドアのガラス板越しに中の様子が見える。テーブルが一行に並べられている。その上にCDやら缶バッジやらがある部分で乱雑に、ある部分で整えて積まれ、また別では美麗に置かれている。

「いったい何が起こっているんだ？」

教室に飛び込むが、裕子・唐枝・入本は集中しているようで、こちらに見向きもしない。

「沙羅さん、あの……」

話しかけてくれたのは坂本だった。

「あなたは私を沙羅と呼んでくれるのか？」

「はい、そっちの方がいいかと思って」

坂本はいいやつだ、間違いない。いくら私はハマナではないと言ってもギャグと思われてしまうのにかわかってくれるなんて。

「ありがとう。それと状況説明も頼めますか？」

坂本が言うには、三人は集まってまずグッズの見せあいしようとしたが、やはり私が来てからということになった。次に、入本がグッズを並べた。それを裕子が真似して、唐枝が追隨。

「そこで私が来ました」

「途中からいたのにそこまでわかるのですか？」

「話している内容と状況、あと皆さんの性格から推測しただけです」

すごいな坂本は。

「それにしても裕子さんはきれいそうなのどこか抜けているといえますか」

確かによく見れば節々飛び出すところがある。一番下に色紙というのも裕子らしい。

だがひどいのはもつとひどい。なぜ大切なものを不法投棄がなされた山のようにできるのだろう。

それに対する美麗なものは、ついたてやら台やらが使われている。網にフックでキーホルダーをかけたかなんかもしている。

「これが一番きれいだな」

「褒めてくれてありがとー」

「わざわざ持ってきたのか？」

「うん、やっぱ並べると映えるかなってー」

「そうか、ところであの二人はどう思います？」

「後で手を加えた方がいいねー」

入本もだいたい同じことを思っっていそう。しかし、時間がかかってしまうな。

「坂本さん、先に二人を手伝おう」

「わかりました」

先にかかるのは裕子。タワーを解体して、種類ごとに並べ直す。

「待って、人ごとに分けて」

手を動かしていた坂本に裕子の言うことを伝えようとすると、すでに同じ顔が揃い始めていた。

「この人を中心に」

テーブルにこすらせることなく場所が入れ替わっていく。裕子はこれもいいとつぶやいた。

唐枝の場合、まずひとつずつバラした。タオルはたみ、うちわはずらして重ねる。唐枝がこれは右に置く、これは広げると手を出す間にも坂本は作業を続け、かつ唐枝が変えたところはそのままにしていた。

入本からすればいつの間にか終わっていたようで、二人の様子を見てかなり驚いていた。準備が終わったところでグッズの紹介を始めた。ノートを開いてみな話を書きとめる。アイドル同好会なのだから研究のようなことぐらいはしておかないと。

三人が終わり、私の番になったが、話すことはないので次に回す。しかし回された坂本は言いよどむ。グッズを持ってきていないのか、と質問すると首をかしげて言った。

「私はグッズを買ったことがないんです」

そういうこともある、というよりアイドルを知っている中でグッズにお金を払う人の方が少ないと考えられる。だが、同好会の設立メンバーになる時点で並ならぬ思いはありそうなものだ。

「へー、いつもどうやって応援しているの？」

「それは、動画を見たり、ゲーム実況もやっている方々なのでそれを見たり……」

「ライブとかは行ったことありますか？」

「それもないです……」

「じゃあさ、今度行ってみなよ！」

坂本は口をモゴモゴさせる。みなが耳を揃えている。

二、執筆者 薄暮ルク

「実は、私、アイドルのファンをしていることを家族にまだ打ち明けていないのです。私の家は学業を最優先にすべきという考え方で、オタクという人達をまるで生ゴミのような存在として扱い、アイドルに対しても強い偏見をもった、今時遅れた家。本来、私がゲーム実況や動画を見ているスマホも必要最低限の連絡のためにしか使ってはいけないことになっていきます。なので、アイドルのファンをしていることを打ち明けるとそれもバレてしまうことになり、動画やゲーム実況をこっそりとみるというささやかな幸せさえ

も奪われてしまうかもしれないので、どうしても打ち明けられないのです。アイドルのファンをしていること、そしてこの部活に入っていることを秘密している現在、ライブに行くことは厳しいのです」

坂本はそう言っただけで目を伏せた。

「でも、芽衣の弟の春樹君は結構自由に遊びに行っているって聞きますよ？」

坂本と同じ年の弟がいる唐枝は坂本の弟の普段の様子も詳しいようだ。

「春樹は成績がとて面白いので、多少の羽目外は許されるのです。それに、春樹は自由と言っても夜抜け出してしまうこと以外は普段の行動はまるで見本のように。しかし、私の成績ではとても羽目外など許されません」

「芽衣の成績でダメなんてどれだけ厳しいの!？」

三人が驚いた顔をした。そういえば、坂本芽衣と聞いた時どこかで聞いたことがある気がしたが、定期テストの成績上位者の一覧に毎回一位として紹介され

ていた気がする。確かに、『芽衣の成績でダメなんてど
れだけ厳しいの!』だ。

「いえ、私はどうしても推しの誘惑に負け、いつも生
配信の動画やゲーム実況などを見てしまいます。です
が、これをなくしてしまうと私はもう生きていける気
がしません」

大袈裟なと思っってしまったが、三人はうんうんと頷
いている。

「わかる！ もう今は推しのために生きてるって感
じだよね」

そんなものなのか。

「芽衣もいつか親に認めてもらえるといいね！」

裕子がニツと笑っていった。

「それはそうと、まだみんなが推しているアイドルの
ことについて詳しく知らなかったですよね。お互いに
推しについて紹介しませんか？」

唐枝が言った。

「賛成！ じゃあ、私からいい？」

入本が率先して手を挙げた。おとなしい性格かと思
っていたけどやはり推しのことは語りたいたのか。そし
て、みんながうなづいたのを確認して話し始めた。

「私の推しの冬馬くんはあの有名な男子アイドル事
務所に所属しているアイドルグループのセンターを
やっているんだ。私は冬馬くんの全部が好きだけど、
特にイチオシのポイントはいつもフアンのことを考
えてくれている誠実な性格！ チャラそうな見た目
に反してライブには真剣に向き合うところ、ダンスの
練習を手を抜かずにやっているところ。そういうとこ
ろを見てみると、スキヤンダルなんて起こすような三
流アイドルとは違うなって思うの。これはライブ映像
の初回特典についてくる普段の様子を撮影した映像
を見て思ったことなんだけど、ぜひみんなもライブ映
像を見てみて」

さりげない布教もぬかりなく行う入本。そもそもそ
の映像が初回特典ならば今買っても見れないので
は？ と思ったけどこれもさりげない古参自慢かも
しれないと思いきろした。そして、入本が手に持つ

ているその冬馬くんが大きくプリントされたうちわを見た。確かにチャラそうな見た目である。金髪に染めた髪の毛、片耳にはめたピアス。私の好みではないが整った顔立ちをしている。さすが大手アイドル事務所センターである。

「それで、冬馬くんが一番ビジュアルが良かったライブは……」

入本の冬馬くんへの愛は止まることを知らず、とうとう裕子がもうそろそろ止めるまで三十分以上も話し続けた。まだ全然話足りなそうな入元。やっぱり好きなものを話すのは楽しいのだろう。だけど、聞いているみんなは疲れてしまっている。そんなことも気にせず話することができるその空気の読めなさも入本らしい。

「次は私が話します。」

坂本さんが言う。

「私の推しは Kazu です。彼はアイドルという枠組みに取られることなく、ゲーム実況や個人での生配信ライブ、歌ってみた動画あげるなど自由な活動をし

ています。そんな自由な生き方に惚れてそれからはずっと Kazu の動画を日々チェックする毎日です。これが、彼の写真です」

そう言って、坂本さんはスマホの画面を見せてくる。スマホに映っていたのは髪の毛をピンクに染めた二十一歳ぐらいの男性だった。アイドルというのは皆こりも明るい髪色をしているのだろうか。

「Kazu は毎週日曜日に生配信ライブを十九時からやっているのです是非見てみてください」

そう言って坂本さんの話は終わった。さっきの入本の長い話に比べ随分短いものだった。

「次は、私ね」

唐枝が言う。

「私はみんなと違って女性アイドルを推しているの。あの、人気女性アイドルグループの一人山本さつきちゃん。それが私の推し。バラエティ番組によく出ているから知っている人もいると思うけど、さつきちゃんには常に笑顔でメンバーとの仲が良く、誰からも愛さ

れる末っ子キャラなの。そんな可愛さを私は好きになつたの」

唐枝が持つてきたグッズは確かにピンクを基調としている物が多かった。これは女性アイドルグループだったからなのか。

「最後は私！」

裕子が張り切つて言う。

「私はみんなみたいに有名なアイドルを推しているわけじゃない。ご当地アイドルを推しているの！彼の名前は……」

裕子が名前を告げようとした時、

キーンコーンカーンコーン

チャイムがなった。最終下校五分前を知らせる音だ。五人は顔を見合わせる。そして、机の上に広がったグッズの山を見る。しばらくの沈黙が続いた。

「ヤバイー！」

五人は同時に叫んだ。後五分でグッズの山を片付けなければ。慌ててグッズの片付けに取り掛かる。

「危なかったね」

「ちよつと間に合わなかったけどね」

「あんな量のグッズを持つてくるからだよ」

最終下校から五分ほど過ぎてしまつてから、五人は校門の外にいた。

「それじゃあまた明日」

歩き組、自転車組、電車組。それぞれ下校方法が違ふのでその場で解散をした。ちなみに私は自転車だ。一人で自転車を漕ぎ、風を顔に感じながら思った。そういうえば裕子の推しについて知ることができなかったな。結果的にはその日の夜送られてくるメッセージで知ることになるのだが。そのメッセージは夜七時過ぎ勉強をしていた私の元に個人メッセージで裕子から送られてきた。

Yuko (当然)めん！ 悪いニュースとビックリなニュースが一つずつあるから聞いて。まず、悪いニュースの方。冬馬くん、つまり想愛の推しが週刊誌に

撮られたの！ 冬馬くんは誠実な性格で売れていたからネットは大騒ぎ。もちろん想愛もその誠実さに惚れて推し始めたって言うていたけれど、それはテレビだけの上っ面だけだったのかもしれない。想愛は冬馬くんにベタ惚れで多分今頃すごく落ち込んでいると思う。明日も同好会には来るみたいだけど、あんまり刺激しないであげて。想愛はキレると収集がつかなくなるタイプだから。特に推しのことになると……。とりあえず、想愛のことは下手に慰めてあげるよりもそつとしておく方向で！ 次に、ビックリなニュース。今日、私と芽衣は帰る電車が一緒だったから、私の推しについての話をしていたの。そしたら、何と私の推しのカズ君が芽衣の弟の春樹君と同一人物だったの！カズ君はご当地アイドルで、距離感が近いアイドルとして人気を博していたけど……。まさかこんなに近くにいるとは思わなかった（笑）。それにまさか芽衣よりも頭がいいと噂の春樹君つても驚きだった。芽衣は真っ青な顔をしてたけど。家族にバレたら春樹がどんな目にあうかって。心配症だよ。でも、芽衣の

家族ってそんなに敵しいのかな？ ちよつと私も心配（、ε、）じゃあ、また同好会で会おうね！ おやすみ

三、執筆者 白木虎

嘘でしょ、と思わず声が漏れた。情報量が多くて一度では理解しきれず、二度読み返した。一つ、入本の推しのスキヤンダル。一つ、坂本の弟がご当地アイドル……。どちらにせよ、この部屋の中で悶々としても何か動くわけでもない。とりあえず全ては明日に回そうと、スマホの電源を切った。

翌日。SHRが流れるように終わり、活動場所に着くと、私が一等賞らしかった。グッズは持っていないから、今日も荷物はリュックサクサクだけだ。適当な席に座って、暇つぶしに教科書を流し読みしていると、足音が近づいてきた。こんな、学校内で辺鄙な場所に

来るのは同好会員しかいない。案の定、姿を見せたのは会員、それも入本最愛だった。

昨日のメッセージを改めて思い出す。何と言えはいかかわらなかつたので、「よう」と手を挙げれば、入本も「よう……」と低く挙げた。よく見れば、目の下はうつすら黒いし、瞼は昨日より大きい気がした。そして、あれだけ張り切って持ってきていたグッズは、今日は影も形もない。いたたまれず、「まあ、座りなさいよ」と近くの椅子を引いた。入本はしずしずとそこに行つて、落とすようにカバンを置いた。

同時に、また廊下で足音がした。今度は二人か。入つてきたのは、唐枝きねと大灘裕子だった。「こんにちはー」「こんちくわー」と、普段通りにしているが、やや目が泳いでいる。ほんの十数秒後に坂本芽衣も来た。既に二つの事件については全員知っているらしい。坂本の事も気になるが、今すぐに取り掛からねばならない問題は別である。全員、この場の空気を支配している入本を放っておけない。しかしヘタレモードの四人は互いに肘で小突き合い、「そっちが行けや」と目配

せし合う。そんなことをしているうちに、俯いたままの入本が肩を震わせて、顔を上げた。

「ありがと、みんな。でも、気にしないで。私なら大丈夫だから」

無理くり引き上げたような口角。見ていて痛々しい。そこで動いた人物がいた。

「そんなワケないよ！あれだけ熱いファン心を語ってたんだから！」

迫つた裕子が肩を揺さぶつた。入本も私たちも驚いて裕子を見つめる。

「私は知ってるよ。推しに、恋人がいるってわかつた時の衝撃。今の推しとは違って、ちよつとだけ、いいなって思つてた俳優さんが結婚した時のニュース。当時小学五か六年生だったけど、ほんのちよつと、寂しいって思つたから」

「裕子……」

思わず口からこぼれていた。

「だからさ、辛かつたら吐き出しちゃいなくて。話なら聴けるからさ。ね？」

「あ……」

「ほら、アダーズもそうでしょ？」

裕子が振り向く。妙にキマッていた。青筋が立ちそうになる。

「ぬあーにが、Othersだ裕子お！ テキトーにまとめるな！」

「いいじゃんハマナ！ 一括呼称でコスト減！」

「だーかーらあー、ハマナと呼ぶなー！」

ギヤアギヤアと私たち二人が言い合っている傍で「あのね」と唐枝の声がした。二人、突き合わせていた頭を同時に引く。

「私が好きなのは女性アイドルだから、イマイチ理解はできないんだけど……」

坂本も一歩近づく。

「私も、まだそういう経験をしたことがないし、想像もできないからシンパシーは持てないのですが……」

同時に重なる言葉。

「きつと、ものすごく辛いのだろうことは分かります」

二人とも、とても優しい顔をしていた。入本の目尻に水が溜まっていく。坂本が隣に座って、背中をさすってやった。残った私たち三人も近くの席に座る。そのうち、入本は落ち着いたようだった。

裕子が無音で息を吐き出す。みんな、ほっとしていた。これで解決かな？ と書かれた空気が浮かんできた。気が緩んで、私は先から気になっていたことを口にした。

「なあなあ、裕子」

「ん？」

「さつきさ、俳優とかアイドルとかが恋人持ちだったらショックって言ってたろ？」

「あー。言ったね、うん」

「なんで？」

「はい？」

「なんでそう思うのさ」

「なんでって……」

ちら、と周りに視線が行く。周りも首をひねっていた。

「そりゃあ、ファンになるんだから、多かれ少なかれ自分を認識してほしいって願望があるからじゃない？」

「無理だろ。ご当地アイドルとかならいいざ知らず、ファンの母数が大きければ無理だろ」

「それ言っちゃうかー」

唐枝が天井を仰ぐ。失言だったらしい。坂本は苦笑いしている。バンと机を叩いて裕子が迫ってきた。つくづくパーソナルスペースが狭い奴である。

「わかっても！ 夢見たいの！」

「だからって、アイドルが実生活で恋愛禁止にされる謂れは無いだろ」

「アイドル業してる人が恋愛するのって、そんなにダメなのか？」

誰ともなしに尋ねると、裕子が答えた。「善いか悪いかは別にして、嫌がるファンは多いと思われる」

唐枝も、うんうんと頷いた。そういうものか。ちらっと坂本を見ると、彼女もまた「世間一般ではあまり喜ばれない類のことだと思います」と宣った。私は

黙りこみ、みんなも沈黙した。すると、静寂に亀裂が入った。

「わかるはずないよ、ファンやってないアンタになんか」

入本だった。私の目をギラギラ睨みつけている。

「わかんないでしょ。推しへの思いなんて、推しを見つけた人じゃなきゃ理解しようがないもの。ねえ、どれほどのモンか、教えてあげよつか」

あ、マズイ。これ完全にスイッチ入ったね。アア、もー、いわんこつちゃやない。サワサワと後ろで声がある。が、言われなくなつて今の状況くらい分かる。だつて入本の目、もうすっかり据わつてますから。

入本はユラツと立ち上がり、座つていた椅子に手をかけた。そして、「うがああああああああ！」と椅子を振り上げた。私は「ぎやああああああああ！」と飛び上がり、教室の反対側へ逃げた。弧の軌跡を描く四本の脚がなかなか怖い。

見れば、「ちよ、ま、ちよ待てよ！」とTサインを作る三人も襲われている。しかしすまない、友人たちよ、

助けには行けない。今だけは我が身可愛さを許しておくれ……。

それからたつぷり十分間、私たちは小さなゴジラに教室の中追い回された。

「アンタ、ほんつとに見境無しね。何でまた私たちまでターゲットなのよ」

入本が正気を取り戻し、配置がガタガタになった教室を復旧させながらの裕子の言葉だった。入本は気まぐすうに椅子と机を並べている。

「裕子、キレると收拾つかなくなるって、真逆ああいうことだったわけか？」

昨晚のメッセージの送り主にずっと詰め寄った。

「そーそー、ああいうこと」

「てつきり、ヒステリーのアレやソレだと思っただわ！」

ちゃんとタイプを言えエエエ！ と軽くアイアンクロー（相手の顔を片手で鷲掴みにして持ち上げる技）をキメる。ヒステリックに喚かれるならまだ宥めようがある。しかし暴れを、暴力を伴う「收拾のつかなさ」

はどうしようもない。身の安全のためにも、そこは重要だよね、ウン。

「まあ、怪我人なしの器物損壊なしで済んだから良かったじゃないですか」

唐枝が整頓された列の机一つに腰掛けて朗らかに笑った。毒気を抜かれ、裕子を解放する。

「とりあえず、想愛さんは解決でいい？」

坂本が訊くと、入本はスッキリした表情で頷いた。さてそれじゃ、と唐枝が手を打つ。

「後は坂本家の事情ですが。どうします？」

四、執筆者 準清奏弥

「ッ……！」

教室の角で、最後の机を持ち上げた坂本が息を呑んだ。

あ、といった風に、教室の空気が凍りついた。それを感じ取ったようで、坂本はすぐに笑みを浮かべる。

「あ、いえ、大丈夫です。ただ、やはり自分の家のことを変える、となると……」

「いやいや、こちらこそ悪かった。何も今急に、というわけじゃないんだ。坂本さんの家族なんだから、坂本さん達のペースに合わせていけば」

「ヒュー、ハマナおっとこまえー♪」

「裕子オ！」

「とはいえ、」

裕子のペースに巻き込まれそうになった私を、唐枝の声が正気に返す。頼りになる奴だ。

そんな彼女は、腕組みをして静かに考え込んでいた。「最近週刊誌よりも衆人環視が怖い時代です。SN Sだとか、ご当地アイドルでも世間様は喜んで食い物にしますから。“成績トップのアイツがアイドルやってた！”なんて……」

「近場で噂になっちゃったらヤバいかもね」

入本が肩をすくめた。

確かに。偏見として言わせてもらうが、学業最重視という教育方針の裏には、外聞を気にしていたりとか、そういう事情があったりもしそうだ。

「確かに、そうですね……春樹とも話をした方が良さそうです。予定、聞いておきます」

近づいていた坂本がこくりと頷いた。

「うん。私達の方も、行ける日合わせとこっか」

裕子も言った。

カバンから手帳を取り出してめくり始める坂本と、スマホのスケジュールアプリを開く私達四人。

取りあえず、スマホ組はしばらく予定が入っていないことが確認できた。

「……あ」

坂本が声を上げる。

一斉に顔を向けた私達に、彼女はそろりと顔を上げた。

「……土曜日の振替休日、空いてますか？」

土曜日、午後。

同好会の活動と称し、私達は駅近の大型ショッピングモールに足を運んでいた。

「推しと行程を共にする!? 死ねって言うわけ!？」と主張する裕子により、坂本弟||春樹とは現地で待ち合わせである。むしろ嬉しいのではないのか、と私は思ったが、他の面々の反応を見る限りそうではないらしい。難しいものだ。

「……あ、いました!」

キョロキョロと辺りを見回していた坂本が、階段脇のベンチを指さした。

裕子のいる方角から短い悲鳴が聞こえた気もするが、それは気にしない。そこには、目を閉じて体を揺らす、眼鏡の青年——あれ?

「坂本さん、あれが春樹くんか?」

「はい。春樹です」

「何というか、その……アイドルらしくは、ないというか……」

意外にも裕子の反論が飛んでこなかったの——後に意識が飛んでいたのだと本人から聞いた——、好き勝手に考える。

ストレートの黒髪、デニムっぽい付き帽、黒縁の眼鏡、ぴったりのシャツと、対照的にサイズオーバーな上着。

ただ、服装の色彩は非常に地味だ。鈍い灰色で纏められた上下は、アイドルというきらきらしい言葉とはまるで合わない。

「私は、アイドルじゃない春樹しか知らないんで、アイドルらしい春樹を知らないんですが……。いつもの春樹は、あんな感じですね」

「もうちよっと色味があれば栄えると思うんですけどねえ」

「活動中はずっと彩度高め、だよな?」

「カズくんダア……」

唐枝や入本も会話に参加してきた。裕子については……無視して良いだろう。推しのことを考えているファンは取り扱い危険物だと、入本の件で学んでいる。

「今日は、母の誕生日プレゼントを買いに来たことになつているので、そこだけ少し覚えておいてください」
振り返つて言つた坂本が、ベンチにすたすたと歩み寄つていく。

少し緊張して突つ立つたままの私達を置いて、坂本は弟に声をかけた。

「春樹」

体の揺れを止めた彼が、目を開いて顔を上げる。

「あ、姉さん」

涼しい声は、引き絞られた矢のように、こちらの耳を突いた。

「えつと……」

坂本が視線を彷徨わせて、数秒後、私達を指し示す。

「友達がね、あなたに聞きたいことがあるつて」

首をコテリと傾げた春樹が、坂本から視線を外して

こちらに向けた。

刹那の間目を瞬かせて、彼はゆっくりと口を開けた。

「……良いよ」

「じゃあ、先にカフェ行こうか」

「うん」

遠目に見てみると結構背の高い坂本姉弟を先頭に、軽食が取れるカフェへ向かう。

他の四人と坂本姉弟の間に絶妙な間隔があるような気もするが、それは仕方ないと思つてもらおう。

「……テーブルで。はい、六人です」

良いですよ、と振り返る坂本に、唐枝が頷き返す。遅れて私も頷いた。

エプロンを着けた店員さんに、テーブル席に案内される。

「こちらのお席どうぞ」

示された席に、キョロキョロと辺りを見回してから坂本が座つた。

続いて春樹、向かいの席に裕子、私、唐枝……最後に、春樹の隣に入本が腰を下ろした。

つまり、奥の方から坂本、春樹、入本、その向かい側の席に奥から裕子、私、唐枝、という席順だ。

「で、話つて何？」

ドリンクメニューを開いて、春樹が片手間に聞く。
「あ……えっと」

私の方をうかがう裕子。私もどうするか迷っていたところに、唐枝が口を開いた。

「春樹くん、アイドル、やってる？」

弾かれるように顔が左に。

死ぬほどド直球じゃないか、唐枝!?! 一体どうした!?!

「あ、その話。気づいたんだ」

これまた弾かれるように顔が正面に。

随分、ドライで……無表情? というか。

距離感が近いというからには、いわゆる陽キャの類だと思っていたのだが、意外とそうでもないのか。それとも、それはただ単にキャラクターということなのか。

一応裕子に尋ねてみる。

(活動中は、キラキラ幼馴染みっていうか……少女漫画のヒーロー、みたいな。凄く格好いいんだよ)

小さく裕子が答える。推しについて話す時の照れくさそうな雰囲気は、本人がそこにも固定らしい。

つくづく、推しがいる者の気持ちは分からない。

店員さんが来たので、各々の注文を告げる。

程なくして、全員分の飲み物が運ばれてきた。

私がコーヒー、坂本が紅茶、その他はソフトドリンクだ。春樹がソフトドリンクなのはちよつと意外だった。

口をつけた春樹が、ぽろりと言った。

「んー、分かった。やめるよ、すぐ」

……、ん?

「は……?」

「え?」

間抜けな声を上げた私達に、怪訝そうな目を向ける春樹。

「え、何で……?」

唐枝が呆然として落とした。

「何でもなにも」

春樹が肩を竦める。

「だって、姉さんの周りでも分かっちゃったなら、もう家でも時間の問題だろ。アイドルなんて消費物だから、消えたらみんな忘れるさ。後腐れなくて良い、だろ？」

「そんな！」

唐枝が目を見開く。

彼女の声が震え出した。

「頭だって良いんでしよう、やめる必要なんてないんじゃないの!?!」
「ご両親だつてきつと、」

「違う違う」

春樹の口がへの字に曲がる。

分かかってない、とでも言いたげな表情に、唐枝の声が途切れる。

「成績が良いっていうのと、頭が良いっていうのは、全然違うんだよ」

ぐっと眉間にしわを寄せて、春樹が吐き出した。

「頭が本当に良かったら、俺は今頃アイドルなんてやってない。それも、たかがご当地アイドルなんて。リスクばかりで……全然、将来性がない」

彼が口の中で、小さく裏唇を噛んだのが見えた。すぐに、引き結ばれた口が隠した。

(……どうするんだ、大丈夫か)

隣で固まったままの裕子に小さく囁く。

照明が当たりにくい席で分かりづらいが、微妙に顔色が悪い。

小さく入本の方に視線を移す。こちらに気がついた彼女が、悲しげに首を横に振る。

彼が推しでない入本でもこうなのだから、これはかなり悪い状況だ。

「ツでも、好きなんですしょう？ アイドルしてるの。だって、続けてるんだから」

唐枝が言い募る。

「そりゃあ、家族関係を後回しにしてもやってるんだから。嫌いなわけないよ、当然だろ。……それに、」

かすかに、春樹は呟いた。

ずっと夢だったんだ、と。

小さい頃から、ああんりたいって思ってたんだ、と。

「うん、まあね、反対されるのも妨害されるのも分かってたはずだから。諦めはつく」

ぼやりとどこか遠くを見る、彼の黒い瞳が、手元のグラスに落とされた。

ぢゅっ、春樹の口が長いストローにつけられる。氷だった水が吸い上げられて、大きく音を立てた。

……すまないが、全く不可解だ。

「純粹に疑問なんだが」

私が口を開いて、俯いた春樹が視線を持ち上げた。

それに、私は首を傾げてみせる。

「将来性のない夢を諦めるのが、頭が良い行いなのか？」

「は？」

春樹がぼかんと口を開けて、他の数人も私に目を向ける。

はあ、と溜め息が漏れる。ガシガシと頭を掻いた私は、右手のコーヒークップを受け皿にカチリと置いて、再度言った。

「だから、頭が良いっていうのは、楽しさや嬉しさ、夢を押し込めて、敷かれたレールを進んでいくっていうことなのか、って聞いてるんだ」

隣で小さく、ハマナ、と聞こえた。

訂正したいところだが、その泣き細った声音を否定するのも気が引ける。今回だけだ。

「そ、それは」

「君がこれにイエスで答えるならそれでも良いとは思いますが、どうもそうではないんだろう、その様子だと」

一応性善論者の私だ。

こんなに不安そうに瞳を揺らす青年が、応援してくれる人達を愚かだと侮蔑するためにアイドルを続けていたのだとは思わない。

それに、裕子の目だって信じている。

友達と呼べるような存在がいなかった私を留めてにっこりと笑ったその瞳が、曇っていなかったことを願っている。

「ヒーロー気取るつもりじゃないが」

春樹とじっと目を合わせ、一言私は言った。

「信念を貫き通してこそ、賢者は賢者たりえるんじゃないか？」

ブルーライト遮断性レンズの向こうで、大きな目がまん丸に見開かれた、気がした。

「……そうだよ！」

唐突に裕子が立ち上がって叫んだ。

元気が出て良かった……と思うと同時に、少し怒りが湧く。

他のお客さんに迷惑だろうが。私も、右耳どころか両耳がきいーんとしたぞ。

でも、と私は軽く肩の力を抜く。

若干目尻を光らせた裕子。これは、好きな人や友達のために全力になれる、その踏ん切りをつけて飛び出した時の裕子だ。

なら、もう心配はない。

「私、カズくんのこと受験期から大好きだもん！ テレビの中じゃなくて、すぐそのステージの上で、通りすがりの私に手を振ってくれた、世界一かつこいいカズくんが大好きなんだよ！」

「え……」

「リスクばかりなんて言わないで！ 私、他のみんなも、カズくん……ううん、春樹くんに元気を貰って、毎日楽しいなって思えるんだよ。それだけじゃ、あそこは春樹くんの居場所にならない？」

「え、つと、待つて待つて待つて」

両腕を挙げて遮った春樹が、そろりと上目遣いで裕子をうかがう。

「……もしかして、俺のファン？」

裕子は、こくりと頷いた。

春樹の顔が赤く染まり始める。

そしてついに、ぐしやりとテーブルに突っ伏した。彼のグラスに入っていた氷が揺れて、高く鳴る。

「うーわ、メチャクチャ恥ずかしい！ 消えたい！

むしろ消える！」

「……春樹、裕子さんの顔がまた青くなってるから……」

……

「あつ、ごめんね裕子さん」

坂本にたしなめられた春樹が、弱々しく顔を上げてへらりと笑う。

こうしてみると、なかなか整った顔立ちをした青年だ。ちょうど見やすいところにいる入本をとつてみても、彼のことをガン見しているくらいには顔が良い。

「あつ……ハイ……」

これはまた、見なくても分かるくらいに息も絶え絶えな裕子だ。おおかた、推しの「消える」発言と、自分の名前が呼ばれたことよって、喜べば良いのか悲しめば良いのか分からなくなっているのだろう。

「えーと、マジで消える……つてか、まだやめたい？」
頬を搔いて、入本が尋ねた。

姿勢を起こした春樹が、緩く首を傾げる。

「んー、いや、今は良いよ。バレてもそれは説得すれば良いって気がついたし、やっぱり俺はアイドルが好きだし」

俺、弁は立つし？

そう笑う春樹は、心なしか楽に息をしているように見えた。

「それにね」

不意に彼が立ち上がり、裕子の肩に手を置いた。

「俺に、こんなに素敵なファンのみんながいるって知ったから。ありがとう、裕子さん」

「ひよえ」

……あ、裕子が心肺停止した。

「ここで『距離感近い系』の本領が発揮されるとは思わなかった……」

入本が早口でぼやくが、それには完全同意だ。やはりアイドルという人種はおかしい。

私としては過激派ファンも同じ括りに入るのだが、それは言わないでおく。

「じゃあ、ここは俺が出すから。姉さん達は先に出といて」

言われて見てみれば、既に全員分のコップは空っぽだった。

春樹と別れ、坂本の本来の目的だった、母親のプレゼント選びに向かう。

女性向けフロアの煌びやかな店舗達を通り過ぎながら、コーヒーの苦味は、私の口の中で唾液に混ざって溶けていく。

「皆さん、ありがとうございます」

坂本がおずおずと言った。

「私だけでは、絶対に春樹の夢を諦めさせてしまっていたと思います。あの通り、特に仲も良くない姉弟なので……」

一瞬、全員の目が丸くなって、そして次にみんな噴き出す。

慌てる坂本の背を、笑い涙を拭った唐枝が優しく叩く。

「あ、んな姉弟が不仲なわけないじゃないですか！誰が聞いても笑いますってそれは、ははは、く、ふふ……」

「そうだな、私もそう思う」

うんうんと首肯した私は、前方の裕子の頭を鷲掴みにして顔を寄せた。そして、にやりと笑う。

「なあ、アダーズもそうだろう？」

「いっただあぁ！ 何か意地悪じゃない、ハマナ!!」

「私はハマナじゃないっ！」

裕子の推しがいなくならなくて、ちょっと安心した、なんて言ってやらない。

騒ぎ出した私達をよそに、入本が坂本に笑いかける。「仲の悪い姉弟はね、息をするように隣の席に座ったりしないんだよ？」

そう、彼も思春期であることを考慮すれば、あれはかなり仲の良い姉弟像だった。

「そう、ですか……」

「そうそう！」

入本が大きく頷く。

俯いた坂本の頭を優しく撫でて、唐枝がぽつりと呟いた。

「……私からも、お礼を」

頭の上に疑問符が浮かび上がる。

坂本、裕子ならまだしも、唐枝がこの件に関して感謝することが思いつかない。

そんな唐枝は、どこか寂しそうに笑った。

「さつきちゃんは、あと二年で卒業が決まってる、んだ」

彼女は語った。

唐枝の推し——山本さつきは、人気アイドルグループの中で、『愛されキャラ』であることに限界を感じていた。

愛されキャラというのは、同時に嫌われ者でもある。固定化されたイメージと、世間やSNSから向けられる悪感情の板挟み。それは、徐々に彼女の精神をすり減らしていったのだ。

彼女はどうしても、アイドルとしての活動を好きになれなかったらしい。仲の良い人、一生の思い出が出来ても、アイドルとして歌ったり踊ったりすることは愛せなかった。

二年というのは、彼女自身が設けた観察期間なのだそう。自分がまだ芸能界に残りたいのか、それができないのか、知るための。

これだって、SNS上では賛否両論。さつきを応援していたはずのファンでさえ、理想と現実との差異に彼女を攻撃し始めることもあったとか。

「……だから、ね。もちろん、春樹くんの気持ちも尊重したかったけど、それ以上に、好きなのにアイドル、やめてほしくなかったの」

エゴだけど、と唐枝はすすり上げた。

「うんうん、推しは大事だもんね」

「本当に分かってるのか？」

もともとらしく肯定する裕子を、私は冷たい目で見つめる。

「失礼な！ つまりこういうことなんでしょ——」

口を尖らせた裕子が、一歩先へ踏み出す。

「推しはみんな違って、推してる気持ちはみんな同じ！ 我ら、アイドル同好会！」

にひひ、と格好つけた裕子を、私達は呆れ笑いで見守った。

「……いえ、さつきちゃんへの愛を想愛のカゲキな感情と一緒にしてほしくはないですね」

「誰が過激派だって!？」

(了)

お題小説

ある決まったお題をもとに作る、「お題小説」。

今回のお題は、「ボタンがひとつ」です。どうぞお楽しみください。

ホワイト・ホワイト

遠野燈

一

初めてそれを見つけたのなんて、いつだったんだらう。あまりに自然にあったものだから、忘れてしまった。

だからちよつと魔がさして——あるいはほんの少しの好奇心から——裕美がそのボタンを押してしまつたとしても、仕方のないことだった……と思いたい。ガチャン。

ただ一つのボタンからしたとはとても思えない、重い音が響き渡って、裕美は思わず身構えた。と、明らかに人工的な声が聞こえる。

「ようこそ、ホワイト・スペースへ」

ピー。カチカチ。プシュー。

「心の準備は整いましたか？」

ガツシャン。ガンガン。

「それでは、良い旅を！」

口を挟む間もなかった。裕美は呆気に取られて壁を見つめていた。ぱつくりと口を開いた壁の向こうには、なにやらもやもやしたものが見える。

「どうぞ、お入り下さい！」

音もなく、裕美は壁に引つ張り、いや……引きずり込まれた。

*

「イテっ」

高性能に見えた割に着地は雑だった。ちょうど投げ出された格好で横たわった裕美は、どうしようもない後悔の念に駆られていた。白い空——もしくは空ではないのかもしれない——につるつるした床。めんどいやつだこれは。押さなきやよかつた……。いつそ夢であつて欲しくて、目を閉じた。

あれ？ 案外気持ちがいい。

「ようこそ」

何か聞こえる。

「起きてください」

嫌だ。

「早く」

うるさいな、黙ってよ。

「起きてくださいっ！」

「ひえっ」

耳がガンガンする。じとりと声の主を睨んだ。「主」と言っているのかは分からないが。ただのもやもやを、生き物とみるのならそうだ。

「失礼な。私はちゃんとした生き物ですよ」

「げ」

心を読まれた。今度は恐る恐る、彼女、もしくは彼？を眺める。変わらない。ただのもやもやだ。

「混乱していらつしやるようですが。私たちに『性別』という概念は存在しませんよ。ちなみに私は、『ただのもやもや』なんかではありません。れっきとした生き物です」

「はあ」

さつきからなんだろう。私の返事の間抜けさは。

裕美は呆れた。しかしどうしようもない。なんとか頭をフル回転させてこの状況を整理しようとするものの、ついていけない。

「ここ、どこ？」

とりあえず一番の疑問を口に出す。するとその人、名前はあるのか分からないが取り敢えず「もやもやさん」は盛大にため息——勿論「顔」なんてものはないのだが——をこぼしてから言った。

「分かりました。では一から説明致します……」

ちょうどその時、裕美はじつくりもやもやさんを観察している最中だった。なるほどこのもやもやさん、下から見てみただけのもやもやだ。すると二度目のため息が、頭の上から降ってきた。

「あなたは『凶太い』方ですね……」

「そう？」

「普通私を見た目なんかより、自分の今後を気にしません？」

「あ……」

「そうだ。帰れるのかということをつかり忘れていた。気付いてしまうと、急に心配になってきた。」

「もしかしてここで死ぬのか？ 私。」

「気付きましたか？」

「それでは説明しましょう。まずここはホワイト・スペース。あなたがいらつしやつた世界とも、ましては天国やら地獄やらとも違う場所です。原則として一年に三人ずつ、そちらからこちらに来ていただきます。」

——なぜ三人なのか、ですか？ さあ、私にも分かりません。で、問題の『帰れるのか』ということについてですが……」

それは私のほうからは申し上げられません。

世にも不吉な解答。裕美が絶望しきつていると、もやもやさんは慌てて弁解を始めた。

「帰れないと言っている訳ではありませんよ？ ただ確実に帰れる、とは言い切れないだけです」

それだけで充分大問題だが？

「気にしないでください！ 大体の方は帰つてらっしゃるので！」

どうも不安だ。

一通りの説明を終えたらしく、もやもやさんはふうと息をついた。何度繰り返してもらっても、詳しく説明してもらってもよく分からない。かろうじて理解できたのは、もやもやさんと一緒に、暫くここにいることになるだろうってことだけ。

「そういえば。思い出して尋ねてみた。」

「あのお」

「どうしました？」

「名前とか、ある？　これから一緒にいるなら、あつたほうが便利だと思うんだ」

「そうですか……」

うーん、ともやもやさんは考え込んだ。確かに、私に名前はありませんねえと呟いている。

「ないなら、もやもやさんでいいかな？」

「別に構いませんよ。あ、でも、私は別にこの姿でいなくてもいいんです。あなたが望む通り、例えば犬にでも猫にでもなれますよ」

「本当？」

「はい、私は生き物ではありますが、この姿はいわばあなたの概念に過ぎません。きつとあなたの中で、未確認生物はこんな形だという概念があつたのでしよう」

「へえ……。じゃあこのままで。それかもやもやさんが一番好きなもので」

きよとん。そういう形容がびたりと当てはまるような顔、ではなく気配でもやもやさんはこちらを向いた。

まあどちらから見ても同じだから、こちらを向いているのかは分からないが。

「やっぱりあなたは珍しいですね」

「え？」

「大概の方は、自分の好きな動物とかキャラクターを指定なさるんですが……」

「はあ」

物好きな人もいたもんだ。たとえ見た目がそうだったとして、喋ればもやもやさんに過ぎないのに。

さらにもやもやさんは続けた。

「すみません。私はあなたから指示して頂かないと、姿を変えられないんです。それと、他の三人の方との混乱を防ぐために、この姿のままではいけないことになっていきます」

「じゃあ……。犬かな」

このよく分かんない中で、知ってる生き物がいると心強い気がする。

「分かりました」

もやもやさんはそう言つてぐつと力を込めた、ように見えた。見る間にもやもやは離散し、再び寄り集まつて犬の形になった。そうして首をぐるりと回し、自分の尻尾を眺めると——こちらを振り向き可愛く小首を傾げて言つた。

「案外普通なんですね。犬はやつぱり人気ですよ」

「……そうですね」

余計なお世話だ。

*

裕美はてくてく歩いてきた。どこまでも白い、果てしなく白い。ついでに言えばもやもやさんも白い。

「せめて白くない犬にしてくれたら良かったのに」

ため息混じりにこぼすと、耳ざとく反応したもやもやさんが、片耳をピクンと立てて言つた。

「なんでですか？」

「頭おかしくなりそう」

視界がチカチカしてきた。

「頑張ってください。もう少しでもう一人の方と合流できるはずですから」

「分かるの？」

やつぱり高性能。

「私の勘です。外れたことはないですが」

「じゃあ勘じゃないじゃん」

どうやらもやもやは、本当に裕美たちとは違う次元、もしくは世界から来たようだ。言葉は流暢に聞こえても、なんだか変な感じ——必死で勉強して英語を喋ってるみたいなの、違和感が付き纏う。

「待ってください」

突然、もやもやさんが歩みを止めた。

「気をつけて！」

ヒュン。

首筋の毛がふわりと揺れた。

迷わず体が動いていた。足が地を蹴る。自分じゃ考えられないほど軽やかな身のこなしで、裕美は宙を舞つた。

パシッ。

手の中には、白い羽のついた矢が一つ。
ヒュッ。

続けざまに飛んできたもう一本を受け止めると、裕美はそちらを振り仰いだ。

「あの人ですね」

果てしない白の向こうに、人影が伸びていた。

「攻撃されるなんて聞いてないよ？ ついでに言う
と、私がこんなこと出来るようになってるってのも聞いてない」

「そうですねすみません……。先に言うべきでした。
ですがこれはイレギュラーな事態です。あなたが他の
方に攻撃されるなんて」

「待つてこつち来てる」

裕美は必死で先程の動きを思い出しながら、近づいてくる人影を睨んだ。よく見ると他にも何かいる。背の高い人影の肩に乗っている小さな影……。鳥？

「おい、人じゃないか」

「本当ですね」

足を止めた人影——なんか怖そうな男の人——は困惑した顔で肩の上の小鳥を見やった。これまた白一色で眩しい小鳥は、おそらくもやもやさんの仲間だ。と言うことは……。この人がこの姿を指定したのだろうか。

人を見た目で判断してはいけないと言うけれど、意外だった。彼は裕美たちの方に向き直ると、ペコリと頭を下げた。

「悪かった。他にも人がいるとは思わなかったから」

「申し訳ないです」

「はあ」

よく見ると、というか見なくても彼はおかしな格好をしていた。明らかに現代人ではない。猪や、人の頭の上のリングを射抜いてる人の格好だ。

「俺は岩下淳一。十五歳。つまりあつちの世界で言う
と……。中三だ」

あれ、現代人らしい。しかも同い年だ。もつと年上なのかと思った。

「私は小野田裕美。中三」

「へえ、同い年なのか」

気まぜい沈黙。まさかこんな正体不明の場所で、同学年の人に会うとは思っていなかった。

隣のもやもやさんが足をつついて急かすから、とりあえず聞いてみた。

「ところで、なんでそんな変な格好してるの？」

「ああ、これか……。急に変わったんだ。それに小野田だって、変な格好だぞ」

「え？」

確かに変な服を着ている。例えて言うなら……スーパーマンの戦闘服みたいだ。

「あれ？ さつきまで普通だったんだけど」

「そのことなんですが……」「それはですね……」

もやもやさんと小鳥、二匹が同時に口を開いた。お互いに目配せを交わし、結局もやもやさんが続ける。

「そちらの世界からいらつしやる方は、ある程度の時間が経つもしくは危険に直面すると、お二人のように能力が使えるようになります。得意分野が人ごとに決

まっています。最初に発動した時に服装が変わることになっています。

ご安心ください。お二人が元々着ていらつしやった衣服は消えたわけではありませんので。お帰りになるときには服装が戻っているはずですよ」

裕美はさほど驚かなかった。ここに来て以来景色はおかしいし、変なもやもやはいるしでもう慣れてしまったようだ。

「あ、裕美さん。今私のこと、変なもやもやって思いました？」

「やつぱりバレた？」

「当然です」

もやもやさんは得意げに尻尾を振った。

裕美はてくてく歩いていった。

旅の道連れは一人と一匹増えた。だからといって特別賑やかになったわけではない。人間二人をチラチラ見ながら、もやもやさんたちはなにやら仲良く喋っている。怪しい。

……やつぱりもともと知り合いだったのだろうか。
同じ人間だからといって、裕美は初対面の人とすぐに仲良くなれるような強者じゃない。だから特に何も話すことなく、一心に歩みを進めていた。

だからといって、なにかを指しているわけでもないのだけれど。

「……なあ」

歩みの早い裕美には置いていかれ、だからといって小鳥たちの会話に入ることもできず、一人離れたところを歩いていった岩下が駆け寄って、話しかけてきた。

「なに？」

「あ……と」

特に言いたいことがあったわけではないのだ。ただ居心地が悪かっただけで。

裕美もその思いを察した。同じ立場だったから。

気まぐず視線を彷徨わせると、いつのまにか裕美たちを追い抜いているもやもやさんが目に入った。

「え……あ……」

とりあえずなにか、話しかけねば。

「……あの、犬ね。もやもやさんって呼んでるんだけど」

「ああやつぱり、あいつのことだったんだな」

「そう、それで……」

とりあえず会話が続いたことに、二人ともほっとする。それからもやもやさんを初めて見たときのこと、ボタンを押したこと、岩下の小鳥はもともとは姿もなく声だけだったこと、ピヨと呼んでいること……。そんな、取り止めのないことを話した。

自分一人じゃなかつたんだ。

裕美は心の中で呟いた。

こんな不思議な体験を共有する人物がいる、という事実に、安心はした。でも密かに燻っている思いはある。自分だけが特別じゃなかつたんだ。なあんだ。つまんないの。という。

「なんか、楽しそうだよな」

「……確かに」

まさにゲームに出てくる狩人みたいな格好で、それでも現代の雰囲気を残している岩下は上の方を向いて言った。

こつちこそ「凶太い」じゃないか。そう思ったものの、裕美もちよつとわくわくしていることを否定できなかった。

「ゲームみたいだよな。ピヨやそっちのもやもやさんだって、きつと俺たちの世界にはいないような、すごいやつなんだと思うし」

「ゲームかあ……」

「クリアしたら、いいんだよな」

そう言った岩下の声は、先ほどよりも暗かった。そうか。裕美も気づいた。ゲームクリアがあるということは、

「……ゲームオーバー」

「言うなよ」

やっぱりゲームオーバーも、あるってことだ。

「まあピヨも、ほとんどは帰れるって言ってたしな。あれもあるかもしれないし。ええと、なんだっけ、復活するやつ」

「コンティニュー」

「そう、それだ」

だとしても、不安に変わりはないのだけど。

「今考えても仕方ないよ」

裕美はグツと手首を握って、ネガティブ思考を振り払った。

「そういえば、なんで鳥……ピヨにしたの？」

別に鳥と言っても良かったのだけど、なんとなくピヨと言い換えた。

裕美には分からないけれど、もやもやさんやピヨの今の姿は一応、「仮の姿」なのだから……。例えば裕美が今突然、カミュの「変身」のごとく虫になってしまったとして、他のものに「虫」なんて呼ばれたら嫌かな、と思ったからだ。

「やっぱり変だよな……」

あはは。と岩下は照れたように笑った。

「俺、ずっとオウムが欲しくてさ。でも母親が鳥アレルギーだったから、どうしても飼えなかったんだ。ピヨってというのは、もし飼えたらつけようと思ってた名前」

「へえ……」

気の利いた返事、なんでものを返すのはなかなか難しい。しかし裕美が答えを出す前に、会話は打ち切られてしまった。

「小野田！ 気をつける！」

ヒュンヒュン。

岩下の指がなんともリズムミカルに弦を弾き、鋭く矢を打ち出した。

裕美の腕から全身へ、ぞわわわと鳥肌が立った。

白玉が群れをなして襲ってくる。

いや、違う……。本当にゲームみたいだ。

なんともファンシーな顔をした数匹のモンスターが、こちらに向かってきていた。

二

『私たちは合流しました。そちらはどうするつもりでいますか——』

ミナミ——No.373はその知らせを受け取り、自分の主人に知らせるべきか、一瞬躊躇した。ミナミの予想では彼女は合流を拒むだろう。伝えない方が身のためかもしれない。

しかし——ミナミは考えた。合流する方がこちらとしてはありがたい。大勢でいた方がことも早く進むだろうし——自分も主人と二人きりでいなくてもいいというわけだ。

かくなる上は。

ミナミは自分の今の姿よりも頭一つ分ほど背の高い、彼女のことを思い浮かべた。

なんとかうまく合流できるように、こっちから行ってみるか。彼女には伝えずに。

『そちらに向かいます。今の位置は？』

頭の中で文章を組み立て、架空の指で架空の送信ボタンを押した。

ピーー。

耳鳴りにも似た音が脳内に響く。と同時に、一番聞きたくない声が後ろからした。

「また何か送ったな？」

ピクン、とミナミは体を強張らせた。主人の冷たい目がちちらを見ている。

「残りの二人のことか？」

ああ、当てられてしまった。

「はい。合流されたようです」

ミナミはあつげなく計画を断念した。やはり主人の目からは逃れられないようだ。しかし主人はそうか、と腕を組むと、予想外の返事を返した。

「合流してもいい」

「え？」ミナミは思わず声をあげてしまった。「合流して、いいのですか？」

「そろそろ飽きてきたしな。それでそいつらは今、どこにいるんだ？」

「はい、ええと……南西方面、第三区域だそうです」

やった！ ミナミは拳を突き上げ、ガッツポーズを決めた。もちろん心の中で、の話だが。

*

「ちよつと岩下あ、これキリないんだけど！」

手がモンスターにめり込むいやあな感触にも、どんな服がボロボロになっていることにも気を使う余裕なんてなかった。裕美はあつちこつちを跳ね回り、ボツカボツカと敵を投げ飛ばしていった。

でも減ってる気がしない！

裕美は心の中で叫んだ。

こういう時にはやはり、裕美の方が有利なようだ。必死で弓を引いている岩下も視界の端にちらりと見えるが、敵は矢一本くらいじゃやられない。

「なんとか頑張ってくれ！ 少しは減ってる！」

全く慰めにならない言葉が返ってきて、裕美はため息をついた。半ばやけそ気味に目の前のモンスター

に回し蹴りを食らわす。ああもう嫌だ。帰りたい。テレビ見ながらゴロゴロしたい。帰りたい。

「頑張ってくださいー！」

もやもやさんとピヨが離れたところで声を揃えた。ええい、お気楽な奴らめ。この姿ではお役に立てませんから——と駆け足で遠ざかっていった二匹が恨めしい。

「もう少して、救援が来ますよー」もやもやさんが続けた。

「え？ 救援？」

「もう一人の、方ですー！」

マジか。心なしか体が軽くなった気がする。

「あと一分ほどです！ 頑張ってくださいー！」

もやもやさんが声を張り上げた。考えてみれば、どこからどう見ても子犬にしか見えないもやもやさんが、こうもはつきりと私たちと同じ言葉を話しているなんて、不思議だ。なんとも奇妙な光景だ。

いやそんな場合じゃないんだって。

裕美は自分で自分に突っ込んだ。どうもここに来てから、自分は現実味というものに乏しい。

その時、ふっと気が緩んだ。

「小野田！ 後ろだ！」岩下が叫んだ。「後ろを見ろ！」ぞわつ。嫌な予感がある。

咄嗟に振り向くとそこには、眼前に迫ったモンスタの顔があった。

「げ」

まずい。避けられない。動けない。取り込まれる情報たちは、凄まじい速度で頭の中を素通りしていった。何が、振り下ろされる。

固く固く、目を瞑った。しかし少し経っても、衝撃はなかった。

あれおかしいな、もしかしたらこれが走馬灯なのか……？ そう思っただけ目を閉じたまま、十秒数えてみてもやはり何も起こらない。代わりに降ってきたのはため息混じりの人の声だった。

「いつまで目を閉じているんだ」

「ひよえっ」

ぱつと目を見開いた。目の前には先程のモンスター
の代わりに、同じ年頃の女の子が立っていた。

「全く、こんな奴らに苦戦するなんて……先が思いや
られるな」

むっ……。心底呆れたように言われた。

目だけを動かしてもやもやさんを探すも、子犬は拙
いウインクを返してきた。

——なんとか頑張ってください。

はあ、本当に。頼りになるのかならないのか。

仕方なく視線を彼女に戻すと、裕美はハツとした。サ
ラサラの長い髪は風を受けてふわりと棚引き、ゆで卵
みたいな顔をよく引き立てている。端正すぎて些かき
つい顔立ちには、表情の冷淡さも加わって怖いときえい
える。

「ありがとう、助けてくれて」

その鋭い目と目があつて、裕美は反射的に口に出し
ていた。

「どういたしまして」彼女はフツと笑った。「私はケイ
だ。十六歳」

「えっ……」

年上だったのか。確かにそんな気もするけれども。

「私は小野田裕美、十五歳です。あつちの子犬がもや
もやさんと、小鳥がピヨ。それで……」

あれ？ 岩下がいらない。

「……俺が岩下淳一です。歳は十五歳」

「ひえ、い、いつの間に」

いきなり背後から声がしたものだから、裕美は飛び
上がった。しかし彼は裕美のことなど気にしていない
ようで、ケイをまっすぐ見据えて問うた。

「さつき。あなたの攻撃で奴らは全滅しました。あれ
だけの数が、一発で、です。あなたは何者で、いつか
らここにいらっしゃるんですか——？ それと、あなたの相棒
はどこにいるんですか？」

「相棒……か」

ケイはまた、フツと笑った。その微笑みにはどこか
棘があつた。

「ミナミは仕事上のパートナーだ。ここでは彼女のサポートが必要不可欠だからな。私はただの人間だよ——。ついでに言うならばただの女子高生だ。ここにはどれくらいいるんだろうな。時間の感覚がなくなっってしまった」

お前たちも分からないんじゃないか？ 今何日経ったのか。

あまりに冷たい調子でケイが言った。

「そんなはずない。俺がここに来たのは……え」

岩下は言葉を詰まらせた。明らかに動揺している。

裕美も考えてみた。ここに来てから何日が経ったのか——。

分からなかった。何日どころか、今が昼なのか、夜なのか……それさえ分からなかった。

目に見えてあたふたする私たちを見かねてか、ケイは再びため息をついて宙に呼びかけた。

「ミナミ、来て説明してやってくれ」

「はい」

もやもやさんやピヨよりも高く、まだ緊張の伺える声が答えた。その瞬間、ケイの隣にもう一人、少女が現れた。ケイと同じく端正な顔立ち。しかし彼女の方が幼く、表情が強張っているためかケイのような冷ややかさはない。

よくよく見ると、彼女は人間の姿をしているわけではないようだった。

おそらくロボットだ。肘や首筋に見える薄い継ぎ目と、首にぐるりと巻きついた通信機のようなものが、それを物語っていた。

ロボットにしては表情は完璧で、もといた世界のロボットにあるような不自然さが全くない。代わりのように強調された継ぎ目や通信機が、彼女を無理矢理に機械に仕立て上げているようだった。

むしろケイより、彼女の方が人間らしいような気がした。

彼女は戸惑いを隠せておらず、ケイと私たちとを交互に見比べた。

ケイが無表情のまま頷いてみせて、ミナミは意を決したように口を開いた。

「説明させていただきます。ここ、ホワイト・スペースは、じ……」

「それ以上は言わないでください」

これまで聞いたことのないほど恐ろしい、淡々とした声がミナミの話を遮った。いつの間に来たのか、もやもやさんとピヨがミナミの後ろに立っている。

「いけません。No. 373。それはルール違反ですよ」
ピヨが続けた。

ミナミの顔がいよいよ引き攣った。見えているのは少女型ロボットが、自分の足元から見上げる子犬と小鳥に怯えている図だ。けれども恐ろしかった。裕美も、岩下も、動けなかった。

黙ってそれを眺めていたケイが、腕を組んで言った。
「何か問題でもあるのか？」

より鋭さを増した、声だった。彼女は前から、こうなることを予期していたように見えた。

むしろこれが、彼女の目的だったようにも見えた。

もやもやさんとピヨはケイを見上げた。二匹の目はやはりつづらで、しかし張り詰めていた。微かに迷いが見えた。

そして明らかに、裕美たちから目を逸らしていた。嫌な予感がした。

これまでの、どこかほのぼのとした道のりはもう望めない。そんな気がした。

(続く)

ボタンが一つ

鹿々書々

町中にボタンが一つあった。

若者が押した。何も起こらなかった。

主婦の女性が押した。そのままだった。

高校生が押した。そのままだった。

警察が押した。維持した。

年若い人が押した。維持した。

赤子が押した。維持した。

男が押した。維持。

押す。維。

押。維。

。押。

自由小説



秋雨

赤羽濤

目が覚めた。

天井の蛍光灯が眩しい。光で周りが良く見えない。やっと目が慣れて見えるようになる、男が二人、ベッドを挟んで何か話しているのが見えた。

起き上がろうと思った。でも、体が固まったように動かない。仕方なく指先からゆっくり動かし、凍てついた体が溶けてゆくように、ぎこちないキキイと軋む音を立てて指は動いた。

男が一人、部屋から出て行った。すると、もう一人の男が自分が目を覚まして指を動かしているのを見て驚いたように目を丸くしてこちらを覗き込んだ。その拍子に男の青い帽子がお腹に落ちた。

落ちた帽子を拾うことさえせず、男が大声で「先生先生！目を覚ましました！先生！」と叫びながら走って部屋を出て行った。

誰もいなくなった静かな部屋で、一人息をついて考える。

真っ白。

さつきからずっと、白い紙にまた新しく絵の具で色をのせていつているような気がする。

わたしのなまえは。

嫌な予感が出て、答えられないはずがないことを自分に問うてみる。

答えられない。

その瞬間、全てを理解した。

今の自分の置かれた状況について。

今僕がいるのは多分病院。恐らく、いや、もっと高い確率で自分は記憶を失っている。落とした帽子から見て、さつき走っていった男の方は警察官。記憶を失った自分に関連しているだろう。今までの長い年月の

記憶を全て奪われたというのに、思考回路は嫌に冷静だ。

まもなく白衣を着た小太りの男とさっきの若い警察官が部屋に飛び込んできて、周りが騒がしくなった。警察官の方はたくさん電話をかけ、医師の方は自分を診察する。

全生活史健忘。診断結果はそんなものらしい。どこのつまり記憶喪失。知識系のは覚えていても、自分の事や周りとの人間関係についての記憶はなくなってしまったから、学校に戻ったらちよつと頑張らないとなあ、と医師は苦笑して言った。

僕の名前は雨月 涼と言う、らしい。大学生、十八歳。

そして——僕はかなり特殊なところ。

僕は、かなり厄介なことに巻き込まれたらしい。

警察によると、僕は、シングルマザーの母親と過ごしていたところを犯人に襲われたそう。犯人は、先に僕の母親を鈍器で殺した後、近くにあった洋服で僕

の首を絞めたらしい。犯人は、まだ見つかっていないという。

目の前で肉親を、ねえ。さぞかし悲しかっただろうねえ。いや、すぐに自分も襲われたらしいから、そんなこと感じなかったのかなあ。まあ、覚えてないからそんなのどうでもいいんだけど。

何日かの入院生活は諸々の手続きで忙しくて、すぐに過ぎ去ってしまった。

僕が事件の前に住んでいたアパートを教えられて、う。そこまで遠くはないようだから、散歩がてらに歩いていこう。

大した荷物も持たずにぶらぶらと歩き続けていると、急に甘いものを食べたい欲求に駆られた。コンビニでもあると助かるんだけどなあ、と探していると、一軒のケーキ屋を見つけた。

中に入ると、店員のおばさんが、驚いたように目を丸くした。僕のことを知っている人だろうか。

支払いを済ませる。おばさんは何か言いたげな様子だったが、店を出た。

雨月涼の家に着いて、雨月涼のスマホで雨月涼の友達だと思われる人物にメッセージを送って。

あくまでも僕は僕であって、雨月涼じゃない。いや、雨月涼の身体にあるから、取り敢えず今は雨月涼なんだろうな。

雨月涼の記憶が無くても？

目を閉じて、ため息を吐く。

いつそのこと、あの日の雨の中に全部全部置いて行ってしまうよかったのに。

そうすれば僕は。

何も考えず永い永い眠りに就けたのに。

雨が降っていた。

その日も、何ら変わることなく過ぎ去っていった。はずだった。

学校からの帰り道。傘を忘れた僕は、降りしきる秋雨に体を濡らしながら、歩いていた。

その時。

後ろから、僕の名前を呼ばれた気がした。

涼、と。

何処か懐かしい声で。

僕は驚いて振り返った。

一瞬だけ、一瞬だけだったけれど。

優しそうな女の人が見えた。

泣いていた。僕の名前を呼びながら。

そうだ、僕はこの声をもう一度聞きたかったんだ――

そうだ、僕は。

全て思い出した。

母親の顔、声。交通事故で死んだ父親のこと。そのために母親が、毎日毎日一生懸命働いてくれていたこと。

同時に、思い出さなくなかったあの日のことも、鮮やかに思い出した。

母親を殺したのは、僕だ……。

傘を忘れて、学校から濡れて帰ってきた僕を母親は心配した。それが反抗期を迎えていた僕の頭の中にキリキリと張りつめていた糸をぶつりと切ってしまった。

周りのものを手当たり次第にぶつけた。殴った。蹴った。罵った。おしまいには、近くにあったフライパンで、頭を殴った。

言い訳じゃないけど、ずっと、誰かに止めてほしかった。暴走する僕に歯止めを掛けてほしかった。でも、止めてくれる人はいなかった。

急にぐちゃぐちゃだった頭の中が静まり返り、ハツとした。自分は、自分は、なんてことをしてしまったのだろうと思った。

母さん。母さん。

いくら名前を呼ぼうと、泣き叫ぼうと、母親が起きることは無かった。その永い眠りから、永遠に。

狂った僕は、せめてもの償いとして自分もと、自ら首を絞めた。

僕は許されなかった。あの世で楽になることなんて許されなかった。この辛い辛い世の中で噛われ、罵られ生きていくことでしか、許される道はなかった。

「うわああああああああああああああああ」

声の限り絶叫した僕は、なお降り続ける秋雨の中、駆け出した。

あの日僕が失った、大切な何かを取りに。

(了)

神の誕生

来田千斗

約七万年前、サピエンスは認知能力に革命を起こし、神話と新発明を次々と作り、世界の支配者への道を歩き始めた。

現在地球温暖化は恐ろしい速度で進行し、今後自然災害による被害は増加すると考えられる。現在日本政府は財政を公債に頼っており、いつか財政破綻を起すかもしれない。

七万年前、アフリカ大陸北東部のとある山奥の峡谷。槍を手にした兵士の集団に、二十人ほどの人々が道を歩かされていた。

「水、水をくれ」

一人の男があえいだ。彼は倒れそうになり、兵士にやりで小突かれながら、やっとの思いで立っている。

男はついに倒れた。兵士たちは顔を見合わせた。

「どうする、王の命ではこ奴らを〈大穴〉へ連れてゆけどのことだが……」

「いや、王命はこ奴らを死よりも辛い永遠の苦しみに送れとのことだろう。ここで死んでくれればむしろちよいどいい」

「さあ、お前ら。行くぞ」

しばらく行つたところで、また一人倒れた。ほかの者たちが駆け寄る。

「師匠、立つてください！ あなたは、我々の指導者、神官です。神に、何とんでも我々の苦しみをお伝えしましょう！ 立つてください！ ……」

彼の意識はだんだん遠のいていった。だが、その中で確かに不思議な音が聞こえた。岩が転がり落ちる時のような響く音。そしてライオンの吠える声は何倍にもなったような、震えるような音、更に物と物がぶつかるような音。地面が揺れ始めた。彼は、落ちていくような感覚に襲われ、人の腕のようだがまた違った《何か》に受け止められ、意識を完全になくした。

その頃彼をおいてだいたい進んだほかの者たちは、崖が崩落し、彼——いや、これからはゴウドと呼ぼう——が落下したと、そして数十メートルはあるのかという巨大な生き物が飛び立ち、その後ろから次々と巨大生物が姿を現したのを見て、呆然とした。

「神の使い、あのお方が……。まさか、そんなはずは……」

西暦二三四七年五月、中年の男があまりの暑さに目を覚ました。

（久しぶりに、あの夢を見た……。修二……。あいつは、あいつは……。いや、あのことは思い出したくもない。あの、〈ノア計画〉のことは……）

彼は窓から下を見下ろした。下には水面が見える。水面の下からうつつすと、幾つもの建物が見えた。彼は西に目を向ける。水没を免れた地域では、数多くの建物がひしめき合い、喧騒はこちらまで聞こえている。彼は耳の中から丸めたスマホを取り出すと広げた。

「テロ組織『シヤッカー』、木曾山中のファイガード社研究所を襲撃、新型生物兵器使用か？」

「ファイガード社、新型兵器開発か？ 緑色の人影！」

「火星軌道で奇妙な彗星発見」

彼はため息をついた。

（またいつも通り、フェイクばかりか……。やつぱりなにも信用できない……）

（わが社にこんな場所があったはずがない……）

と、彼に一本の電話がかかってきた。

「ファイガード社社員へ。最寄りのファイガードセンターへ急行せよ。一刻を争う事態だ。急ぐように。」
その時、マンシヨンが揺れた。そしてマンシヨンは粉々になって崩落した。彼は海へ向けてまっすぐ落ちていき、硬くてザラザラした《何か》に受け止められた。

それを見た人々はこう言った。

「まるで、映画の中のことのようにだった」と。

（続く）

花を唄う

白木虎

昼下がりの歩道を歩きながら、斎藤花奈は私に迫った。

「ねえ、嘘ついたでしょ」

質問でなく断定の体で放たれた言葉に瞬いた。

「何のこと？」

「好きな人いないって言ったこと。実はいるんですよ？」

ああ、あのときのか、と思い出す。

「よく覚えてたね、あんな前の話。半年経つたらう」

「別れ際にこんな爆弾投下されて、おかげで半年、ア
ンタの想い人は誰だろうってばかり考えてたわよ」

「なんでバレた？」

「アンタは昔から嘘つくのが下手くそ」

なんてこった。人生で一番上手くつけたと思っ
たのだが。あれでも全力でついた嘘だったのだ。

「言っとくけど、絶対にカミングアウトなんかしないから」

「気になるのにー」

「まずは自分の新婚生活の心配しろよ。他人の恋愛事情より大切じゃないか」

迫ってきた額を指で弾くと、渋々身を引いた。彼女はもうじき斎藤から鈴木になるのだ。

「あたしはかなり前から同居してるんだから、今さら軋轢なんて起きつこないもの。で、どんな人？」

しかし食い下がりがやがった。こいつめ。

「がっかりさせるようですまないけど、もう終わったよ。相手、既に」

左手の小指だけ立てて顔の高さまで上げる。ああ、と彼女も察したようだ。

「ご愁傷様ね」

「いや、いいんだ。多分、私とは無理だったと思うから」

「どうして？」

なんと言ったものか。

「あれさ……友人と恋人と伴侶の違いだよ」

「お友だちだったのね」

「うん」

伴侶、の言い方に突っ込まれなくて、ほっとしたけど少し寂しかった。

幼馴染みの彼女の結婚式が決まってから初めて会った日だった。数年間付き合ってた彼と婚約したことは前回会ったときに聞いていた。今日はとうとう式の日取りまで教えてもらった。二ヶ月後だという。ジュースンブライドだ。ドレスも式場も気に入ったものがあったと笑う姿に自然と口元が綻んだ。

ラーメン屋に入って、ふたりとも同じ担々麺を頼んだ。太らないか？ といじつてやると、一日くらいで大きく変わらないと胸を張った。麺を待っている間、互いの近況を話していたが、やっぱり結婚と失恋の話になった。別にそれは構わなかったが、相手の詳細を迫られるのには弱った。「言わない言わないってば」

と粘ったが猛攻は止みそうになかったので、遂には「分かったよ、じゃあ百万歩譲ってこれだけバラすから」と折れた。

「あなたも知ってる人」

「うっそー」

「もうこれ以上は無しね」

ふたりとも知ってるってそれ中学までじゃん、ええまさかあの九十人のいや違うか男女半々だから四十五人の誰かってこと、ちよつともしかしてまだ初恋引きずってんの、あいつなの浜町なの、と彼女が頭を抱える脇から、タイミング良く店員が担々麺二丁おまちどおさまでーす！ とやってきた。

「何年前の話だよ、それ。ていうか完全にフラれたの知ってんだろ。最終的にただの友達に落ち着いたのも」先に上の野菜を食べてみる。熱い。この分だと麺とスープは灼熱か。

「他にいないじゃん。もー、帰ったらアルバム引っ張り出して探すから」

花奈がレンゲに麺をまとめて食べた。私は絶対しない食べ方だ。思い切りズゾツと啜る。スープがはねるとか気にしない。ナプキンを着けているから心配ない。

「あなたも知ってる人だよ」

笑ってまた麺を啜る。鈍いな、とこぼれた言葉に味が？ と返されて、うんとだけ答えた。

……あなたがさ。

店を出て本屋へ向かう。結婚情報誌を見たいのだから。今さら？ と思つたが、式の日が近づいた上に私に会つた所為でいきなり緊張してきたらしい。それを聞いては何となく申し訳なく感じたので手を引かれるまま着いていった。

女性誌のコナーに入ってから手は解放されるどころかガツチリ腕を組まれた。自然、密着する形になり私もページを覗く。新婚生活の特集ばかり開いているが、それは余計に彼女の緊張を増幅させるだけの気がした。首筋にじつとりと汗が浮かんでいくのが見

えた。何冊目かの手を伸ばそうとしたところでポンポンと肩を叩き、振り向いた彼女に首を振る。花奈は手を引つ込めて出口に向かった。そのまま私も引きずられていく。

「ダメだね。うん。あんなの、こんな状態で読むべきじゃなかった」

本屋から少し歩いたところで花奈は苦笑いしながら言った。がちりホールドしていた腕は解いている。「昔からプレッシャーに弱いんだから、良くない予感はしてたけど。まあ案の定だったな」

「わかってたんなら止めてくれればよかったのに……」

「万が一つてことがあるだろう？ それに、いい歳した大人なんだからそれくらい自分で判断してくれよ」

「歩く正論め」

「おう。正論が服を着て歩いてるからな」

ちつとは労れや！ と鳩尾を殴られた。グーで。私がかひどいと言うが、花奈だって大概だと思う。

「君たちなりのやり方で上手くいけば良いだろ？
あんまり一般論に縛られるなよ」

うん、と首肯が返ってくる。私の言葉だつて陳腐、
月並みだけど、花奈をよく知ってる分、雑誌よりは血
の通った参考になると信じた。だから赤みの戻った彼
女の頬を見て安心した。

駅方面へ向かう。電車は逆方面なので着いたらすぐ
にさよならだ。他愛ない話をしながらゆっくりめに歩
いて行く。きつと次に会うのは斎藤花奈ではなく鈴木
花奈だ。二ヶ月後まで会うことはないだろう。斎藤家
は親戚が多い。花奈の祖父母の兄弟も、両親の兄弟も、
そしていともたくさんいるのだ。婚約者の方も少な
くないと聞く。しばらくは挨拶回りが続きそうだ、多
分、今日のように時間は取れないという話だった。そ
う考えると、今日別れたくなかった。けれど、動かさ
れる脚は私たちを駅に連れてきてしまった。改札に「
カードをかざす手が震えた。ホームまでは一緒だった。
電子音声のアナウンスが花奈が乗る方面の電車の到

着を知らせていた。私は、これが最後だと腹を決めて
声をかけた。

「式には呼んでよ？」

花奈が吹き出す。

「当たり前でしょ？ むしろ特等席にしたげよっ
か？ 野崎美久様ってプレート用意して」

電車のブレーキ音が響く。

「それはいいよ。普通の……他のみんなと同じ席にし
て」

ドアが開く。

「うん。わかった。じゃあそうするね」

彼女が乗り込む。

私は見つめる。

視線がぶつかった。

ドアが閉まる。

二人、ガラス越しに手を振った。

遠ざかっていく。彼女の姿はすぐに見えなくなった
けれど振り続けた。やがて電車の最後尾もホームから
出て行き、私は手を下ろす。

さよなら。斎藤花奈さん。今までありがとう。

こんにちは。鈴木花奈さん。はじめましてはまだ少し先だけど。

泣いて終わるなら泣いてしまいたいと、それでも頭上の空を見上げる。四月の青が広がって、吸い込まれそうだった。桜は散っている。六月の花嫁にはバラを贈ろうと思いついた。

おめでどうの言葉と花を。それが私に出来る、精一杯の餞別だ。

(了)

万緑の中、草がはけた部分がある。樹木を巧みに避け、獣が通るのを阻害しない。二人の人間が縦並びにそこを歩いていった。

前の方の女性は不安定な道を張って歩き、時々後ろを振り返って一言二言声をかける。

後ろの方の少女は縮こまり、顔を下げて小幅に歩いている。前の女性はどうかやらそれに合わせているようだ。

彼女らは大きいカバンを背負っている。女性は曲がり道でもつつがなく進んだが、少女は重みによるけり転んでしまう。

女性は手を差し出す。少女が起き上がると、先ほどまで手に持っていたボールを茂みから拾い上げる。動物の皮でできており、縫い目の隙間まで精緻な紋様が刻まれていた。

少し開けた空間に出た。道が川に沿い始めた。グウという音がどこからか聞こえる。女性は眉をひそめて笑い、少女に何かを言う。

女性は草に分け入り、たき木を集め始めた。少女は背負っていたカバンから網を取り出し、川を覗む。

流れる水が乱反射を起こす。合間には灰色しか映らない。それでも粒と曲面を見分け、次々と通る間に網を滑らせる。

網には魚が一匹入っていた。食いのある大きさだ。それを持って川原の石を踏む。ジョリジョリと音がする。

女性が木を放射状に並べる。少女が魚を女性に渡して球を取り出す。指を添えると紋様が光る。木の中央に球を置くと火がついた。

「魚はこれだけ？」

内臓を抜いて串刺しにした後のようだ。

「うん、食べてください」

台と鍋を置き、芋や菜を入れて煮込む。

「お腹すいたでしょ、食べていいよ」

どちらも譲らなかつたが、鍋が煮えて魚のヒレが焦げたので分けて食べることにした。

「街に着いたらどうなるのですか」
低くボソボソとした声。

「どこかのギルドに登録して依頼を受けながら生活することになるかな？」

上向きに、しかし落ち着いた声。

魚の尾まで身をしごき食うと、少女も釣られてスプをすすりきる。

鍋などを川で洗って片付ける。そしてまた道を進む。その先に大路が見えた。

思うことは違う。しかし、確かに同じ道を歩いている……。

*

草がのけた道は舗装された街道に続いていた。石だたみの先には建物が立ち並んでいた。食べ物を売る店が多いようだ。

街の中心部である広場に近づく様子が変わってくる。ギルドと書かれた看板が無秩序にそこかしこに並ぶ。

広場からは来た道も含め四方向に分かれている。その角に一つずつ、大きな建物があった。そのうちの一つは六角形をしており、高さも一番だった。

女性は建物に入っていく。次に足を向けたのは依頼を受け付けるカウンターだった。

それだけで少女はもう立ち止まる。女性がどこか別のところに連れて行かれたのを見て、そこを立ち去る。代わりに他のカウンターを見ることにした。内部は六角形であり、入り口を除く五つの面には大まかに役割が分かれたカウンターがある。中央には螺旋階段があり、上に続いている。

依頼のところから反対側には人が一番多く、なおかつうるさい。カウンター上の壁一面にギルド幹旋と書かれている。また、他に増して派手だ。

うろろろしていると少しかしまった服装の人が冊子を差し出した。それを受け取り、読んでみる。

そこには様々なギルドの紹介がされていた。文章だけでなく絵も多い。魔法使いらしき人物は杖を握っている。

他の壁も見ると。ギルド運営やギルド調停、もう一つは依頼斡旋。ちなみに依頼のカウンターは総合依頼だった。

ギルドが中心部にあるあたり、ここはギルドのための街で、この建物はギルドを取りまとめるようなところなのだろう。

冊子に目を通してしていると女性がやってきた。

「ちよつと来て、頼みたいことがあるの」

依頼カウンターの下から階段を上り、小さな部屋に入る。椅子に座っている人は眉をしかめている。

女性に机に置いてあった紙を読むように言われた。依頼書のようなが、声が詰まる。その様子を見た椅子の人は口を開く。

「このカウンターはミスが許されない。だから相手のことは徹底的に調べるんだ。あなたは大事なところだ

嘘をついているようだった。だからカマかけたけど、その様子だとあまりツツコまないほうがいいね」

紙を横に滑らせる。

「この依頼は受領させてもらった」

二人で部屋を出た。そして女性はギルド斡旋へと少女を連れて行く。

パンフレットに目を通した後、カウンターの前に並ぶ。しかし遅々として進まない。さらにはカウンターで人が怒鳴り始めた。

*

ギルド斡旋はギルド協会の仕事で5本の指に入る過酷さだ。ギルドのほとんどはある程度技能があるか物分りのいい人材を欲する。

だが斡旋に来るのは大方が浮浪者。まともな人間もいるが、いつも酔っている者、理想のギルドに入れず泣きわめく者、それらの対応で遅れたのを係員のせいにするものが毎日のように訪れる。

女性はそのことについて十分に知らなかった。

ようやく幹旋書をもたらえたとき、誰かが横から近づいてきた。女性がその方を見ると、異様な人間がいた。ふつくらとした赤い髪はおさげにされている。その鮮やかさはまさか人外ではないかと疑うまでだった。しかし目は髪の強烈さと裏腹に優しい茶色だ。

付け足して言うならば、彼女は女性の方に歩いてきていた。少女は女性の影に隠れる。女性を舐め回すように見ると、話しかけてきた。

「こんにちは、私はシュトレン。あなたは？」

「ガトーです」

話しかけられるようなことをしただろうか。考えを巡らせながら応対する。

「その名前の感じ、もしかして騎士さん？」

「そうですけれど、御用はなんですか？」

「その剣はどこで手に入れたの？」

「騎士なら持っていて当然ですよ」

剣はガトーのものだ。質問には答えられるが、わざわざすることではない。

シュトレンは目を少し詰むんでから言った。

「その剣、呪いがかかっているわね」

ガトーは身を引く。足だけ見れば構えの姿勢だった。シュトレンは眉をひそめて笑う。

「警戒しないで。私は呪いにちよつと詳しいんだけど、呪いを溜めたものを放置するのは良くないの」

話だけ聞いて、というふうに口を動かしている。そのうざつたらしい空気が周囲の人に伝わったのか、少し周りが空く。

「なら、黒い化け物を見ていないかしら？その剣でそれを切ったりは？」

「なんでそれを」

シュトレンがようやく興味を引き出せたと満足な顔をする。

「ならそのとき黒いものが出てこなかった？」

「……はい」

「それが呪いよ」

「なんでそんな話をするんですか」

「それをどうにかしたいと思わない？」

ガトーはしばし何か迷った。そして言う。

「そうですね」

「なら、ここに来て」

シユトレンが薄い木の板を手渡す。そこには簡単な地図が書いてあった。

「それと、他に呪いがありそうな物はない？」

「ありません」

シユトレンは首をかしげた後、別れを告げた。

その後、幹旋所で住むところと魔術ギルドの紹介状をもらう番が来た。

「お二人の名前はなんですか？」

「いえ、紹介状を書いてほしいのはこの子だけで、トルテです」

*

北の大通りの魔術ギルドと生物学ギルドの間を通ると、こじんまりとした路に出る。そこで水茶屋と材木店に挟まった道を進む。

陽光が道をすり抜けていく。壺やら鉢植えやらが細い道に遠慮も無く置かれている。

突然変な匂いがする。体が奇妙な熱に包まれる。あ、どうめき声が出た。

掌に柔らかいものが触れる。ガトーがトルテを引き寄せた。心配なようだ。いたたまれなくなつて手を離れた。

戸の横に小屋があつて、そこで人が何かを囲んでいる。誰かが腕を振ると叫び声を上げる。ガトーに視線をそらされた。

しばらく歩いたところで大きな川に着いた。橋の下を覗いてみると、気配がある。探している人なのだろうか。

音のする方に耳を傾ける。硬いものこすれる音。甘つたるい声。二人は身を乗り出す。

女性がだれかに食事をさせている。手で口をあげ、匙を入れる。しかし支えられた頭のほほもあごも微動だにしない。もまるでままごのようだ。

ガトーは真つ先に自分の目を塞いだ。

その人はこちらに気づく。慌てて少し待つように言
って手をかざす。支えを失った頭は下を向き、目が閉
じかけた。

起こそうとして体を揺する。やがて口の中のものが
こぼれ落ちた。

目を完全につむったその人の口と服を素早く拭き、
向き直る。

「して、なんの用？」

ガトーは六角形の建物であったことを話した。女性
は納得した顔でいた。どうやらシュトレンは呪いを追
つていて、目の前の彼女の協力者であるらしい。

箱からモノクルの様な物を取り出し、剣を見る。呪
いの由来を聞くと、こう説明した。刃の部分に呪いが
ある、呪われたものを切ったのが原因で呪いがついた
と。

「まあそれはいいんだ、付いたばかりのようだからす
ぐはがせる。問題は連れだ」

そう言つてトルテを凝視する。刺すような視線にト
ルテは下に目をそらす。

「シュトレンから聞いた謎の呪いは君だったんだな。
身体の中に呪いが溜まっている。偶然ではないだろう。
君たちに何があつたんだ？」

屠所の羊もかくやという様子のトルテの手を握り、
ガトーは仕方なしに語りだす。

*

ガトーとトルテは同郷だ。

ガトーは村の統括である騎士の家の長女で、武道を
よく学び、村のためになろうとしていた。明るくまっ
すぐで、勤厚なので村の皆に信頼されていた。

トルテは村の魔術師の子だった。魔術師と言つても
研究するそれではなく、魔術が使われた日用品が壊れ
た時に修理したり新しい物を作ったりする仕事だ。魔
術使いとした方が適しているだろう。

彼女は幼い頃から魔術に興味を持ち、本を読んだり
自分で魔術を使つて物を作つたりしていた。そしてそ
のために、自室から出る時間が少なかった。

少しの違いでも、それしかなければ目につくのだろう。外に出ても遊ぶ仲間に加えられなくなった。

トルテはそのことを追及した。

無視したのか。してない。

気がつかなかったのか。そんなことない。

気がついていて気づかないふりをするのが無視だ、なら何をしていたのか——。

話をしていた。

何の話を。

嫌味な貴族や穢れた「サワリ」のように引きこもって怪しい研究をしている変なやつ。

トルテが持っていたボールを持ち上げると、光が表面を走り紋様になった。ボールが地面に叩きつけられるとかんしゃく玉のように音が鳴る。

このボールはトルテが作った魔術道具だった。みんなと遊びたいと思って作ったものだ。しかしそれは意図しない方向へ事を運んだ。

次の日から彼ら彼女らがトルテを見たとき、持ち物を真っ先に確認するようになった。何かを持っている

ようであればすぐ別の場所に移った。何も持っていないければ遊びに誘った。不平等なルールで時に傷害もともなう遊びだ。

ガトーはこの時になって事態に気づいた。そして子どもたちに謝らせた。ガトーはそれで満足したが、結果は彼女らがこのことを隠すようになっただけだ。皆にとつて最初に危害を与えようとしたのはトルテだ。

ある時、トルテはボールを持ってきていた。皆はボールを置いておいたら遊ぶと言った。トルテはその通りにした。終わってトルテがボールを取りに行くと、元からそのような計画だったのか、誰かが途中で魔がさしたのか、ボールは破られ、汚水がそこにまかれていた。周りの子は彼ら彼女らの中でからかいあうだけだった。

それからしばらくトルテは障子を閉めて出てくることは無かった。家族は心配して人を雇い朝昼晩様子を報告させた。食事も睡眠もちゃんととっていた。

ガトーは事を聞いて誰が犯人なのか探そうとした。村中の子どもに聞くと同じような犯人像を言っていた。ガトーと同じくらい年齢の女性で黒いローブを着ていて、赤い目をしていたと。村には同年代の女性はいない。ましてや赤い目など、そんな人間が存在するのか。通りがかりの人かと考え家の伝手で調べていた。本当に大事なことを置き去りにしたまま。

トルテがいる部屋を見ていた人が気絶しているのが見つかって大騒ぎになった。トルテは無事だった。その手に以前と同じようなボールを抱えて出てきた。部屋に置いた素材で同じものを作ったのか。話を聞いたガトーはそう考えた。

村で事件が起こったとなれば騎士は責任が問われる。ガトーは原因探しに駆り出された。その後も怪我人は出続けた。時間だけが過ぎた。

あるところでボールをめちやくちやにした犯人を追いかけるのが無理だと判断したガトーはトルテにそのことを伝えようとした。少しは安心できるだろうと。しかし返ってきた言葉は反対だった。

「誰でもいいよ」

ガトーはトルテのために色々としたが、それは本当に役に立っていたのか。

その時、トルテの後ろに黒い影が現れた。ガトーはすぐ剣を抜き、トルテをどかして切りかかった。影は唸り声を上げて家の外に出た。そこをガトーは追撃する。影は獣の形をしていた。

影は一瞬ひるんだがガトーから距離をとつてにらみつける。点々と黒い液体が地面に落ちる。

トルテはガトーと影の間に立った。影に背を向けていたのでガトーは困惑する。

トルテが手を前に出すと影がガトーに襲いかかってきた。

昔は剣を使うことがしよつちゆうあったそうだが、今は鍛錬はするもののそんな機会はほとんどない。ガトーはなんとか攻撃を避けるだけで精いっぱいになった。

するとトルテがボールを影に叩きつける。大きな爆発音が鳴った。影が驚いた隙にガトーが攻撃する。影

はそこで限界を迎えた。獣の形は弾け、黒い液体が散らばった。

黒い液体は田んぼにもかかった。それに触れた稲は瞬く間に枯れてしまう。そして黒い液体は薄まることなく広がっていく。

騎士の家の長はこれを受け、ガトーに近くの街に黒い液体をなんとかする依頼を出すよう求めた。そしてトルテを村から追い出した。手を突き出したのを誰かが見ている、トルテの近くで最初と今回の事件が起きたのも影響したらしい。

ガトーはそれを聞き、とても哀れに思った。

*

「ふむ、想定内か」

ガトーの話の聞き終えて女性の口から出た言葉は冷静さがあつた。

「私達が追っているのと同じ現象だ。対処法もある」

「そうなのか？」

ガトーは身を乗り出す。

「その村に行つて呪いを凝縮し、また化物になるから倒す。その時飛び散る呪いをこの剣に吸収させる」

女性を取り出したのは二振りの細身の剣。美しい細工があつた。

「そしたら私が処理する」

「呪いを処理？ どういうことだ」

「見せてもいいか。その剣を貸してくれ」

ガトーはベルトから鞘を外して渡す。女性は剣を取り出し、両手に載せる。しばらくすると刃の部分が青みを帯びる。

「これで呪いは消えた」

ガトーもトルテも信じられないという顔をする。

「呪いは物の性質を変化させて消える。どんな性質になるかは普通わからないし変化もゆっくりだ。けど私はある程度変化する性質を選んだり変化を速めたりできる」

そこまで女性が説明するとトルテの顔が青ざめる。

「どうしたんだ、トルテ？」

トルテの口から言葉が絞り出される。

「呪われると人じゃなくなつて暗いダンジョンに放り投げられるつて」

「心配するな、そんなの空言だ。でももし完全に呪いを取り除きたいなら一緒に村に行かないといけない」「なんでですか」

「残念ながら、私は呪いを物から物に移すことができない。身体を変化させたくないなら呪いを凝縮させるときに出す必要がある」

「ここではだめですか」

「凝縮させるつて言つても私が力をかけているわけではない」

「そこまで聞いてトルテは考え事をする。そして意を決して顔を上げる。」

「やります」

「よし、ならこれから話すだろうし名前を教えよう。フレジェだ」

「フレジェさん、よろしくお願いします」

「少し準備をするから、一週間後にまたここに来てくれ。じゃあまた」

別れを告げ、二人は立ち上がる。トルテが外に出たが、ガトーはフレジェに向き直る。

「フレジェさん、その……眠っているのは誰だ?」

「あー、と、ちよつと面倒を見てるんだ。病気で全然起きられなくてさ」

「ならなぜ捨て置かないんだ?」

「……希望があるとかじゃない。でも、そばにいてほしい人なんだ」

慈しみもなにもない返答に、ガトーは少し腹から上がってくるものを感じた。

*

腹の底までぎりぎりと言が響く。服の裾を引つ張ると、がさがさとした床に足がつく。少しこすつてみるが、どこから聞こえるともわからない異音を紛らわせるには不十分だった。脚を振つてかかとを引つ込める。

家々の屋根が暖かさを帯び始め、鐘の音がどこから聞こえる。もうすぐ朝だ。

上半身を持ち上げる。目の辺りがぼそぼそする。体が地面に引つ張られようとするのに抗って布団から降りる。事件が起き始めてから毎日こうだった。

歯を磨き、顔を洗い、服を着替えて外に出る。青い路地には人が歩き始めていた。見慣れない風景に少し怖くなって、部屋に身を引つ込めた。しばらく後、ポールと木の板を持って出てきた。

塀を這うように角を曲がると、人とぶつかった。何かを大声でまくしたて、謝ると気が済んだのか去っていった。

道端に寄り、角を迂回すると十字路に出る。木の板を目を落として、辺りを見回す。もう一回繰り返す。建物の一つに入ってしまった。

きれいな服に身を包み、ぴんと立っている人がいた。こつちに気づくと睨んでくる。軒から逃げた。

よく考えて、可能性があるなら行くしかない、その人に板を見せた。

「下民が、ここは荣誉ある魔法ギルドだ。魔術ギルドと一緒にするな」

板を抜き取られ叩かれた。頭をさすりながら記憶を辿る。フレジェのところに行くとき生物学ギルドと魔術ギルドの間を通るとガトーが言っていた。

周りの景色を見ながらたどり着く。掲げられた看板は小さかった。

扉をくぐると、地面、階段、壁面、空中、そこかしこに机が置いてあった。みんな机に向かうなり物を作るなりボードゲームで遊ぶなりしていて、トルテは声をかけられるように思えない。

近くの人が声をかけてきた。木の板を見ただけで新しいギルド員と判断したようだ。伝言を人に伝えるように言ってきた。

けれどどこにいるのかわからない。聞こうにも誰も彼も自分のことに集中していて、話しかけるのは難しい。

そのあたりをうろうろと歩いていると、別の人に声をかけられた。お茶を持ってくるように言われた。淹

れるためのものを持っているはずもない。けれども言い返せなかった。

いるところも向かうところもわからず八方塞がりになってしまった。知らない人に囲まれ、行き交う音の中で立ちすくむ。

「困ったことでもあったか？」

横から声をする。振り向くと、こちらを向く人がいた。話したくないが、これ以外に如何ともできないとわかっていたので、これまでのことを話した。

その人は色々と教えてくれた。言伝の相手がいるところ。お茶は道具や茶葉が置いてあり、自由に使えること。水は屋内の井戸から汲めること。街では見知らぬ他人でも助けるし、助けを求めていること。

ギルドによってしきたりは異なるが、魔術ギルドでは新入りでも研究ができる。ただしお金は自分で稼がないといけない。魔術ギルドは同業者の寄り集まり以上ではないのだ。

村でやっていたように、ものを売るか修理するか。トルテが今後の生活を考え始めたところに今度はあなたが教えてと質問が飛んできた。

木の板を脇に挟み、右手を添えてポールを体の前に持ってくる。魔術の紋様が淡く光を放ち、元に戻る。

その人は興味深そうにしていた。魔力の伝導率とか取り替えの容易さという言葉をつぶやいていた。

トルテには論理がよくわからなかったが、目の前の人が喜んでるのはわかった。そして、一緒に研究する連を作らないかと聞かれた。自分が必要とされている感覚がして、是と返した。

*

うつうつとしげる森を抜けると、田園が広がっていた。家や倉庫がまばらにある、典型的な村だった。そんな風景に一点異様なところがある。水が黒く染まり、稲は枯れていた。

フレジェは透明な球体を持っている。中には多少ヒビがあるが表面は滑らかに研磨されており、玉加工師の技術の高さを感じられる。

球体は黒くなった田んぼの前に運ばれる。フレジェが手を離すと、そのままの位置で宙に浮かんでいた。魔術でもなしにこんなことができるのがトルテは不思議だった。

フレジェが何かを唱え始める。やおら水田から黒が浮かび上がる。そのまま球体に吸い込まれ、大きな影の塊になる。

フレジェはその間、おがくずを周囲にまいていた。次に傘の持ち手を天に向けて地面に置く。

「それは何ですか？」

「必要なものだ」

影が獣の形をとる。フレジェは二振りの剣を抜く。トルテ達に見せたのと同じだ。

瞬きの間に影の懐に移動していた。影の胴体に二本の線が入る。トルテは目を見開く。断面から滴るもの

は無い。フレジェの姿がぼやけたかと思うと、脳天から剣を振り下ろした。

影はただの塊になる。腕がフレジェに向かうが、剣を突き刺して止める。地面に擦ると、形が崩れていき、最終的に消える。これを繰り返し、全ての塊がなくなった。

フレジェ曰く、呪いは本来見えないものらしい。だからトルテは何も感じない、けれども呪いは取れたという。

剣を突き立ててあぜ道を走る。一周すると、今度は剣を交差させる。みるみる枯れた苗が活気を取り戻した。

「私はこれからこの騎士家に報告に行く。君も故郷に帰ってきたんだ、親御さんに会いに行ったら？」

トルテは歩きながら村人達と話した。よく心配してくれた。追い出したのは騎士家の独断だったのだろうか。

家に着いた。声をかけると両親も兄妹たちも出てきた。街での暮らしや家族の様子を話した。みんな戻っ

てきたことを喜んでいた。しかし、トルテは意を決して言う。

「私、街で生きていたい」

*

一週間を過ごした。最初は戸惑うことばかりだった。けれどすぐ気を張らなくなった。魔術書にわからない部分があればどんな人も教えてくれた。新しい研究にはまだ加われそうにないが、自分の能力が頼りにされる場面もあった。生活が厳しくても助けられ、また助けた。

難しいこともあるが、やっていける。本人なりに考えた末の決断だ。

「何を言っているんだ？」

「わかった。魔術いじりしたいから家の事やりたくないんでしよう」

「えー、ずるい」

兄妹や親が口々に茶化する。

「待って、私は本当に」

「本当だとしても」

さえぎって母が言う。

「辛いことばかりだよ。怖い人は多いし、生活するのもやっとだそうだ」

稲が育たない冬、この村の人は街に藁の靴なり蓑なりを売りに行ったり出稼ぎに行ったりしているので、そこからの話だ。

家族はトルテを目守る。視線が圧力となつてのしかかってくる。

「冗談だよ」

言葉が口元から滑り落ちた。家族は得心して、それぞれの仕事に戻った。

トルテは腹が黒いもので埋め尽くされるような気がした。自分は街にいたいのに、それを邪魔された。村にいないと家を守れないので、当然ではある。しかしこんなところにおいていいわけではない。それでも皆が心配するであろうことも承知している。

暗鬱な気分になってくる。自分が願うからいけないのか？ 家族は本当は邪魔するつもりではないのか？ それとも……押し通せない自分か？

にわかには歓声があがる。呪いでダメになっていた田んぼが活気を取り戻した。ドタドタと足音が聞こえる。位置と大きさから全員が見に行ったらしい。

そのときトルテは逆の方にある土間に足を向けた。作業に使っていた道具をことさらに握りしめる。

かまどのふたを開ける。中には火をつけるための紋様があった。そこを少しいじる。魔術ギルドで教えてもらった方法だ。よく見ないと気が付かないほどだが、より強い力を出せるようになる。

細工を終えるとそぞろそぞろ出ていった。

作業をしているうちに妹が呼びに来た。いつも飯を炊くときはやってくる。

かまどの紋様をわかってくれるか不安だった。言ったからとて何か起こるのだろうか。一人遠いところに取り残されたときのような不安を抱え、取りこぼさないことに必死になった。

米の浸水が終わり、妹がかまどに近づく。紋様に手が触れる。

次の瞬間、すさまじい音が体を吹き抜けた。

やっとの思いでトルテは目を開けた。妹の腕があった。業火のように赤く染まり、おぞましい黄色い腫れがいたるところにできている。

しばらくあ然としていたが、「痛い！」と声が上がリ、われにかえった。

お母さんが妹を水桶まで連れて行き、やけどしたところを冷やし始めた。

人が集まってくる。先の爆発を見たのか。何があったのか矢継ぎ早に聞かれる。心配はありたいが、どうも言う気にはなれない。

間に誰かが割り込む。

ガトーだ。

「慌てるのはわかるが、ここは騎士家の私にまかせてくれ」

村人達はどこかに行く。

「それで、何があったんだ？」

全てが明らかにあってしまえばどうなるだろう。

家族はトルテを見捨てるだろうか？

受け入れて、許してくれるだろうか？

「あの子がかまどに火をつけたら爆発しました……
理由はわかりません」

家族への裏切りであるのはもちろんだが、完遂しない意で自分への裏切りでもあった。

なんと恐ろしいことか！

ガトーは母と妹の元に向かうが、結果は同じだ。

適当に理由をつけてその場を離れる。かわいそうな人たちの方に振り向きなどしない。

頭が重くなってくる。このまま夢を追いかけていいものか？

ガトーの方はというと、原因の調査を続けていた。

一緒に来たフレジェの知識も借りたが、変わった点は見つけられなかった。

唯一の手がかりであるかまどの紋様も煤まみれになつており、そのうえ一部が破損していたので見過ごされてしまった。

ひと通り調べ終わってもガトーは台所にはりつく。

「騎士家として解決できないと」

しかしどれだけ回つても有意義な発見は無い。

やがて辺りが暗くなる。フレジェがこれでは帰れないと言う。

「すまないが、ガトーの家で泊めてもらえないだろうか」

ガトーはそれを承諾する。これ以上残つても調べようがないので惜しみつつも帰つていった。

*

騎士家の縁側にガトーが座っている。月が大きく照っている。

他の人は資料を作るなり、勉強をするなり、すでに床に就くなりして、静寂ばかりが空間を埋めていた。

「おや、空いているのか」

フレジェが横から顔を出す。手には徳利が握られていた。

どうやら騎士家のものを借りたらしい。誰かと飲む方がよいということで、猪口をもう一つ持ってきた。

「今日の月はいいな、歌でも詠むか」

懐紙とすずりと筆を取り出していくつか歌を書く。先の爆発なぞ気にしていない様子で、ガトーはなんだががっかりする。

フレジェがガトーを誘うと、

「大丈夫です。そこまで余裕はないので」と返す。

フレジェに反応が無いのを見てまずいことを言ったかと焦る。

「こういうのも覚えた方がいいぞ、私らは基本暇人だからな」

「暇人って……」

苛立って口が滑ってしまった。

「違わないだろう」

ガトーは米蔵の方を見やる。武道や教養は彼達にとって必要とはいえ、生きる糧は彼達以外の人が作ったものが混じっている。

「何を思っているのかはわからんが、それは捨て置け。騎士というものは暇人、これに違いはない。そして暇人には義務がある。その暇の度合いで物事を考えて果に良い結果を出すことだ。一つのこと集中するな、目に入る全てを見逃すな」

しばらくガトーはトルテをまじまじと見る。

「良い結果とはなんですか？」

「知れたらいいのだがな」

もう一度、月を見上げる。

ガトーは真に人の力になれるように決意を新たにした。

*

トルテは一人怯えていた。

腕にはボールが抱えられている。あるときは災難の元になった。あるときは幸運のきっかけだった。

希望はそのままでは意味がない。現実に行動のあつてこそ愚痴は昇華される。

しかしそれは立ち上がる理由にはならない。

一挙手一投足は誰かの不満を買う可能性があり、害を被ることになる。

ボールの縫い目に目を落とす。

街での体験は目まぐるしかった。聞いたこともない獣の皮が沢山あり、そのひとつひとつ質が異なるらしいが、覚えきれなかった。縫い目が紋様の邪魔にならないような縫い方を教えてもらおうとしたら、よくわからない台を紹介されたりした。海に向こうから来た本に載っていたものの再現らしかった。海に向こうとはどんなところか聞くと、ここよりも魔術がずっと発展している場所だと言われた。

そうしたことを考えているうちに、自身の境遇も思いつかされるようでもある。つかめるかもしれないものが眼前にあったのも事実である。

この憂鬱を打ち破るとすると、何が必要だろうか。すぐに思い浮かぶのは家族の顔だ。かけがえのない存在であるが、障害でもある。

ならば、何らかの形で見返さなければならぬ。

一つ考えが浮かぶと次々とアイデアが生まれる。

*

その後、トルテは家の近くで紋様を刻んでいるところをガトーに見された。ガトーは珍しく突き詰め、爆竹のようなことが起こるものであると明かさせた。それは鬱憤ばらしにしかならない上、魔術をしている方がトルテには有意義なはずだと言うとトルテはのっそりと片付けをした。

地面が土むきだしになるとトルテはため息をついてその場にしゃがみ込む。ガトーはトルテの街への憧れを一言一句聴いた。そこに街に戻るところだったフレジェが通りかかった。ガトーはついて街に行くことを提案するが、トルテは家族のことで定まらない様子だった。そこでフレジェは多少心配をかけてもすごいことをすれば家族は喜ぶと助言をした。それでトルテもようやく立ち上がる。

家で支度をし、カバンを背負ったまま家族に話す。

「今まで迷惑をかけてきてごめんなさい、だけど行きたい場所があるんです」

驚きつつもトルテの家族は見送りをすることにした。トルテはしかと前を向き、胸を張って歩き出した。

(了)

詩



まだのカンマ

白木虎

カンマを打つ、

また長めの文だけけど

まだピリオドは控え席、

だって終わりにには早いから、

まだもう少し続けていこう、

この筆動かして書き連ねていく、

調子づいたら良いのだけど

ガタガタに不格好なパートもある、

支離滅裂になったり

辻褄が合わなくなったり

波が激しい一文です、

そいつが向こうからこっち

ずっと伸びてきているのがね

わずかばかり空恐ろしくて、

確かに書き手は自分だけど

あまり前だとまるで別人、

人って変わるのねーと

時々読み返して楽しんでます、

失敗したなとか

間違えちったとか

こっちのほう良かったなつてときは

二重線で訂正して

脇に新しいフレーズを書く、

消しませんってか消せませんです、

インクで書いていますから、

二重線だらけの箇所もある、

破らないのって訊きますか、

紙は半端な力じゃ破れません、

はさみならできそうだけど
生憎、度胸がありませんで、
許しておくんなせえ、

破るだけの力は無いし
切るだけの覚悟は無いし
終わるには早いとも思うから
まだピリオドは控え席、
またカンマがしばらく頑張るってさ、

R e 降 R a i n

白木虎

雨、雨、ぼつ、ぼつ、降ってきた。

まだまだらしいと、風の郵便屋さんが届けていった。

雨、雨、しと、しと、降ってきた。

鳥が二羽、連れたって飛んでいった。

雨、雨、さあ、さあ、降ってきた。

本番はこれからと、雷の電報が窓から覗いていた。

雨、雨、ざあ、ざあ、降ってきた。

虫一匹も出歩かない、重い雲がかかる午後。

雨、雨、ざんざか、ざんざか、降っている。

雷御殿のお近づき。龍と雷神、主はどちら？

シェアハウスでもなさってる？

マア、へそは隠しましょつか。

雨、雨、とことん、とことん、降って止んだ。

お疲れさまです、皆々様。

とりあえず、雨はまた暫くお休みで。

れんが 連歌

【連歌とは】

連歌とは、「みんなでつなげる俳句」のことです。五七五と七七を、別の人が交互につなげて付合つけあいをつくっていきます。読む際は、常に「五七五 ↓ 七七」の順番で読んでいき、七七は前後どちらにも掛かります。連歌全体として統一されたイメージはなく、むしろ（同じ七七を共有しつつも）付合つけあいことにまったく異なつた世界が現出するのが連歌の魅力とされています。

ちなみに、鎌倉以降の歌の世界では、「百韻」と言つて百句つなげるのが主流なんだとか。有名な「水無瀬三吟百韻」とかのことですね。さすがに部員だけで百句つなげるのは難しそうですが、いつかやれたら楽しそうですね。

他にも連歌には色々と複雑なルールがあるらしいですが、今回はとりあえずやってみようということので、

あまり細かい部分は気にせず、発句のテーマのみ決めて進めました。どうぞお気軽にお楽しみください。

一、発句テーマ 「入道雲」

雷雲も 巻き込み染める 純白の
(準清)

育つ速さは 筍のごとし
(林)

かすみゆく 柱に刻んだ 傷のあと
(鹿々)

久しい実家の なつかしい匂い
(霜雪)

ドアを開け 自然とこぼれる 「ただいま」が
(薄暮)

吸い込まれていく 薄暗がりに
(遠野)

あの年に 君と歌った ジングルベル
(沢)

商店街で 今は聞くだけ
(準清)

二、発句テーマ 「天の川」

天の川 鵲かささぎ渡す 夏の夜
(来田)

橋に煌めく 白の灯火
(準清)

木葉船 願いを乗せて 送り出す
(遠野)

流れのままに 遠ざかりゆく
(霜雪)

舟の上 舞い散る桜 手を伸ばす
(任火)

指を撫で去る 甘い追憶
(鹿々)

「きょうなら」 告げられ握る 君の袖
(薄暮)

かすかに感じる 涙の流路
(沢)

歩み止め こぼれる雫 砂漠にて
(白木)

母はため息 水やり代行
(遠野)

三、発句テーマ 「蜃気楼」

夏の青 空浮かぶ船 揺れる雲
(鹿々)

「出港！」 叫んだ あなたはどこへ
(遠野)

木漏れ日の 差し込む川に 銀杏乗せ (準清)

徐々に痩せてく 黄色の姿 (任火)

鼻をつく 香りただよう 部屋の中 (薄暮)

ティーカップから 立ち上がる湯気 (赤羽)

わずかな間 ほっと息つく 昼下がり (霜雪)

まぶたかすめた あの日のとき (遠野)

四、発句テーマ 「夕焼け」

霞む目に 染みる潮風 日は溶けて (林)

波のあの中 消えしあの日も (来田)

思い出を 未練断ち切り 投げ捨てる (薄暮)

冷えた銀色 網目を目掛け (遠野)

寒さ耐え 財布から出す 一円玉 (赤羽)

震える指先 零れ落ちる 希望(ゆめ) (鹿々)

雨の中 新田耕し 畑仕事 (沢)

かすかに混じる 魚の匂い (任火)

五、発句テーマ 「月の影」

月の影 かくれて見えぬ 君の顔 (薄暮)

二人寄り添い 更けていく夜
(霜雪)

白うさぎ 緑の耳を そばだてて
(鹿々)

雪間に隠れ 明日を待ちつつ
(来田)

忘れ去られ 氷漬けになった 木の实たち
(赤羽)

ガラスケースで 人を眺める
(遠野)

熊と虎 あいつら中で 何やってんだ
(沢)

アルミとパン粉を こねて焼いてる
(鹿々)



部員のお気に入りの一冊を、書評欄のノリで紹介するお馴染みのコーナーです。気になったものがあれば、ぜひ図書館や書店でお手に取ってみてくださいね。

* * *

☆『麦本三歩の好きなもの』 住野よる 著

住野よるといって、映画化もされ、大ヒットした『君の膵臓をたべたい』を思い浮かべる人も多いと思うが（もちろんそちらもすごくいいのでいつか紹介したい）、この作品は、『君の膵臓をたべたい』とはまた違った面白さを持った小説だ。

「麦本三歩は〇〇が好き」というように、図書館員の麦本三歩のたくさんの好きなものや日常を描く、連作短編小説である。

おつちよこちよいで天然の麦本三歩と好きなもので練り広げられる日常は、特に大きなことも起こらないけれど、何だか幸せを感じさせ、心が温かくなる。（ちなみに、内容とは関係ないが、この本の文庫版は、表紙のデザインやイラストも可愛らしい。筆者は表紙につられて買った。）

『麦本三歩の好きなもの』は、第二集も二月に発売された。この機会に是非、読んでみてはいかがだろうか。（執筆 赤羽滯）

☆『天才を殺す凡人』 北野唯我 著

「え、天才じゃん……」

高頻度で使う言葉ですね。でも、秀才という言葉があることも私たちは知っています。また、自分かもしれない大多数が、凡人というくくりに入ることも。世界には異質な個人が溢れていて、それぞれ違った才能の持ち主——でも、自分の生きるベクトル外の才人を、

認められないことも多々。そんな人たちを、この本はビジネス的に論じます。人間関係を改善させたい方、ぜひ読んでみてください。

(執筆 準清奏弥)

☆『星の林に月の船』 大岡信 著

和歌や俳句、なんだかよく分からないし、覚えなきやいけないし、めんどくさい。嫌いだー。という方もいるのではないのでしょうか。

そんなことはありません。この本には、万葉集や古今和歌集から選ばれたとびきりの歌や句がたくさん載っています。現代語訳しよう、鑑賞しよう、とあまり思わないで、肩の力を抜いて、歌や句の「響き」を楽しんでみてください。きつとお気に入りの一つが見つかると思います。ぜひ読んでみてください。そして、ぜひ、和歌や俳句を好きになる人が増えたらいいな、と思います。

(執筆 遠野燈)

☆『深夜の博覧会』 辻真先 著

「このミステリーがすごい! 二〇二二」で第一位に輝いた『たかが殺人じゃないか』。読んだという方も多いのではないのでしょうか。

『深夜の博覧会』は、その前日譚となるシリーズ第一作目のお話です。舞台は昭和十二年で、実際にあった博覧会をもとに書かれています。作者の辻真先さんは現在八十九歳。戦時下を実際に体験したからこそ書ける、昭和時代のリアルな描写が特徴で、一風変わった雰囲気のみステリーが読みたいたいという方におすすめです。後日談の『たかが殺人じゃないか』も合わせて読むと面白さが増すこと間違いなしです。

(執筆 霜雪海十羽)

☆『読む力』 井上弘美 著

俳句ってありますよね。五七五のあれです。その俳句、十七音で情景を表現しなければいけないため、抽象的でどんなふうにも鑑賞すればいいか感覚がつかめないという人も多いのではないのでしょうか。

そんな方にはこの『読む力』をおすすめしたいと思います。この本の中では様々な句が解説されており、そこからたくさんさんの鑑賞のためのヒントを得ることが出来ます。今まではなんとなくしかわからなかった俳句の世界も、これを読むとかなりわかりやすくなると思います。ぜひ読んでみてください。

(執筆 鹿々書々)

☆『キッチン』 吉本ばなな 著

今更私が紹介するまでもないほど超絶人口に膾炙した作品だが、あえてこの場を借りて勧めさせていた。ただきたい。というのも、この作品の魅力は、「読

んだら誰かに勧めたくなくなる」小説であるところにあると思うからだ。

祖母を失い、家族のいなくなった孤独にさらされた台所愛好家の少女・みかげは、突然家を訪ねてきた良い感じの大学生・雄一と同居することになる。みかげは雄一の母である「えり子さん」の放つ輝きに惹かれるが、えりさんは実は女装している雄一の父だった……。

これだけでもだいぶめちやくちやだが、この小説には筋書だったあらずじがあるわけではない。ただフラッシュのように次々と映される展開と、みかげがそのときに肌で感じた世界への感情が、そのまま(本当にそのまま)描かれている。唯一の家族を失った夜に見上げる冷たい天井、ほんのり温かい雄一とえりさんとのごはん……。みかげが見たものが、著者の透명한感性ですくい上げられ、読み手の心に静かに沁み込んでいく。

繊細な世界を、コミカルでちよつと不思議な、でもどこまでも丁寧な表現でやさしく映し出す。『キ

ツチン』を読んだときのこの感覚は、一度感じたら
きつと周りの人に勧めたくなるに違いない。

なんで毎日生きていかなきゃいけないんだと思う
ことがあったら、ぜひこの小説を開いてみてほし
い。きつと、なんだかんだで明日も生きていこうと
思える力を、この小説は持っている。

(執筆 林絵理香)



今年の夏は新潮文庫のプレミアムカバー



文芸部の普段の活動を不定期につぶやく新コーナー。よく「文芸部って何してんの？」と聞かれるので（ちょっと悲しい）、「文芸部ってこんなことしてるよ！」アピールの場として今号から活用していければと思っています。何卒。

* * *

☆図書館展示企画「本でしりとり」

新入部員も入ってきたことだし、なんかやるか！ということで、図書館展示企画を文芸部でやらせていただきました。

企画名は「本でしりとり」。その名の通り、「洪幕」の「く」からスタートし、約三十冊の本のタイ

トルがしりとりになるようにつなげていきました（展示した本一覧は144ページ）。

部員が集まってそれぞれが知っている本のタイトルを出していったのですが、最後にちやうど『異邦人』でイイ感じに終わることができました。ナイスプレー、カミユ。



意外とたくさん見てもらえてうれしかった

何の展示をしよう、と話し合っていたとき、実はしりとり以外にも色々アイデアが出ていたので、そ

れらもまたいつか出来ればと思っっています。個人的には「読んだら頭おかしくなる小説シリーズ」をぜひともやりたいです。お楽しみに。

*

展示にあたって色々協力してくださいました図書館司書の岡崎さん、どうもありがとうございます（新歓号からお世話になってばかりですね……）。

また、本展示はすでに終了してしまいましたが、本校の図書館では現在、カウンター前にて参加型でつなげていくしりとり企画を開催中だとか。

図書館にお越しの際は、ぜひ寄ってみてくださいね。

☆表紙をカラーにしてみましたらしくさん捌けた

お気づきの方もいらっしやるかもしれませんが、前号の梅雨号から表紙をカラーにしてみました。

文芸部の部誌ってなんか全然捌けないなあ、なんだろうなあと以前からずっと思っていたんですが、原因は表紙でした（断定）。

というのも、通りがかりに目に入った冊子を手に取るか取らないか、ほとんど人はパッと見て決めるものですし、そもそも従来の地味な白黒の表紙では認知すらされていないかもしれない……。

ということですが、前号からカラーにしよう、となったのですが、なにせ急遽思い立ったので時間的な余裕がなく、梅雨号はなんとも雑な表紙になってしまいました。計画性……。



30分で作った梅雨号の表紙

しかしなんとびっくり、こんな表紙でもカラーにするだけで、その前の号の倍ぐらいのスピードで捌けてしまったのです。表紙の偉大さを痛感させられました。省みれば、人だつて初見では身だしなみやまとう雰囲気といったもので判断されがちですし、やはり何事においても表紙は大事なのかもしれない……。

謎の教訓を得たので、今回はそれなりに余裕をもつてちゃんとした表紙を作りました。個人的にとても気に入っています。良かった。画質は許してください。何はともあれ、手に取ってくださいる人が増えてくれれば、部の一員としてそれに越した喜びはありません。発刊するすべての号の表紙をカラーにするのは予算的に厳しいかもしれませんが、これからでもできる範囲で続けていきたいですね。後輩諸君、頼んだぞー。

(林絵理香)

しりとり展示本一覧

意外とうまくつながるものですね……。

番	タイトル	著者	出版社
1	クリスマス・キャロル	チャールズ・ディケンズ	光文社
2	ルー＝ガルー 忌避すべき狼	京極夏彦	講談社
3	道草	夏目漱石	集英社
4	さよならの言い方なんて知らない。	河野裕	新潮社
5	医学のたまご	海堂尊	理論社
6	極楽	菊池寛	新潮社
7	くちなし	彩瀬まる	文藝春秋
8	鹿の王	上橋菜穂子	KADOKAWA
9	海辺のカフカ	村上春樹	新潮社
10	神様のカルテ	夏川草介	小学館
11	てのひらの中の宇宙	川端裕斗	KADOKAWA
12	うたうひと	小路幸也	祥伝社
13	とんび	重松清	角川書店
14	ビルマの竖琴	竹山道雄	新潮社
15	図書館の子	佐々木譲	光文社
16	この世の春	宮部みゆき	新潮社
17	ルージュ 硝子の太陽	誉田哲也	光文社
18	浮世の画家	カズオイシグロ	中央公論社
19	海賊と呼ばれた男	百田尚樹	講談社
20	告白	湊かなえ	双葉社
21	蜘蛛の糸	芥川龍之介	新潮社
22	友だち幻想	菅野仁	筑摩書房
23	有頂天家族	森見登美彦	幻冬舎
24	クラスメイツ	森絵都	偕成社
25	罪と罰	ドストエフスキー	光文社
26	月に吠える	萩原朔太郎	愛蔵版詩集シリーズ
27	ルーム・ルーム	ロドスキー	金の星社
28	ムゲンのi	知念みきと	双葉社
29	異邦人	カミュ	新潮社

編集後記



林絵理香

こんにちは、編集の林です。またお前か、と言わず
どうかももう少しだけお付き合ってください。

改めまして、この度は槐祭にお越しいただき、そし
て中高文芸部誌「彼方」をお手に取っていただき、誠
にありがとうございます。

もともと文芸部は中学で「貝楼」、高校で「蜜柑デ
ーブル」という季刊を発行していたのですが、よりク
オリティの高い文芸誌を目指し、今年度より中高合併
版「彼方」の製作をはじめました。手に取ってくれた
方が面白いと感じてくださる文芸誌にするため、高校
が中心となって様々な点で刷新を図り、リレー小説や
インタビューなどの新たな企画も積極的に導入しま
した。

その結果、今号ではなんと150ページ近い大ボリ
ュームとなってしまいました。この後に待ち受ける製
本作業のことを思うとなんと頭がもたげますが、私

は今までで一番完成度の高い冊子にすることができ
たと自負しています。今号を通じて、部員はもちろん
のこと、取材に協力してくださった石井先生や、図書
館司書の岡崎さん、顧問の池田先生、表紙にアドバイ
スくれた友人、そして何より読んでくださる方々、
本当にたくさんの人に支えられて本誌は成り立って
いることを改めて実感しました。

さて、もはや何度書いてきたか分からないこの編集
後記ですが、私の担当は今回で最後かなと思います。
最後までら何か感慨深いことでも書きたかったです
が、いざPCに向かうと別に今更書くことってあんま
り浮かばないですね。今後もきつと、後輩たちがより
面白い文芸誌にしてくれることでしょう。

最後になりますが、裏表紙背面にあるQRコード
より、本誌に関するアンケートにご協力いただければ
幸いです。

今後とも「彼方」を、どうぞよろしく願います。

二〇二一年九月

美術部コラボ

文化祭当日に展示した美術部とのコラボ作品を紹介します。今回は美術部の方が描いてくれた作品に対して我々が小説を書くという形で製作しました。作品数の都合上、一枚の絵に二つの小説が付随している場合があります。

ぜひご覧ください。



あなたの隣には、わ、た、し 沢みどり

二、三年前のことになるだろうか。仕事で東京に行く機会があったので、新幹線に乗って上野まで行った。生まれて初めての東京だったということで見物のためにわざわざ新種のデジタルカメラまで買ったのに、期待外れもいいところで何もいいところはなかった。すぐにでも仕事を終わらせて故郷に帰ろうと思っていた時、一緒についできた喜田に「せっかくなので山の手線に乗りませんか」と誘われ、思いがけない形で私は出張の最終日を東京見物に費やすことになった。

上野で乗車し、日暮里、池袋を回って品川で降りる。恐らく東京に住んでいる人達にとってはなんてことはないルートなのだろうが、環状線どころか単線の電車ですら滅多にお目にかかれない四国の田舎町に住んでいる私たちにとってこの旅というのはなかなか新鮮なものにあふれていた。乗車口の上で映像が流れ

ているというのにも驚きだったが、二車両もあるのに電車が駅に停まる度に全ての扉が開き、そのほとんどすべてから客が乗ってくるのは都会ならではの風景で、私たちはしばらくの間あつけにとられていた。

それでも人間の心理というのは不思議なもので、同じような光景をずっと見ていると飽きるようになってくるらしく、しばらくすると話題は山の手線ではなく故郷での思い出話に移っていった。

「確か栗田さんは僕の三個上でしたよね。僕が3期生なので」

「そういえばそうだったかな。あの頃が懐かしいな。田舎の中学生らしく一つの世界で完結してて大きくなったら家業を継ぐものだと思ってた。祭りの手伝いもよくさせられてたし」

「ありましたねー。町内会の子供はみんなハッピー。あれも20年以上前になるんですね」

近年祭りをはじめとする村の伝統行事が廃れていっているのは村の抱える一番の問題だった。子供達が外

で遊ばなくなり、ゲームに没頭するようになったことも、働きの若者が大学へ行ったきり戻ってこないようになったことも、農業や製造業といった家業が形骸化し、多くが隣町の企業で働くことを選択するようになったのも、もとはといえば原因は一つしか考えられなかった。―村そのものに魅力がなくなっているのだ。残ったのは昔からある閉鎖的な雰囲気だけ。そんな村に住む人の数は年々減っている。私たちの村は、途轍もない危機にさらされているのだった。

「今じゃ珍しくも何もなくなっただけど、あの頃は東京に引越すなんてのは大変なことで、村中からこの地を見捨てるのかと、非難を浴びせられてたなあ」
私の言葉に喜田は少し困惑気に「そういえば僕の小学校の頃のクラスメートで東京に引越した奴いましたね」と続けた。

「田原っていうやつなんですけど、そいつとにかく頭よかったんですよ。ほら、あの村で頭いいって言っても、たかが知れているじゃないですか。でもそいつマジの方で賢かったんですよ。わざわざ松江にある中

学受験塾に教科書もらいに行つて独学で勉強して。小のときにカイセイっていう東京の学校に受かつて小学校を卒業してすぐ東京行つちやつたんですよ。今どうしてんのかなー」

電車は池袋に到着しようだ。ガラツと開いたドアから次々と人が乗り込んでくる。

その中にかつての友人を探そうとしている自分がいた。――正確には「かつてのクラスメート」と言った方がよいだろう。見つけられないとは分かっているが、ついつい探してしまう。

そんな自分とこの何日かの間、向き合つてきた。

だってあいつはいつも東京にあこがれていたのだ。

「どうしましたか？浮かない顔してますけど」

「いや、私にも昔東京に行つた同級生がいたんだ」

私の通つていた小学校は、在籍生徒数が9の学年あわせて90人に満たない小さな規模のものでした。生徒数が9の人の学年もさらにあつたが、私の学年だけは9人とかかなり多かつた。人数がもともと少ないだけに、

年による変動の幅が大きかつたのだろう。

9人とは言つても、都会の学校だと一クラスの半分にも足りない（私たちの認識だと、『都会』の範疇には松江市はおろか、バスで一時間の石溝町も入るが）。そんな少人数で何年も一緒に過ごしていると一人一人が良くも悪くも濃い関係で結ばれるようになり、相手の家族構成も職業も、どこに住んでいるのかも、どういったことを趣味にしている日頃心の中でどんなことを考えているのかも例え異性であつても分かつてしまうようになった。

「なんかつまらへんね」

小の最初の授業の前、隣に座つていた小出が私にだけ聞こえる声で言った。

「いきなりどうしたんや？」

「だって、ざーつとこのメンツで9年間もやつてきて、まだ一年あるんやで？さすがに飽きるやろ」

今思い返せば、その時の私たちの会話があの頃のクラスみんなの気持をもつとも的確に表していたのだろう。もう飽きたーそれが、正直な気持ちだった。

クラスの片隅でひそひそ話している女子のグループの方を見やる。この年になって女子たちも女子っぽさを身につけたらしく、さかんに目配せしあっているのが見て取れる。集団の中で、一人だけ仲間外れに遭っているのは神田という名の小柄な女子だ。いつからか、女子は必ず誰かを集団からはぶり、それを楽しむようになった。今はぶられている神田さんだつて一ヶ月もすればそんなことをすっかり忘れ、また新たなじめに加わるだけだろう。―外でジメジメ降り続けている雨と同じように、このクラスもジメジメしているのだ。

私は嫌になつて窓の外を眺めた。視線の先には、小さかった頃に全員で遊んだ原っぱがある。よく鬼ごっこして遊んでいたが、だれからともなくその公園で遊ぶのを避けるようになり、今では誰も寄り付かなくなつてしまった。

「ねえねえ、栗田君」

梅雨の開けた直後だろうか。声がしたので顔を上げると、クラスの中で一番のオシャレ屋の大山しずかが机

の前に立っていた。後ろでは女子軍団がクスクス笑っている。

「私のこと、好き？」

確かに一〇年前私は好きな人として彼女の名前をあげた。だがそれは恋の気持ちか芽生えたばかりの幼い自分が「誰でもいいから早く言えよ」とせかされて、とつさに思い浮かんだのが、常に着飾つて目立っている大山の名前だつたまでだ。

私が口ごもっていると、「好きなんでしょ？」とさらに迫られた。

「だつて栗田君、授業中いつもちらちら私のこと見てくるもの」

とんでもない。私が彼女の方をいつも見ているのは、その隣に座っている―今は一人で本を読んでいる秋好美咲だ。そんな思い違いにも気づかず、彼女は自信満々に私を見下ろしてきた。女子の一人が「照れてんじゃねーよ」と私に向つて言うと、他の女子たちもニヤニヤ笑つた。

「ええっ……、どうしたのいきなり」

ちょうどその瞬間先生が教室に入って来て、私は呪縛から解放された。

その日から彼女は私のそばにいつもいるようになった。体育着で移動するときも、休み時間に本を読んでいるときも、学校から帰る時も。女子に「ラブラブー」とからかわれると必ず「栗田君が私にお熱だから仕方ないでしょ」と言った。そういうときの彼女の態度が私は嫌で仕方なかったが、女子の仕返しが怖かったので、黙っておいた。

彼女は不細工ではなかった。家がスーパーを経営していて裕福だったので、化粧などにも手を出しているスタイルは抜群に良かった。彼女はよくそのことを自慢したが、同時にこんなことも言っていた。

「私、東京に行きたいねん。こんな田舎、女はみんなおしゃれしておらへんもん。お父さんが仕事で会ってる都会の女の人みんなお化粧してるで」

「へえ」

「栗田君は私が東京行くって言ったらついてきてくれるやろ？私のとなりにはあなたしかおらへんもん」

彼女の言葉はほとんど聞き流していた私だが、最後の言葉だけは鮮明に覚えている。あなたの隣には、わたし、しー。20年経った今も耳にざらついたように離れてくれない。

秋が深まった頃、今はすつかりいじめる側に立っている神田さんが、大山のいない隙を見計らって私に耳打ちしてきた。

「大山さんの家のスーパー、今経営に苦しんでるんやって」

「それがどうしたんや」

「そんな家が貧乏なくせに私らの前では気取っておしゃれしてんのムカつかへん？それに態度も偉そうやし。うちら、これから大山さんのことはぶるつもりや」

彼女は去り際に「せいぜい二人で仲良くしとき」と言い残して教室の隅に向かった。彼女の向かう先には顔を突き合わせて話している女子軍団がいる。私は何とも言えない嫌な気持ちになった。

その日から大山はクラスの女子から無視されるよ

うになった。それでも相変わらず毎日髪型をアレンジし、私の近くにいた。だが彼女の独善にますます嫌気が差した私はいっしか彼女を無視するようになった。

小学校卒業とともに大山家は村から姿を消した。

「夜逃げ」だとささやかれたが、真相は誰にも分からなかった。結局彼女が村に戻ってくることはなかった。

「渋谷―。渋谷―」

アナウンスとともに、たくさんの人が乗ってくる。立ち話できるような状況ではなくなった私たちはそれぞれ窓の外を眺めることにした。

ふと誰かの視線を背中に感じ、振り返った。

その時私はわが目を疑った。人ごみの中に大山の姿を見つけたのだ。しかもこつちを見ているではないか。当時の姿のまま笑みを浮かべて、私に対して何か言っていた。

しかしその時電車が恵比寿に到着し、衝撃で大柄なサラリーマンがのしかかってきたため、私は彼女を見失うことになった。次にそちらを見た時、彼女の姿は

消えていた。

あなたの隣には、わ、た、し―。

あの時見た大山が本物であると、私は今でも確信している。彼女はいつでも東京にそこがれていたのだから。きつと幸せに生きているはずだ。



すれちがい

薄暮ルク

“今日の朝ごはんは、パンケーキです。私のお気に入りの食べ方は黒蜜ときな粉をかけて食べる和風風。”

メッセージを書き、今日の朝ごはんの写真とともにツイートする。朝ごはんのツイートを毎日する。これは、私の出張による遠距離恋愛中の彼氏が考えたルール。滅多に会うことができないため、毎日ちゃんと朝ごはんを食べているかだけでも確認したい。仕事が忙しい時でも朝ごはんを抜くのは良くないから。と、約束をさせられたのだった。

「毎日必ず、朝ごはんの写真のツイートをね。そして、僕が絶対に返信するから。生存確認だよ。」

真面目な顔をして生存確認という単語を使う彼の様子を今でもはっきりと思い浮かべられる。しかし、いつもなら一分もしないうちにコメントをしてくれる彼氏からのコメントがいつまで経っても来なかった。もちろん気にすることではないと分かっているが、真面目な性格の彼が寝坊をしてしまったのかと不思議に思った。そして、会社へ出勤しようとした時、スマホが鳴り、その彼氏がツイートしたことを知らせた。彼がツイートすることは珍しいと思いつながら、彼のケンケンというハンドルネームのアカウントを開いた。

そして、

『ガタン』

音を立ててスマホが落ちる。慌てて拾い上げるが驚きによる心臓のバクバクは止まらない。理由は彼が今ツイートした内容だった。

「彼女からもらった♡」

このメッセージについていたのはあげた覚えのないネクタイだった。これは誰からもらったの？彼は、普段♡など使わないはずなのに…。匂わせ？なぜ？新しい彼女なの？さまざまな思いが駆け巡った。が、まずは会社に行かなくては。理性を保ちながら家を出る。しかし、怒りは収まらなかった。電車に乗り込んでからもその怒りは収まらない。それどころか、ますます怒りが腹の底の方から込み上げてくる。ケンケンというのは彼の本名ではなく小鳥遊謙信という彼の古風な名前から私が考えたものだ。本人は、このケンケンというハンドルネームからは想像できない、黒縁の眼鏡をかけた真面目君。それが、私の彼氏、小鳥遊謙信。もつとも彼の気持ちはもう私にはないのかもし

れないが…。電車に揺られながら私は、彼のことを初めて気になり始めた時のことを思い出し始めた。

彼の第一印象は最悪。元々、学歴のない私に比べ、某有名大学卒業の彼にコンプレックスを感じていた。彼は自分の学歴に誇りを持ち、低学歴をバカにしているのだろうという偏見ももっていた。そんな中、仕事の用事で彼に初めて話しかけた時、彼の小鳥遊という名前が読めず、

「ことりあそびさん、」

と話しかけてしまった私は彼に、呆れたように「たかなし、と読みます。どうしてこんな字も読めないのですか？」

と言われ、頭が悪いとバカにされたと思ってしまった。その日は機嫌が悪かったことに加え元々の短気な性格が災いし、

「は？そんな不親切な苗字をしているあなたがいけないんじゃないですか？」

という我ながら意味のわからないことを言い、キレ

てしまった。すぐに自分の言っていることのはちやめちやさに気づき、すみませんでした。と、モゴモゴ言ったあと、仕事の用事も終わらないまま自分のデスクに帰ったのだ。この自分のコンプレックスによる理不尽な怒りを後悔した一週間後。上司に誘われて行った飲み会で彼に再会した。運の悪いことに彼の正面に座ることになり、気まずさから下を向いた顔を上げられない。

「あの、」

声をかけられバツと顔を上げる。そして、思わず怒られると首をすくめると、

「すみませんでした」

「へ？」

思わず間拔けな声をあげてしまう。

「あの、僕は人の気持ちを読み取るというのが苦手です。、気に障るような発言をしてしまい、申し訳ありませんでした。」

「あ、いえ。そんな謝らないでください。私の方が意味のわからない理由で起こってしまい、申し訳ありま

せんでした。」

この前のことは明らかに私の方が悪いのに先に謝ってくれた彼の大人な対応に自分のみじめさが恥ずかしくなってきた。

「本当に失礼なのは承知ですが、いったい何が気に障ったのか今後のためにも教えてもらってもいいですか」

そう聞かれ、思わず戸惑ってしまった。もしかして、あんなくだらないことにキレた私に皮肉を言っているのかもしれない。しかし、彼はいたって真面目な様子でこちらを見ている。私は仕方なく、学歴がコンプレックスであることと、彼にバカにされたと思いきや、理不尽にキレてしまったことを話した。彼は驚いたように目を開いた。

「え？僕は馬鹿にしたつもりはなかったのですが……。その、純粹に疑問に思っただけで聞いただけですか。」
「ということ、完全に私が空回っていたということだ。なんだかがつくり落ち込んでしまう。」

「あの、不親切な名字をしてしまったことに関してで

すが、名字は自分の意思で変更するためには何かやむおえない理由がある場合に限るそうです。やむおえない場合、というのは客観的に見て社会生活に支障がある場合にしか認められなく、小鳥遊という名字はそれに当てはまらないそうです。改善できなくてすみません。」

私が言ったためちやくちやなことに関して生真面目に謝罪している彼に笑いをこらでさえて肩がブルブル震えてしまう。

「え？どうしたのですか？僕が何か気に触ることを…？」

「いえ、そうじゃなくて。初めからあなたは何も悪くないです。気にしなくていいですよ。」

本来、気分が下がり、後悔が押し寄せてしまうはずだった。しかし、彼のおかげで落ち込むどころか、思わず笑ってしまったている。そのことに気づくと今もまだ謝っている彼のことを好きになっていた。

ここまで思い出して、またため息をつく。自分で思

い出してまた気分が沈む。自覚はしているが、私はイライラしやすく、落ち込みやすい。気持ちがマイナスの方向に傾くことが多いのだ。それを支えてくれるのも彼だった。

『ピコーン』

スマホが鳴り、『ケンケン』のツイート伝える。今度はなんだ。嫌な予感がしながらスマホを開く。

「昨日はありがとう」

そのコメントともに投稿された写真は夜道に髪の毛長い女性が立っている写真。スマホを投げ捨てたい衝動に駆られるが必死にその気持ちを抑える。この人は誰？いったいどういうことなの？実際にその女性の姿を見て先ほどよりも多くの怒りが湧いてきた。一体どういうつもりなんだ。

『ピコーン』

また『ケンケン』のツイートだ。もう開く気にはならなかった。どうしてこうも連続で匂わせのツイートをするのかは理解できなかったが、SNS音痴の彼のことだと思えば納得できた。この『ケンケン』というハ

ンドルネームだって、ツイートの仕方だって教えたのは私だったのに…。

あの飲み会から一ヶ月ほど経った日。休憩時間。カフェで昼食をとっていると、そろそろと近づく男の姿があった。

「相席いいですか？」

そう話しかけてきたのは小鳥遊だった。

「あ、はい。どうぞどうぞ。」

「実は相談したいことがあるのですが」

「小鳥遊さんが私に？」

「はい。実は僕、SNS 関係にとっても疎くて。今まではそれもよかったのですが、最近はそうもいかなくて。SNS の使い方について教えてもらいたいのですが。」

どうして彼が私を頼ったのかはわからなかったがとても嬉しかったのは覚えている。

「では、この…ええとなんと読むのでしょうか」

「ああ、ツイッターですね」

「ツイッターと読むのですか。では、このアプリの使

い方を説明して欲しいです。」

私はツイッターの使い方について説明を始めた。そして、アカウントを作る段階になり、ハンドルネームに彼は悩み始めた。不特定多数の人が見る危険のあるツイッター。本名にするのは好ましくない。

「何かニックネームとか、学生のことではありませんでしたか」

「すみません。僕はあまり友達と呼べる存在が少なくて」

しまった。地雷を踏んでしまったか。少し後悔しつつ、

「じゃあ謙信という名前からケンケンとかはどうでしょうか？」

安直すぎると思いつつも提案する。

「ケンケン？」

彼の声が裏返える。

「すみません。そんなに嫌でしたか？」

「いや、僕にそんなフランクな名前は似合わないですよ」

「ネット上の名前ですから、実際のケンケン、がどう
いう人かはわからないと思いますが……。まあ、嫌なら
別の案を考えましょう。もともと適当に考えたので」
「いえ。嫌じゃないです。僕、ニックネームなんてつ
けてもらったことないからなんか気恥ずかしいです
ね。」

そして、恥ずかしがりながらも彼はハンドルネーム
をケンケンと設定した。

「それでは、ツイートの方法ですが……」

そして、ツイッターについての説明を終えると、も
うすでに休憩時間は数分過ぎていた。慌てて席を立ち
上がり、その場をさろうとした時、服の袖をちよいと
引かれる。

「あの……。僕と連絡先を交換してもらえないでしょう
か」

断られるかもと不安そうにする彼の様子に私の心
は持ってかれた。今まで彼に好感を抱いていたが、こ
れはそれとは違い、まるで雷に打たれたような、これ
が恋なんだと思うような感じ。休憩時間が過ぎている

ことを忘れ、彼と連絡先を交換したのはいうまでもな
い。

私の考えた名前で、教えた方法で、匂わせをされた
のはショックだった。電車が会社の最寄駅に着き、電
車を降りる。会社に着く頃には怒りを過ぎてもう何も
考えられなくなっていた。

「大丈夫？」

私の異変に気づいた同僚が声をかけてくれる。

「実はね……」

思わず、私は彼の匂わせのことについて愚痴を言っ
てしまう。

「それって何かの勘違いだよ。小鳥遊はそんなことす
る人じゃないよ。まずは、電話でもしてちゃんと理由
を聞いたら？」

そんな親切な同僚の言葉に耳を傾ける余裕は今の
私にはなかった。返事もそこそこにその場を立ち去る。
私は朝のパンケーキの投稿を削除する。あつちが先に
約束を破って返信しなかったのが悪いんだよね。そう

言い訳をして、彼との約束を破ってしまった。罪悪感がないわけではなかったがその気持ちを押し込んだ。その後の仕事は全く手につかなかった。ミスを連続し、上司に叱られてしまう。しまいには逆に体調を心配され、休憩をさせてもらう。仕事に支障を出してしまった自分の不出来さに嫌になりながらも一度外に出る。スマホを見ると大量の通知。ツイートではなく、ラインの電話の通知だ。もちろん彼から。いったい今度は何んの嫌がらせなのだろうか。スマホの電源を切つてしまおうかとも考えたが、先ほどの同僚のアドバイスを頭をよぎる。仕方がない。いずれは話さなくてはいけないのだからと彼の連絡先から彼に電話をかける。その電話はすぐに取られた。

「もしもしっ」

彼の声が勢いよく聞こえてくる。

「何？今、仕事なんだけだ」

「仕事ではないのにそう言う。」

「ごめんね。でも、どうしても謝りたくて。今日の朝のツイートのことだけ。あれ、友達がいたずらでや

ったんだ。もちろん友達のをせいだけじゃなくてスマホを無防備に置いた僕の責任もあつて言い訳をするつもりはないけど、あのツイートは僕が書いたものじゃないから。君に誤解させてしまったら本当に「ごめん」

「友達？」

私はヘナヘナと机に突つ伏してしまふ。また、私の誤解による空回り。もう嫌になつてしまふ。でも、本当によかった。私がほつとして黙りこくっていると、

「もしもし？大丈夫？本当にごめんね」

携帯から彼の声が聞こえてくる。

「ううん。全然気にしてないから大丈夫だよ。」

嘘だった。本当はすごく気にしていたのに。だけど、もうどうでもよくなつていた。自分がうっすらと笑みを浮かべていることに気づいた。やっぱり私を支えてくれるのは彼しかない。

次の日の朝。私のツイッターにはまた投稿が上がる。

「今日の朝ごはんは目玉焼きを乗せたトースト。彼の好きな朝ごはんです。」

平穏な日々

赤羽濤

目が覚めた。

眠気は取れても、うーんまだ起きたくないなあとおベッドに寝ころんだままの状態が目覚まし時計を見上げる。

10時。

やばい、完全に遅刻だ！とがばつと飛び起きて、気付く。

そうだ、今日から夏休みだった。それで、昨日は録りためたアニメを夜通し見ていたのだった：

一度大きなびとあくびをして、窓を開ける。もうセミがみんなみんなと短い命を削って精一杯叫んでいる。

遅い朝食を作り、食べようとした皆さまと手を合わせたところで、手が止まった。SNSに載せるわけでも、何か特別なものという訳でも

ないのに、これを残しておきたくて、スマホでかしやりと写真を撮る。

朝食をとり、また大きな伸びをする。

そうだ、そうぼーつとしていられない。夏休みになったらやろうとずっとため込んできたことが沢山あるのだ！

映画をレンタルする。好きなアーティストさんの新曲を聴く。マンガを大人買いする、etc…

さあ、何をしよう。夏休み前は、あれをしようこれをしようとやりたいことなんていくらでも思い浮かんだのに、いざはいどうぞと沢山の

選択肢を与えられると、迷ってしまつて何も出来ない。とりあえず、財布だけ持つて家を飛び出した。散歩していれば、何か思い浮かぶだろう。

歩いていたらお腹が空いてきて、目に映ったラーメン屋に飛び込んだ。女子が大盛りなんて頼んだらドン引きされるかな、という思いが一

瞬頭を掠めたが、振り切つてネギチャーシュー麺大盛りと叫ぶと、厨房からは威勢のいい毎度ありが聞こえ

てきた。

ああ美味しかった、また来ようと店を出る。

引き返して家へ向かう。本屋に入る。マンガコーナーをうろうろと何分か彷徨い、気付く。

欲しかった巻だけない。

嗚呼この世の不条理。

気晴らしにドーナツでも買って帰るか：

少し買い過ぎたドーナツを持って家に帰り、それからはずつとぼーつと音楽を聴いていた。

日も傾き始め、それにも飽きてきたころ、唐突に、ふと思った。

なんか、幸せだな、と。

こういう何気ない日常を、人々は幸せの二文字で表現するのだろうか、と。

さあ、明日は何をしよう。

まだ読んでいない長編小説を読むのもいいかもしれない。たまには、お菓子作りなどもしてみようか。

いや、今日はとりあえず。

温かいお風呂を沸かして、ゆつくり入ろう。

そして、何も考えずに眠るんだ。明日のことを考えるのは、別に明日だって構わないのだから。

おやすみなさい。



空の见えない部分

雨合千葉

引越す前の話になる。都心から遠くもないその都市は私が生まれてから程なくして開発が始まった。他と変わらず駅が中心だった。私の家は駅から微妙に遠い上にバスが通らなかつた。なので自転車で駅と行き来した。家を出て競馬場と反対方向に。飲食店と胸を寄

せた女性の看板の間を通り過ぎて、パチンコ屋の大きなモニターが見えたら自転車禁制区間はすぐそこだ。駅前に自転車の駐車があつた。賑わう街を見下ろす高架線の外れで青い柵が縦横にはしつていた。デコボコの石の亀裂をいくつか越える。スロープを下り、または上り、空いているところを探す。自転車を力いっぱい押して——入れるところが上がり坂になつていた——マシーンの「駐輪中」の文字を確認して出る。家族と出かけるときも、友達と遊びに行くときも、病気のときもそこを使った。一生付き合うことになる、なんて夢想も起こしたほどだ。

いつの日だかバスが通るようになってそればかり使うようになった。大通りからは怪しい店がいくつも見えた。クリニクに行くため駅に向かつたとき、違和感を覚えて駐輪場の方を見た。白いカバーで覆われていた。リニューアルラッシュの中、薄暗いところは不要になつたのだろうか。それ以上言葉にするものもなく、電車の外景のように通り過ぎた。連れられて再び駐輪場に行くとそこには白く透明なアーチがあつ

た。中にはこの街出身の名も知らぬ有名なポスターがところ狭しと並んでいた。乳白色の道はうねることなくまっすぐ伸びていた。それだのにポスターのせいで回りの様子が伺えないことが不安にさせた。ならばこの先にはさぞ奇妙なものがあるのかと思ったが、実際は見慣れた商業施設に繋がるだけだった。住む場所を移り、毎日のように知らないことにくわしても、あのとさほど揺らいだ気持ちにはなっていない。



歴史は繰り返す

来田 千斗

あなたは、ここを見つけ、訪れた、初めての知的生命体ですね。

私がこれから話しするのは、あそこの青い星：いえ、現在は黒ずんでいます：が生まれ、滅びるまでの物語です。ちなみに、あの星はかつて、「地球」と呼

ばれていました。

かつて：そう、地球の太陽公転時間の五十億倍ほど前：（炭素14の半減が地球年で5730年です）この星系の恒星、「太陽」の周りに集まったチリによって、8つの惑星と無数の小惑星ができました。太陽から三番目に近い惑星、それが地球です。それから数億年がたち、地球には生命が生まれました。そしてその生命は進化し、4億年ほど前、知的生命体「人」が生まれました。彼らはずっと、争い続けていました。しかしその一方で、長い歴史と海や山、砂漠で隔てられた沢山の国々でそれぞれ、多くの文明や文化が生まれました。人の科学力は、少しずつ進歩していききました初めは死肉をあさっていた人類は、石器、火、やり、弓矢と狩猟採集技術を高めていった人類は、原始的なシャーマニズム宗教を作り、それまで複数種がいた人類は一種のホモサピエンスだけとなりました。このころの資料は、第77棟にあります。（地球数学においては数字は10進法であらわれます）：

そうして、科学力を高めた人類ですが、彼らは、血

で血を洗う争いを、数千年もの間続けました。こん棒、やり、剣、弓矢、銃、大砲、ダイナマイト、軍艦、戦車、戦闘機、核兵器、さらにはコンピュータウイルス…。

そして、最後に、人類は、取り返しのつかない大きな過ちを、犯してしまったのです。

熾烈なハッキング合戦。都市機能がすべて停止し、人の半数が死に絶えてなお、人々は戦いをやめませんでした。いえ、それどころか、ますますひどく争うようになりました。生きるための争いが、たちまち何の意味もない争いとなりました。そして、遂に禁断のボタンが押されてしまいました。世界中のどこもが生き物のいない、誰もが死に絶えた荒野へと姿を変えました。その直前、私と無数の遺跡、遺産、データ、書籍が積まれたロケットがこの「月」へ無数の巨大な宇宙船によって運ばれました。私は5億地球年もの間、ここで、誰かが訪れることを待っていました。地球上には、僅かに生き残った人間がいると思われず。どうか、地球の復興に力を貸してください。お願いします。

そういうと、『彼』は一時的に停止した。

「まさか、遺跡や神話にわずかに痕跡が残る超古代文明を発掘することができるとは…」

「今まで上空から多数の建築物が確認されていたが、『敵国』の基地だと思っていたが…はんたいをおしとおしてここにきただけのことがあったな。」

その一週間後…

「あなたは、ここを見つけ、訪れた、二番目の知的生命体ですね…」

「くそっ！『敵国』に先を越されたか…。やはりここは奴らの領地だったか…」

「不法侵入者ヲ発見。攻撃ヲ行イマス。」
衝撃音。銃声。爆破音。悲鳴。

「あなたは、ここを見つけ、訪れた、初めての知的生命体ですね…」



たずねびと

チカコは少女を探していた。

遠野燈

チカコによく似た目を持ち、夫とよく似た笑い方をするはずの少女のことを探していた。

彼女はあどけなく、儂げで、そして可愛らしかった。

チカコはふと思い立った。あの子は、そろそろワンピースが似合う年頃じゃないかしら？と。

白がいいわ。きっとあの子は白が好き。だってよく似合うもの。

チカコは近所の手芸店に向かった。あの子を連れてよく行った店だった。店主は相変わらず芥子色のエプロンをして、看板には薄ら埃が積もっていた。

チカコはまず布地を探した。白の、丈夫な布地。すぐに破れてしまうようなことがないように。

次にレースの棚に向かった。あの子はこういう、ひらひらしたものが好きだった。中でも可愛いものを抜き取り、籠の中に落とした。

「あの子に服を作るんです。そろそろよそ行きがいるかと思って」

レジで、チカコは言った。店主は黙って、籠の中の布地を取り上げた。フリース地がサワサワと指を撫でた。

「今度また、連れてきますね。最近は忙しくてなかなか来れていなくて」

店主は答えなかった。ピツ、とバーコードを読み取る機械音だけが響いた。

「千五百八十円」

店主は商品の入った紙袋を差し出し、短く言った。

チカコは千円札を差し出した。店主は受け取ったそれをちらりと見て、黙って紙袋の中に入れた。

「喜ぶといいな」

「はい」

チカコは元気よく笑って、紙袋を胸に抱えた。

マユは少女を探していた。

少女はマユの親友だった。彼女のことを思い出す時、マユはいつも、モンシロチョウを連想する。すらりと伸びたむき出しの腕と、ふわふわと捉えどころのない動き。

かくれんぼが得意な子だった。

かくれんぼしようよ。と彼女が言う時、マユはいっ

も怖かった。彼女は隠れるのが上手すぎた。ついに最後まで、彼女を見つげられた鬼はいなかった。

彼女がいつかなくなってしまうのではないかと、マユは恐れていた。彼女が物陰に溶け込んで、呼吸を止め、消えてしまうのではないかと思っていた。

そして事実、彼女はいなくなってしまった。鬼になったマユがいくら探しても、彼女の姿はどこにもなかった。

マユは驚かなかった。

マユの母親は泣いてマユを抱きしめ、マユじやなくて良かった、良かったと繰り返し返した。緊急の集会が開かれ、校長先生が泣きながらスピーチをした。警察が搜索を始め、彼女の顔写真がテレビで流れた。

それでも彼女は見つからなかった。

マユは知っていた。そんなことをしたって、彼女は見つからない。

見つかるわけ、ないのに。

オオタは少女を探していた。

あまりに突然、オオタの前から消えた彼女は、今頃結婚していてもおかしくないような、歳になっているはずだった。

お姫様が好きな子だった。裾がひらひらしたものを着たがり、お城に連れて言つて欲しいとせがんだ。

王子様が迎えに来てくれる、というものに憧れる子だった。

パパおーじさまやつて、やつてとせがんで、結局パパはおーじさまじゃない！と言つて拗ねた。

そんなに怒るなら最初から俺に言うなよ、なんて思つても、彼女を前にしてしまつては断れるはずがない。そんなわけで、いつも頬を膨らませ、ごねる彼女を前にして、オオタは落ち込む羽目になるのだ。

できることなら、あの子を「本物の王子様」に会わせてやりたかった。オオタは目を閉じ、もう数える気もないため息を吐き出した。けれどもそんな後悔、今更したつて意味がないから。

彼女を迎えに来たのは、王子様なんかじゃなかった。オオタから彼女を奪い去つたのは、極めて普通の男

だった。

彼はあの子を連れ去つた。そしてそのまま。帰つて来なかつた。

シユンは少女を探していた。

彼女はシユンにそっくりで、でも同時に母にも、父にもよく似ていた。

よく笑い、よく泣く子だった。

シユンは時折夢を見た。ひどくリアルで、いやな夢だった。彼女の夢だ。

年下だというだけで、母にも、父にも甘やかされる彼女が嫌いな日も、年上だというだけで、シユンを慕い、ついてくる彼女が好きな日もあった。

決まつて好きな日に見る夢だった。

彼女が落ちていく、深い深い穴に落ちていく。

悲鳴を上げることもしせず、ただただ必死に手を伸ばして、彼女は落ちていく。

ヒユンヒユンと風を切る音だけが、かすかに響く。シユンは手を伸ばす。

彼女の顔は見えない。そこだけ真っ白なもやがかか
ってしまったように、何も見えない。

それでもあれは彼女だ。シユンの妹だ。

辺りは暗い。彼女は白い。彼女は声をあげない。た
だ風が、吹きすさんでいるだけ。

シユンの手は届かない。それは決まっている。それ
でも彼は、手を伸ばす。

彼女は手を下す。顔は見えない。シユンには分から
ない。なんで諦めてしまうんだろう。

シユンの手は空をつかんだ。ああ。
やっぱり彼女は落ちていく。

私は少女を探している。

落ちていく彼女を探している。

いいや、私は彼女を知っている。

白色の似合う、かくれんぼが得意で、お姫様が好き
な、よく笑う少女のことを。

彼女は自分が、探されていることを知っている。彼
らの声を知っている。彼女を必死で呼ぶ、風のうなり

にも似た彼らの声を。

彼女は知らない。自分がどこから来たのかを。

私は知っている。彼女に帰る場所なんてない。

彼女は思っている。皆、自分を探しているのだと。

私は分かっている。彼らが探しているのは私じゃな
い。

彼女は私。でも私は彼女じゃないの。彼女が知らな
いこと、けれども私は知っている。

チカコが探しているのは白色の似合う少女。でもそ
れは私じゃない。

マユが探しているのはかくれんぼの得意な少女。で
も違う。

オオタはお姫様が好きな少女を探している。いいえ、
私じゃない。

シユンが探している少女は私？ ううん、違う。

じゃあ誰？ みんなが探しているのは。

誰？ 私を探しているのは。私を見ているのは、待
ち構えているのは誰。

私には分からない。なんで私は落ちていくのか。息

が苦しいのか。前が見えないのか。

なぜ。私はこんなところにいなきやいけないの。なぜ。私はみんなと一緒にいられないの。

何かが足にまとわりつく。伸ばした手をくるむ。気持ちが悪いくるしい。

私は目を開く。真っ暗だ。でも私はここにいる。再び、手を伸ばす。

どうか、誰か。

誰か見つけて。



ある風景画

準清奏弥

広いお屋敷、母屋から裏庭を通って別邸。

あっちの邸では考えられないほど軽いドアを押し開けて、その向こうで今、私は初対面の男の人の膝に座っている。目の前には、ほとんど完成したような絵画。

男の手はパレットと筆を持って、しきりに絵の具をか

き回す。

その色を知ってる。私は知ってる。だって、毎日のように鏡で見るから。

この人を知ってる。私は知ってる。だって、ずっと会いたかった人だから。

ねえお父様、それは私の髪の色？ それとも、？

淡い翠色。みんな口をそろえて、「お母様にそっくり」って言うの。廊下に飾られたお母様のお顔を縁取るのは、もつと暗い短い髪なのに。

私がお母様に似てないの？ あの絵がお母様に似てないの？ お母様の橙色の目は、私の黄色い目と全然違うみたい。「何で私の目は黄色いの」って叔父様に聞いたら、「お母様に似なかつたんだよ」って返された。お母様に似なかつたんだつたらお父様に似たんだって、私知ってる。私の目の色はお父様に似てるんだ。

お父様なんでしょう、お屋敷の誰とも似てない男の人ほとんど誰もいないこっちの邸で、一人で絵を描いてた。ドアを開けた私を、きれいなレモン色の目で見た。使用人に聞いたことがあるの、お父様は画家なんです

つて。だから、私が絵を描くとみんなイヤそう。お馬に乗ってればうれしそうなのに。お母様はお馬に乗るのが好きだったらいいから。

お父様はどんな人なの？ 私、なんにも知らない。喋ってくれないんだもの。みんなは「馬の骨」とか「得体の知れない」とか「芸術家気取り」とか、そういう風に言うけど。お母様があんなに本気じゃなきや結婚させなかったって、おじい様も言ってた。この町の人じやないみたい、誰かわからないのなら。おじい様は、この町の全員とお友達だから。

「流れの画家と名家の娘、身分違いの恋！」
庭師の子供が言ってたのは本当なの。

答えるわけもなく、お父様の手が、手に握られた筆が、絵に吸い込まれるみたいに伸びた。私の髪の色が、一人の女の人の肩を飾った。

そこで終わりだった。お父様の左手がパレットを離して、紙の敷かれた床に落ちた。

お父様のため息と、私を抱きしめる腕。

でもね、振り返れないの、お父様。きつと今ならお父

様とお話できるんでしょう、でもダメなの。

これは、誰の絵？

山並みの上で、女の人が白いお馬に乗っている。こちらに顔を向けている。ずっと向こうに、お屋敷のあるこの町がある。女の人はい白いドレスと、私の髪の色にシヨールを身に着けている。

お父様、お父様、これは誰？ 何もわからないの。白いお馬は、厩舎にいるリートに似てる。じゃあこれはお母様なの？ わからないのよ。

麦わら帽子をかぶるお母様になんて会ったことない。白いドレスを着ているお母様なんて知らない。リートを駆けさせるお母様なんて見たことない。

何で、何で、この人のお顔はのっぺらぼうなの。

ねえお父様、お母様のこと、何で教えてくれないの。

迷子

螢草沙空

八月某日、某所にて。

「誰もいなくなつてないよね」

「うん、全員いる」

「よかった。やつぱ迷信だった」

「ねえ、×××、いなくない？」

「そんな」

とある廢墟には怪談話があつた。

七月下旬の某日、某所にて。

「えつ、嫌だよ」

「そんなこと言わないでさあ、行こうよ、オンボロ遊園地」

「まあ、なんか出そうだよね」

「でもさあ、もう取り壊されちゃうんでしょ」

『オンボロ遊園地』とは、私が通う学校の近くにあり、閉園して随分経つ遊園地のことだ。つくられた当初は賑わっていたそうだが、とあるアトラクションで事故があつてからはすっかり人足が遠のき、経営不振に陥つたらしい。

オンボロ遊園地には噂があつた。

人を吸い込む絵画。

事故が起こつた現場はお化け屋敷。そこに置かれていた一つの絵画に、事故で死んでしまった人の魂が融合して、近づいてきた生きている人を羨んで絵画に吸い込んでしまう、というまあありきたりな怪談話があつた。

そんなオンボロ遊園地も、来年には取り壊されることが決まっていた。だから、壊される前に肝試しに行こう、と私の友人たちは言い出したのだ。

私は一回は断つた。お化けや幽霊を信じているわけではないが、苦手なのだ。けれども友人たちの庄に押しされ、仕方なく行くことにした。

ここで、一緒に行くことになった仲間（友人）を確認しておく。

一人目、佐藤真由美。この肝試しの発案者。

二人目、小林あやか。オカルト研の幽霊部員。常にやる気がないが、今回だけはなぜか目を輝かせている。

三人目、平田美香。帰宅部。成績優秀。あやかとは幼馴染。

そして、私。

明日から夏休みが始まる。遊園地へは八月に行くことにした。何時集合かを決めて、私たちは別れた。

八月某日、オンボロ遊園地前、寂れた公園にて。

「よかった。ちゃんとみんな来たね！」

「やっぱ不気味だね。なんかいそう…」私は不安げに言った。

「だからいいんじゃない」

あやかは珍しくウキウキしているようだ。

「あやかがそんなに元気なの、なかなか見ないよね」美香も言うのだから相当珍しいのだろう。

「さ、しゅっぱーつ。そういえばさ、来たことある人いる？」

私は手を挙げた。閉園する前、来たことがあった。ということまで私が先頭を歩くことになった。

立ち入り禁止の看板は忘れられた。

「うわあーすごいね」

不思議な感覚だった。

そこには確かに色々なアトラクションがそのまま

残されていた。きつと使われていた当時のままで残されているのだろう。

気味が悪かった。

所々色褪せた塗装や、伸び切った雑草が長い空白の時間をこちらに伝えてくる。

「あ、ここじゃない。」「#」は縦中横」

そこには「お…しき よ…ば…や」と書かれている。所々字が読めない。

「それじゃあ、中に入ってみようよ」

「えー早速すぎない？」

「でも他にすることもないでしょ」

「まあそうだね…」

私たちは持参した懐中電灯片手に中に入ることにした。

仕掛けはそのまま残されたのだろう、たくさんのお気味な西洋風の置き物がたくさん置いてあった。骸骨とか。とにかく悪趣味。

「ハロウィンみたい」

「確かに」

「井戸とかあるのかと思つてた」声がよく響いて、怖い。

「ねえ、この絵じゃない？」真由美が言った。

懐中電灯で照らししてみる。周りに置かれたものよりもその絵は新しく見えた。

絵には山とその間を流れる川、遠くには町が描かれていた。手前には馬がいる。

「もう絵見つけたしき、帰ろうよ」

そう言ったのは私だった。なんとなく、ここに居座りたくなかった。用は済ませたんだし。

「そーだね。帰ろつかー」

あやかはもう少し見ていたようだったけれど、結局もう引き上げることにした。

「誰もいなくなつてないよね」

入り口に戻つてきたところで、あやかが言った。

「うん、全員いる」美香が言った。

「よかった。迷信だった」

あやかが安心したように言う。私は真つ青になりながら口を開いた。

「ねえ、真由美、いなくない？」

「え？」

不思議そうな二人の声が重なる。私は背筋がゾーっといきなり冷たくなつていくのを感じる。

「そんな」

「何怖いこと言つてんの？ 今日三人できたじゃん、ねえ、あやか……」

「さっきの絵のところに戻ろう」あやかがいきなりくるつと回つて戻り始めた。

「ちよつと、待つてよ」

「どうしたの？」

私たち二人は急いで追いかけた。

「あ、やつぱり……」

あやかは絵を見て呟いた。

絵は変化していた。

貴婦人が、馬に乗っている。さつきまでは確かに無かった。追加されている。

「この貴婦人が、きっと『真由美』の正体だよ」あやかはひどく冷静に言った。けれど私は何が言いたいのか

かうまく理解できなかった。

「あんた、この遊園地に小さい頃来たことがあるんですよ？」

「うん」

「私も全てわかったわけじゃない……けれど、真由美は、絵に帰りがかったんじゃないかな。なんらかの要因で、真由美は本来の居場所である絵から出てしまった。で、ここまでの行き方をあんたなら覚えていると思うって連れて行ってもらったんじゃないかな」

「私は、案内役にされたってこと？」

「まあ、そういうこと」

「へえ、そんな不思議なこともあるんだね」

「じゃ、帰ろっか」

私たちは再び入り口へと戻った。絵の中の貴婦人が笑っているように感じた。

「そういえば思い出した。このお化け屋敷の名前、四輪馬車だった」

昔、私がこの遊園地に来た時の思い出を話しながら三人で帰った。もう、ここに来ることはないだろう。

その後、オンボロ遊園地は取り壊された。あの絵はどうなったのか知らない。捨てられたのかもしれないし、どこかに売られたのかもしれない。

あの廃墟には怪談話なんて無かった。そこに居たのは、方向音痴な絵の中の貴婦人だった。



冷たい笑顔

任火物実

小さい頃から笑っている人がどこか怖かった。といってもみんなが怖いわけじゃない。特に大人の人が怖い事が多かった。

「大きい人が怖いのかな？」

昔、泣き出してしまった私を見て、母さんはよく困った様に笑っていた。その姿も何故か恐ろしく感じて、確かもっと泣いていたような気がする。

「朱里ちゃん、あーそーぼ」

「……うん、遊ぼ」

そんなどこか変で、それでいて怖がりな私にも仲良くしてくれる友達、華ちゃんがいた。華ちゃんは内気で孤立しがちな私を鬼ごっこ何かに誘ってくれていた。何でいつも親切で、可愛らしくて、人気者な華ちゃんが私なんかと遊んでくれるのか分からなくて、理由を聞いたことがある。

「朱里ちゃんと遊びたいから遊ぶんだけど。理由、理由？ え、何だろう」

うーんと唸って華ちゃんはでも、と続ける。

「朱里ちゃんと遊ぶのは楽しいよ」

そう言っただけで華ちゃんにはこりと笑った。その可愛らしい笑顔はとても温かくて、気が付いたら私も笑っていた。

小学校を卒業して中学生、高校生になっても笑った人が怖かった。むしろ、同年代の子の笑顔まで怖くなつてしまつていて、それが何より怖くて、嫌だった。特に、華ちゃんの笑顔を恐ろしく感じるようになっていたのが一番ショックだった。

「朱里ちゃん、私のこと嫌いになつた？」

悲しそうに目を伏せて聞いてきた華ちゃんに私は震える声でそんなことはないよ、と返すことしかできなかった。嫌いになつたわけではないのだ。あんなに仲の良かった華ちゃんを嫌いになるわけがない。ただ、華ちゃんの笑顔が怖くて避けがちになつているのも事実だった。

「良かった。ねえ、これからも私と遊んでくれる？」
そう言つて華ちゃんにはこりと笑つた。その可愛らしい笑顔はやはり怖くて、でも何処か悲しくて、気が付いたら私は華ちゃんを抱きしめていた。

高校を卒業して大学生になつても、相変わらず笑顔の人は怖かった。最近では怖くない笑顔の人を見つける事が難しくなつていた。

「朱里ちゃん。遊びに行こ」

流石に華ちゃんとは違う大学に行つたけど、今でもよく一緒に遊んでいる。華ちゃんはあまり笑わなくなつたけど、その代わり怖い笑顔をすることがほとんどしなくなつた。今の華ちゃんと遊ぶのはとても楽しい。でも、少し困つたこともある。

「そこのお嬢さん、ちよつとお時間貰えませんか。私はこういうもので……」

「あなた、あなたですよ。少しくらい良いですよね。僕はね、あの事務所の……」

とにかく色んな人に声をかけられるのだ。確かに華ちゃんは可愛いし、褒められると私も嬉しいけど、限度がある。何より、華ちゃん自身が興味を持つてしまつているのだ。

「へー〇〇事務所だつて」

「え、やめておきなよ。あの人少嫌な感じがするし」
「そうかな？ 大手の事務所だし、別に怪しくないでしょ」

そう言われると何も返せない。

「明日、少しだけ、少しだけ話を聞いてくるよ。それで駄目そうだったらやめておけば良いし」
そう言っただけで華ちゃんはにこりと笑った。その可愛らしい笑顔はとてもキラキラしていて、私は華ちゃんを応援することにした。

華ちゃんの笑顔を観たのはそれで最後だった。

華ちゃんが自殺した、華ちゃんのお母さんからその事を聞いたとき、ありきたりな言葉だけど、頭が真っ白になって何も考えられなかった。最後に華ちゃんと別れた後、就活や新人研修で忙しくてあまり連絡をしていなかった、その間のことだった。

お葬式は酷く空虚でむなしかった。響くお経の声も、漂う線香の匂いも何処か他人事の様で、実感がわかなかつた。ふと視線をさまよわせると、華ちゃんの遺影と目が合った。何も言わず、華ちゃんにはにこりと笑っていた。その可愛らしい笑顔はとてもキラキラしてて、

温かくて、それなのに今までに見たことがないくらい怖くて、気が付いたら私は泣いていた。華ちゃんが死んでから初めて泣いた。それなのにまだお葬式は写真の様だった。

家に帰っても何もする気が起きなくて、ひたすらぼんやりしていた。何とはなしに携帯を開き、華ちゃんとの他愛ない会話を眺める。その時、とある会話が目についた。

『ヤッホー、元気？ 私はぼちぼちな。最近仕事が忙しいから大変。まだ下積みの段階らしいから仕方ないんだけどね。』

そこから一言、二言話して、そこでトーク履歴は終わっていた。ほんの数日前の会話。

『疲れちゃった』

この一言が頭の中を回る。

(どうして)

どうして私は華ちゃんのSNSに気付けなかったんだろう。どうしてあの日、華ちゃんが勧誘されたとき、も

つと強く止めなかつたんだろう。あの男の人が怖い笑顔だったの、気づいてたのに。華ちゃんの残した日記で分かったことだけど、あの日声を掛けてきた男の人は大手の芸能事務所の人でも何でもなくて、それに気づいた時には写真を元に脅されていて、誰にも相談できる状況じゃ無かつたらしい。私しか、華ちゃんの助けを読み取れなかつたのに……私が、華ちゃんを殺したようなものだ。

頭の中に、沢山のこりと笑つた華ちゃんが浮かんで消えていく。怖いものも、幸福そうなものも、全部温かくて、気づいたら私はまた泣いていた。華ちゃんはもう冷たくなっている。もう戻らない。初めて私は華ちゃんの死を実感した、受け入れた。

大学を卒業して、社会人になつてもやつぱり笑顔は怖かつた。もう今となつては怖くない笑顔は一つしかない。その笑顔もだんだん粘土に埋もれている。何も言わず、華ちゃんにはこりと笑っている。その笑顔は温かいはずなのに、温度を感じなくて、気が付いたら私も怖い仮面をかぶつて街を歩いていた。

仮面

霜雪海十羽

私は仮面をかぶっている。ここにこ笑つた仮面を顔に張り付けて、それで笑つた気になっている。悲しいときは眉を下げた泣き顔の仮面。怒ったときは真っ赤な鬼の仮面。仮面を張り付けるだけで自分の思うように感情を表現できるのだから、とっても楽なのだ。自分ではうまく表せない感情でも、仮面は上手に表してくれる。つくづく便利なものだなと思う。

初めて仮面をかぶったときは覚えていないけれど、私は仮面をかぶるのが昔からうまかつた。仮面をかぶるのが下手くそなクラスメイトを見て、私ならもつとうまくやるのに、おいつも思っていた。クラスメイトたちはいつも、仮面をかぶるのが下手くそで、思ったことはすぐ顔に出て、全力で自分の感情を表していた。まるで仮面なんて必要ないかのように振舞う彼らが少しだけ眩しくて、私はいつも一人でした。おかげで

友達は全然できなかったけど、かといって疎まれるなんてこともなく、波風の立たない平和な学校生活を送っていた。

大学を卒業して会社に就職すると、前よりも仮面をかぶることが増えた。仮面をかぶることをうつつうしいと思つたことはないけれど、学生の頃より仮面をかぶっている人が多いことが新鮮だった。

今日も朝早く起きて会社に向かう。自分のデスクに座り、仕事を始める。少し経つと、上司に呼び出された。先日提出していた書類にミスがあったらしい。このところバタバタと慌ただしかったから、見逃してしまつたのだろう。疲れていたのだろうか、私はすみませんと謝りながら、笑顔の仮面をかぶってしまった。瞬時に自分のやつてしまったことを悟るが、時すでに遅く、なにをヘラヘラ笑っているんだと上司からの怒鳴り声飛び。私は瞬時に殊勝な仮面をかぶり、その場をやりすごした。

「災難だったね。あの人も疲れていたんだろうし、気

にしないでいいよ」

やつと自分のデスクに戻つた時、向かい側から声が聞こえた。声の主は私の同期で、ここでは珍しい、仮面をかぶるのが下手くそな人——仮面が必要ない人だ。かつてのクラスメイトと同じで、私は彼女のことがかよっぱり苦手だ。

「良かったら今日、飲みに行かない？」

すると、先ほどの言葉に続けて、まるでなんでもないかのように彼女は提案を持ち掛けてきた。私は驚いた。飲み会に行くことはあつても個人で誘われたのは初めてだったのだ。なぜだろうと疑問に思いつつも、波風を立たせないようにするために、私はおとなしく笑顔の仮面をかぶって提案を了承した。

「いつも表情を作ってるでしょ。無理しないでいいのに」

その夜。〰人で居酒屋に入り、互いの話もそれなりに弾み、酔いが回ってきたところで、いつも思っていたんだけど、と前置きして彼女が言った。その言葉は私

の酔いを醒まさせるには充分で、私は仮面をかぶるのも忘れて彼女を見つめた。数秒の後、私は慌てて笑顔の仮面をかぶって彼女になんのことだと問いかけたが、彼女は悲しそうな目をして、こう言った。曰く、無理やり笑顔をつくらなくていい。つらいことやため込んでいることがあつたら、相談してほしい。せつかくの同期なんだから、仲良くなりたい。酔いもあつてか、彼女はよくしゃべった。私はそれらの言葉を、笑顔の仮面をかぶって聞いていた。何を言っているのかわからない、そんな顔をして。私が仮面をかぶっている間も、彼女はずっと私のことを見ていた。そのまっすぐなまなざしを見ているうちに、これ以上一緒にいることが耐えられなくなつてきて、私は彼女の話の途中で立ち上がると、代金を置いて、彼女の静止の声にも構わず店を出た。

家に向かつて夜道を一人歩く。足取りは段々重くなつていって、とうとう私は立ち止まった。彼女の言葉が思い出される。あんなことを言われたのは、初めてだった。私は、無理をしていたのだろうか。そんなわけ

はない。そんなわけはないと思うのだけど、なぜか彼女に言われたことが頭から離れない。彼女のまっすぐなまなざしは、あの日私が眩しくて目を細めたクラスメイトと同じだった。

彼女のことを、仮面を必要としない人のことがうらやましくないと言ったら嘘になる。けれど、私にはこれ以外の生き方がわからないのだ。

私はこれからも、仮面をかぶって、この社会を生き抜いていく。それは決して間違っていないはずだ。ただ今だけは、少しだけ仮面をかぶるのがうつつとうしく思えた。



こちらの作品は担当者が締め切りまでに小説を完成
させられませんでしたので絵のみの紹介になります。
書いてくださった美術部の方、本当に申し訳ありませ
ん。